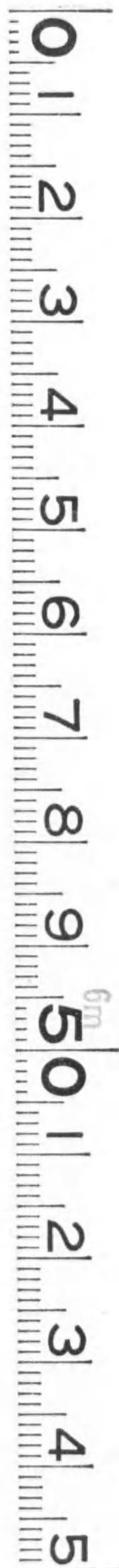


550

116



始



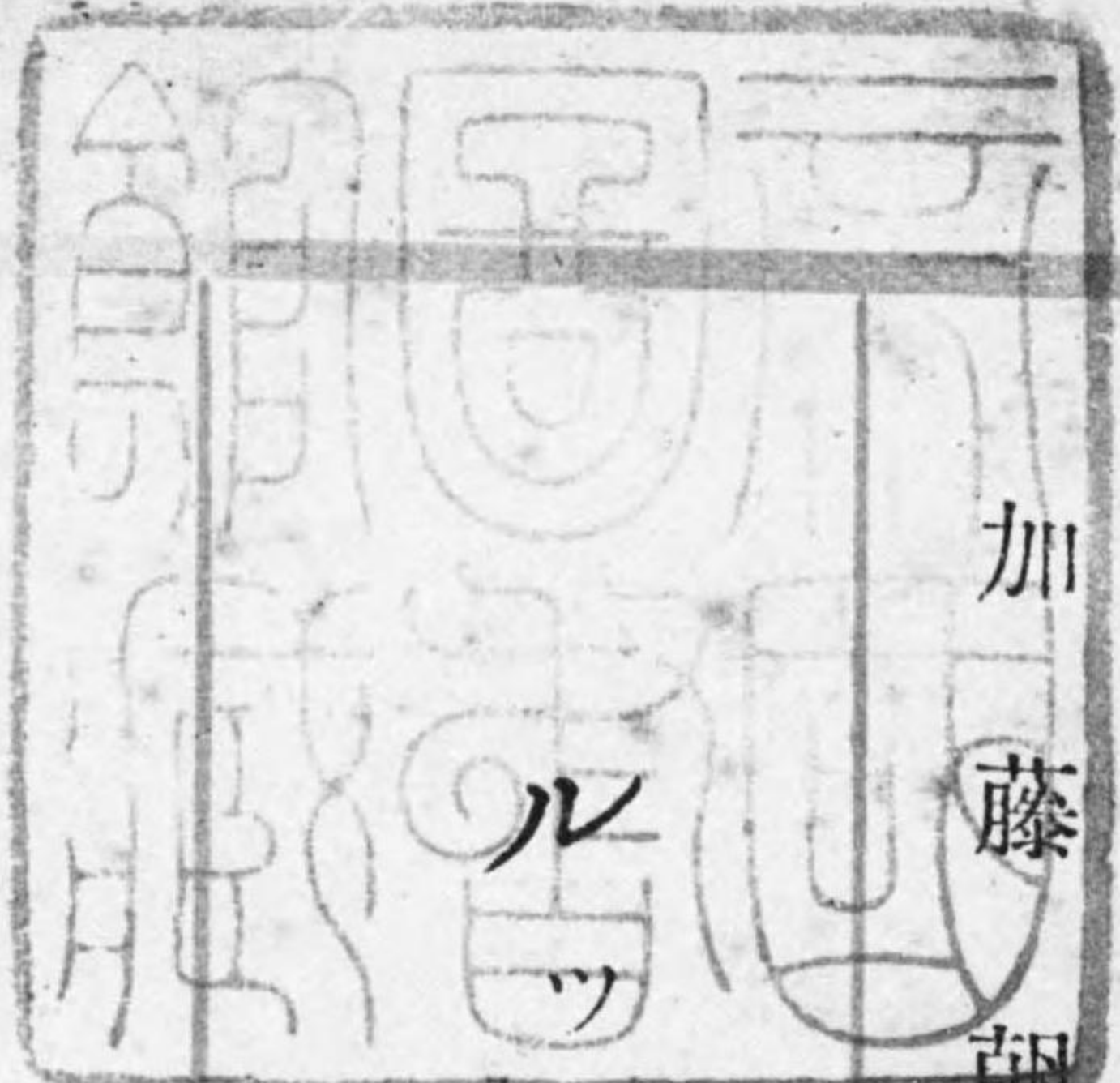


7.2.4



ジャン・ジャツク・ルツソオ著

加藤朝鳥編



ソオ懺悔録

生方書店發行

大正  
15. 10. 19  
内交



序

550-116

漠然自傳と云つても種々あらう。セントアウガスチンの書いたのは、悔悟に至るの徑路道程であつた。迷霧の間をさ迷ふて眞諦の輝を見るまでの過ぎこしかたを顧みて嚴かに信仰の證券を示すこと、これは教權の旺な時代では最も信頼すべき人生路の標的であつたに違ひないと思はれる。これに較べるとゲーテはその自傳を天才發展史として書いた。如何なる境涯に如何にして天才は發露し來るか、天才が周圍と奮闘する歴史、是れも僕等の神興を誘ふに最も力のあるものであつた。がゲーテもセントアウガスチンもその自傳の讀者に強るものは一種の驚異である。

1

ルツソオは赤裸々の人間を描かうとした。けれども同じ赤裸々と云つても最近代の文藝思潮が稍々もすれば指向する純粹な慘酷性な客觀的解剖ではなくて、彼には燃ゆる様な情意の上に敢て赤裸々になつて見せた強い我執の影がある。『吾れはかく



のごとく罪惡を犯せり。さりながら世界の何處に吾れより罪惡の輕き人があらうか』と云ふのは彼が自傳を書く上の意氣であつた。そしてバラドキシカルにも彼は懺悔によつて彼の辯護をなさうと心掛けた。此の意味からして彼の懺悔の形式は刑を期待するものでなくて、釋放の光明を欣求して居る。欣求でなくて、確信を待つて居る。彼は此の確信を以つて真相を暴露するに躊躇しなかつた。

真相そのもの以外に彼は生活の證券を求めなかつた。彼の懺悔は生の爲めの懺悔である。強い信仰ならばセントアウガスチンに求めよ。天才の輝きならばゲーテに求めよ。ルツソオはたゞ真相のまゝに生きやうとする勇者にとつての伴侶となるばかりである。

ルツソオは英雄でも偉人でもない。平凡以下であると云ふものも多い。ネルソン百科全書によると彼の性質は『情慾に直ぐ負ける。ヒステリーの。躰ない女學生以上の自惚。道徳心の皆無。度を越えた虚榮心。異常な耽美性。文學的表現力の驚嘆

に値する天賦』などと數へてある。島崎藤村氏堺枯川氏等も彼を凡人だと評して居る。おそらく真相に生きると云ふ勇氣以外に巷間にいくらかも居る人間と變りは無かつたのであらう。彼は生前においても多くの人に馬鹿にされた。その馬鹿にされる理由の一つとして、彼自身が數へたのに、彼は直覺が鋭く、刹那が輝く直覺に眩して、理智的考量をなす隙がなかつたと云つて居る。即ち熱情の高い愚人であつた。

真相暴露の上でルツソオの主權的なのに対して露國のクロボトキンの自傳が元因結果の上から這麼場合に這麼風になつたと云ふ科學的な客觀的態度で書いてあるのは更に所謂近代的と云へば嵌るかも知れぬが、僕等は此の二つの自傳の上に此の意味から明に背景をなした時代の特相を觀取することが出来る。佛蘭西のクラシシズムの巢窩を、目茶苦茶に破壊せねばならなかつたルツソオの當時であつて見れば、彼の自然主義には燃ゆるやうな主觀性がなくてはならなかつた事情は判然する。サンブープも云つた様にルツソオの文學は全く佛文學をクラシシズムの桎梏から自由



の野に誘ひだしたもので、元始的自然主義の主観性がルツソオに燃えてクロボトキ  
ンに消えるまでの徑路は是非とも現代人が經なくてはならぬ思想生活上の義務課程  
である。ルツソオの懺悔録を讀むではじめて近代文藝の味はひを知つたと藤村氏が  
云つた言葉もその意味から更に深く頷かれるではないか。

加藤朝鳥識

ルツ  
オツ  
懺  
悔  
録

第  
一  
卷

加藤朝鳥

自然の眞をそのままの人間一人——赤裸々にしてわが同胞に見せたい。  
最後の審判の籟の鳴る時、私はこの本を手にして大審判者の面前で、私の思つた  
事、爲した事は茲にあると高言する心算だ。

一七二二年私はゼネバで市民イザツクルツソオとザンスベルナルとの間に生れ  
た。私の父の財産としては何分にも祖父の貧しい資産をしかも十五人の子供に分配  
したのであるから、父の所得分と言つたら有るか無いかに滅ぜられて、一家の口を



濡して行くには唯手に覺えた時計職に手寄るより外途がなかつた。さて母と父とは筒井筒の戀で結婚し、母は若い頃からその艶な姿と才能との爲め多くの人に激しい熱情を獻けられたが、これを拒む十二分の貞操を持つて居た。が私を産み落した後亡くなつた。私は生れるとから身體が弱くて尿閉を病むだが、父の姉妹に愛嬌のある氣の利いた未婚の人があつて、厚い介抱で私を育ててあげてくれた。そして私は其の女から齡に相應ぬ精緻な感情を學むだ。夕餉の後などには母が残した小説を讀んだりした。従つて私の情緒は一種特有な性質に變じて奇矯な浪漫的な思想を帯びた人生を送るやうになつた。

母の遺した小説の耽讀は聽て止めて、宣教師であつた祖父の書架を探し始めるやうになつた。私が愛讀した本のなかには「教會と帝國の歴史」「世界史論」等があつたが中にもブルタクの英雄傳は私を囚へてしまつた。私は希臘の英雄を盛に憧憬したのであつた。私には七つ年上の兄があつたが、此の兄は私のやうに周圍から可愛が

られず、何處かへ逃亡してしまつた。だから後に残つた私だけは獨兒の様に父母乳母、親戚友達近所の人々に愛を以て纏はれた。特に小母からは音樂の興味を惹き起された。鈍くはあつたが幼い頃の私の音樂を悦ぶ傾向は此の時私の生涯の方向を決定する程に強かつた。かくて私は愛につままれながら腕白に育つた。随分酷い腕白をする。ある時隣のクロオと云ふ内儀さんがお説教を聽きに行つた留守中に、その鍋の中へ小便をし込んで置くやうな亂暴もした。斯う云ふ風な少年時代——驕慢で柔軟を兼ねた感情、怯懦と豪放とを併せた性格であつて常に薄志と敢爲との中間に那箇着かずに漂つた。矛盾が私のライフの門出の感觸とも云ふべきものであつた。禁慾と歡樂、放縱と謹慎、それが那箇も私とは離れてゐた。

父はその後さる佛蘭西人と喧嘩をして、その爲め本國から脱籍したい考を持ち、ニヨンと云ふ處に行つてしまつた。私だけが取り残されてボツシユと云ふ處に居る要塞勤務の小父さんの許に托された。小父さんにも私位の年頃の獨子があつた。此



の徒弟と二人で仲よく、宣教師のランベリツシユ嬢の許にラテン語を習いに通つた。従弟は私と同様な氣質を持つて居て、五年の長い間喧嘩もせないうで眞實親しく幸福に暮した。そんなことなど今想ひだしても懐しい殊にランベリツシユ嬢の美しく優しかつた事、嬢は三十歳私は八歳、斯う云ふ年齢の差異があつたにもかゝらず私の幼い心のうちには既に女性に對する渴仰心があつたのである。幼い私は快活な方であつたから、ランベリツシユ嬢から教へられた事を質問されたりなどする場合に、嬢と言葉を交すのが嬉しさに平氣で忘れた事や間違つた事を答へるのであつたが、それが私自身には羞しいとも何とも思はなかつた、だが只嬢が私の出鱈目な爲め困り抜いた當惑な顔をするのが如何にも心苦しい。何とかして嬢の心を歡ばせたいと思ふ。がさう思ふ心が何時しかまた變つて兎もかく嬢と相對する時は心持がいゝ。叱られてもいゝから言葉をかはしたい。聽て嬢に叱られるのが恍惚として面白くなつて來た。叱られてもいゝから嬢の側に接近する機會を歡ぶ。しまいには

ランベリツシユ嬢が私に對する懲戒の目的は一向達せられなくなつてしまつた。その時まで私達は嬢の部屋に寝た。冬など嬢と一つベッドにさへ寝たがやがて嬢から、大供の扱をうけて別な部屋に寝させられると云ふ悲運になつてしまつた。

私の心は無邪氣であつたが、突然その幼時の無邪氣が斷滅された。それは櫛の事件だ。ある時私が厨の近くに居ると傍の爐の上に嬢の洗つた櫛が乾してあつた處がその櫛の齒が一本何うも缺けて居た爲めにあとでそれは私の故だと云ふ事になつてしまつて皆して私を責める。けれども私は其の櫛には近よりもしなかつた。どんな辯解をしても皆が暴力を用ゐて私の行爲にしてしまつて私に罪を白状させ謝罪させやうとする。とうとう私を無實な罪に陥して罰してしまつた。私は此の時、正義の蹂躪せらるるのに對して熱烈な傲岸な不屈な反抗を續けて『肉刑の執行者』と云つて怒鳴つた。幼年の穩かな生活は今も明瞭におぼえて居るが此の一刹那に突然に斷滅して全く終を告げたのである。



それからゼネバに歸つて伯父のもとに養はれた。伯父は私を技術家にしやうと思つて數學を修めさせた。斯う云ふ間にも私は折々ニヨンに居る父を訪ねるのを樂みにした。此處では父が人々に愛されて居たので私も行く度々に近所の人々から愛された。かうして毎度ニヨンの人々と知り合ひになつて行くのであつたが其の中にベルソン嬢と云ふのがあつた。嬢は二十一、私は十一、何時しか嬢を少年の夢ながら戀人のやうに思ひ做なしてしまつた。私が有頂天に情を燃やして狂亂してゐる有様を傍で見てるたら、かなり滑稽な芝居であつたらう。此のベルソン嬢への溺はま惑り方が餘り猛烈で誰でも彼女に近寄るのを黙つて見てゐられぬ程公開おほびらで獨占的であつた。しかしそれにもかゝらず、私は別にまた一人の年若なゴトンと云ふ娘とたびたび密會をした。ベルソン嬢とは心を許し合つてゐるでもなくて親しかつたが、反對にゴトン嬢とは親密の頂上にありながら、その前に出ると焦れて氣の揉めること夥おほだしい。此の女と永く一緒に居るやうな事があつたら幼い私は瘵けいれん撃が止み間なく連續して發作する爲め死んで了つたかも知れぬゴトン嬢との戀は密會式でしばらく中絶なかたえてしまつたがベルソン嬢とは随分長く續いた。がしまいの別れ目と云ふのは何でも音信が絶えてから一週間程たつて私にボンボンと手套とを送つて呉れてそして他の紳士に結婚してしまつた。

愚圖々々して居るうちに少年の時は經つてしまふ。何か「ぢり〜と金の溜る道」をと云つて私は公證人の許に見習ひにやられたが駄目、今度は彫刻家に弟子入した。弟子と云ふよりは純粹な従弟奉公の身の上である。今までの可愛がられた生活とは正反對で萬事が思ふ様にならぬ。金も無論無い。けれども私は金と云ふ事に就いては冷淡であつた。が自分の境遇は如何にも羨望と無力との慘めなもので他人と我身とを較べてどうにも浦山しく堪えられぬ。とは云へ物盗みはしなかつた。只ある時親切心から悪い奴の手先になつて石刀栢フスバラカスを盗んだ事と、林檎を取らうと思つて主人



に見つけられたこと、丈けはあつた。斯う云ふ貧乏のあいだにも知つて居る本屋から掛で籍りて來ては讀書を盛にやつた。拂ふだけの金が無い時には、襦衣や襟飾や服まで皆渡した。主人は私が書物を耽讀して居るのを見ると本職の彫刻を勉強しないと云つて殴打する。其の頃から私は喧嘩、殴打、濫讀、だんだん頽廢して來る。私の氣質は暗い荒んだものになつてしまつた。するうち本を讀む癖が郊外散歩に變つた。私は十六歳になつて居る。日曜日になると説教が濟み次第仲間の人達は一緒に郊外に連れだしにくる。出來ることなら仲間から脱けだしたいが、併し一度仲間に入つて了へば一番熱心にやつて一番餘計に歩き廻る。動かすのも容易でないかはりに阻めることも難しい。晩くなつて市の門から鎖め出しを食ふ。翌日は果して罰。私は遂に三度目の鎖め出しの時、もう二度と此のゼネバ市には歸るまいと思つた。従弟からもらった旅費で故郷を捨て、しまつた。而して放浪の旅にのぼつた。私の哀史はこれから悲惨の幕開きとなる。

## 第二卷

五六日間郊外を的もなくさ迷ひまはつたがどうすることも出來ぬ。最後に因り抜いた結果、コンフィグノンとに行つて其處の舊教徒の牧師のボンヴェル氏を頼つた。氏は有徳の人であつて、私が家出して斯して少年の頃から世路の悲惨に飛び込まふとするのを氣づかつた。此の牧師はいろいろ私の身の振りかたを考へたのち、『アマシイの情深い男爵夫人の許に身を寄せよ』と薦めて呉れた。此のアマシイの男爵夫人と云ふのは名をワレンスと云つて、輕機みのことから破鏡の悲をして後舊教信者となり、サルジニの王から多額の年金を貰つてその邊の貧民の信仰を保護して行くこと云ふ聖者のやうな婦人であつた。女盛の二十八歳。私は什麼にかして此の婦人の清い心を得たいと思つてボンヴェル牧師からの紹介狀に沿へて、形容澤山な一篇の美文に私の胸のうちに燃えたつた心を罩めて婦人に送つた。愛すべき練磨のある驚嘆す



べき婦人ワレンス！ 私の胸には一生其の名がかくして刻みつけられたのである。ワレンス婦人の薦めで私は舊教信者となる準備として、トリノに行つて、學林に修業することになつた。それに要する旅費などは、聖き用途と云ふ名目のもとにワレンス夫人の懐から出た。茲で一寸云はねばならぬが私がトリノに向けて出發したあとで、父が私の所をつきとめて尋ねて來た事である。が父はアヌシイまで來て私の近狀を聞いたので冷淡にも引き返してしまつた。父は此の時後妻を迎えて居た。私の父の冷淡と云ふ事から種々な深い反省を興へられて世路をわたる心掛を進めた。私は田舎者夫婦にアヌシイからトリノ迄案内されたが、その田舎者の内儀さんが愛嬌を振りまいては私の持つて居た金を大かた捲きあけてしまつた。愈々トリノに着いて學林に這つたものの、新教の家に育つた私が容易の事で舊教に改宗が出來さうにも無い。スラボニアの人間やモール族の求道者や、賣春婦であつたかとも思はれるやうな女や、這麼こんな雜多ななかに新らしく宗教を改めると云ふ態度にはどう

してもなれぬ。私には此の學林に居るのが堪え難く辛い。此の辛いのを遁れるのは一日も早く洗禮を受ける事だと思つて、もう眞面目に教戒僧と信仰上の問答をするのが面倒臭くなつて、それで洗禮を受けた。多勢が祝福して呉れて特に困難を極めた改宗だと云つて集めた喜捨金が二十フラン(八圓)、是れを私に呉れた。これさえあれば既うよしと、學林を後に脱兎の如くに飛び出した。金を持つた人の安心と云ふ味はいを私は其の時始めて知つた。その日私は兵營に行つて兵隊を見物かたがた説教のやうなものをして見て後、凝乳シヨシカと棒麵包と云ふ嘗つて覺えない幸福な晚餐を五スウ(十錢)で食べ、それから宿屋を探した。丁度軍人の妻で一夜一スウ(二錢)で泊ると云ふ宿が見つかった。私は早速そこに宿り込む毎日朝になると國王の彌撒ミサに出かけて見る。私にとっては國王の彌撒ミサに行くこと云ふ事が面白い光榮の様に思はれてならなかつた。そして種々な空想にふけるのであつた。茲に美しい情の王姫があればいゝに、私はその王姫と一篇の小説の筋を作るのだがと其麼事を絶えず想像



した。

或朝空腹を抱えながら私は町を歩いた。するとある舗の店櫓しよまに硝子越しに艶麗な若い女の姿が目にとまつた。私は心に多少覚えのある味な手段でその女を張つて見ると、朝餉あさめしの御馳走をしてくれた。是れが第一の私の冒陰アバンチュールであつた。それから私は其の女の許に通ひ出した。此の頃こう云ふアバンチュールを求める位面白いことは私に無かつた。が此の女の亭主は中々の嫉妬家でいつも番頭に妻君の目付役をさせて居た。或る日曜の晩餐會で、聖ドミニヨ派の僧も來て居る前で、とうとう嫉妬家は私を尻眼に見ながら妻君の不貞を鳴しかけたが、僧のとりなしで私は無難にそこをのがれる事が出來た。只黙つてすすごしと出て行く外は無かつた。殊にその生れが伊太利亞だと云ふ婀娜あだつばい愛らしい女を那麼野獸おんなのやうな男の餌にするのが口惜くて堪えられなかつた。その女とはそれなり縁がきれたがお蔭で着物が澤山出來た。今度は宿の内儀さんの心當りでヴェルチェリー伯爵夫人の許に養はれる事になつ

た。伯爵夫人は末亡人であつて佛蘭西文學が好きであつたが、胸に腫物はれものが出來て自分で執筆が出來ず。私はその口授を筆記する役目であつた。私は茲でも心のうちに浪漫的なアバンチュールを期待して居たのであるが、此の時遅しいくばくもなく伯爵夫人は死の床に着いてしまつた。その頃ロレンチイと云ふ執事の一味は、夫人の愛情が私に遷ることを非常に氣扱つて種々な策を弄した事もあつた。夫人の没後私は遺物みやとして三十リイブルの金と表衣一枚とを貰つて行くのであつた。伯爵夫人の邸に居た間私は生涯忘れ得ない罪を犯した。それは執事の娘の銀絲に紅入りのリボンが私が盗んだ事で、詮索せんさくの結果私は包みきれなくなり『マリオンに貰つた』と云つて其のリボンを出した。マリオンとは料理番をつとめた娘であつたが、その時はもう辭めて居た。さあこうなると穩でない。マリオンは呼びよせられて糺明きうめいされるのでマリオンは怨めしさうに私を見かへしたのであるが、私は心を鬼にして非を徹してしまつた。不思議にも斯の薄運な少女を無害の罪科に陥れた動機は全く彼女が可愛



がつたからであつた。いや眞實だ。この女が私の心に絶えず浮んで居た——から私はそれを材料に使つたので、自分が爲て遣らうと考へてゐた事を、其の儘裏返して彼が爲たのだと誣しいたのだ。リボンを彼女に興おっかりたいと云ふ願があつたからそれに基いてそのあべこべを云つたのだ。

### 第三卷

ヴェルチエルリイ伯爵夫人の家を出た私は矢張元の宿に歸つて溜息を吐くより外はなかつた。頻しきりと女の事などが考へられて妙にジレた心持が五六週間も續く、思ひあぐむだ末伯爵夫人の處で知り合になつたゲイム法師を尋ねて境遇を訴へたりして見た、法師のその折の教訓としては、絶えず小善せうぜんを爲すには非常の大事を爲す程の勇氣が要る、と云ふ事であつた。そこへ『よい位地が見つかつた』と思ひがけなくもローク邸から使が來たので行つて見ると『最初は下男として棲み込むのであるが

勤め振りで直ぐ引きあけられる』と云ふ話。ヤレ々々又下男かと思つたが、聽てその伯邸の下男となつたのだ。とは云へ上等な下男だ。職務としては食卓の給仕をしたり手紙を書いたりする事であつて馬車の後に乗つて外出のお供をするやうな役では無かつた。務大事で他の事は忘れて居たが、只一つ主人ゴオボン伯の孫嬢のブレイユ嬢のことが始終氣に掛つた。嬢は私と同年代で器量、色艶、髪かみの黒さ、禮服姿の首から肩にかけての好いスタイル、喪服姿のしみじみ落ちついた美しさ、たゞ恍惚うつろと見とれるばかりである私はせめて一言の言葉でもと思つたが、嬢は振向いて呉れもしなかつたが或日の事、大勢の來客の食卓談に、フト佛蘭西の古語に就いて疑問が起つた。此の地方の人は佛蘭西語をあまり知らぬ。みんな判らない話しあつて居る。そこを主人のゴオボン伯は私が微笑して居るのを見て、意見を求められた。私は明白にそれを説明すると、誰よりも先づ嬢の満足した顔が私に向いた。すると私はゾクゾクする程悦しかつた暫くすると嬢は又靜に私の方に向いて『水を頂戴』と心安け



な低い聲で云つた私は嬉しくて堪らず、直ぐに走り寄つたが、手先がブルブルして水を翻し、嬢の兄さんから咎められ私も嬢も顔を眞赤にした。が此の戀はこれつきりであつた、主人の伯は大變私を可愛がり、私を伯の次男ゴオボン法師のお附にした。私は毎朝法師から拉典語を教はると云ふ有様で半ば下男で半ば學生だ。奇麗な伊太利語も覺えたし、一般文學の趣味も餘程深入りをして私は有爲な青年だと云ふことに評判されだした。愈々私は希望をかけられる様になつた。伯の長子で現在維納に大使であり、將來は大臣にならうと云ふ人が、才學ある士と昵近ちつきんになつて置きたいとの事で、暗に私が其の親友たるべく擬せられたのであつたが、私にはその立身の程度が呑み込めず、其戀事よりはモット氣の利いた、婦人にでも關係のある面白い派手なことを爲たさに此の好機會を取り逃して了つた。

或る時ゼネバの幼友達バルクに會つた。彼の快活な詣謹的な頓智のある面白い態度！此の美少年に私は全く魂を奪はれて愛着してしまつた。私はそれ故に主人に

對する務めを怠つて、此の愛する友達と遊び過ぎ。遂に伯爵邸に居られなくなつた。私と少年と一所に旅に出た。旅はゾク／＼する程うれしい。何となれば遙はるかの先に懐しいワレンス夫人の姿が描かれて居たから、

私は先にゴオボン法師から『白鷺の噴水器』を貰つて居たのでこれこそ旅の屈強くつきやうな道具だと到る處の宿屋で、お上さんや女中達に爲て見せて機嫌をとつたが、矢張り出立の時には宿料を拂はぬ譯に行かなかつた。這麼旅行が續いて次第にワレンス夫人の住家に近づくに隨つて何となくバルクと別れ度なつて來た。悪く思はずに別れねばならぬと、態わざと冷淡にして左様ならを爲るとバルクも平氣で握手一つしたばかり、私はそれつきり彼の噂すら聞いた事は無い。胸の動悸を抑へながらワレンス夫人の家にと近づく。聽て夢中になつて私は夫人の足下に仆たれた。而して手に接吻をした、『マア歸つて來たの？でもマア善く無事で』と優しい聲、それから私の居所は夫人の家の一室と定まつた。これは戀よりも百倍楽しい。私は斷言する。只



の戀では眞の樂しさは解せられぬ。私には戀よりも百倍樂しいものがあつた、それは戀と一所にある場合もあるが、離れて居る事もない是は只の友情でもない。一層濃い懐しいものである、夫人と私との關係は初めから私の名は『坊や』で、夫人は『母さん』と呼むだ。後の關係はいざ知らず。その時はまつたくの母と子、此の懐しい母ならぬ母に對して私は離多ざつたなことをした。獨で私の室に居る時など、夫人が此の上うへに寝た事もあるであらうと、只それを思うて寢臺に接吻した事もある。又夫人の優しい手が觸れた事もあるであらうと、只其の懐さに窓掛や家具に熱い唇くちびるを壓して見る。ある一番大切な點に缺けては居るが、あとは丸つきり戀人であつた。

ツリンのだらしの無い華美くわびもまだ私に女の昧を教へなかつたのである。それに今は美人と共に棲んで居る、が此の夢の様な生活も長く續かなかつた。夫人は冗談の間にも絶えず私の性質を探つて、私の將來の方針に就いて様々の案を立てた。が多くおほくの人は私を馬鹿と評して就職口を與へぬ。『至極利口けには見えるが、マア理解わかの

悪い方で學問も出來て居らぬ。田舎の牧師代理にでも成るが關の山だ』と夫人の親戚のオーボンスと云ふ銀行家は私をかう評して夫人の推薦があるに係らず採用しなかつた。私が馬鹿と評される理由はいろいろだろうが私の思ふ處では……

私の氣質は熱烈でも、思考が遅鈍ちどんだ。突如として雷光の如く物を感じる。だがその光りに照らされずに却つて眩惑げんわくされる。情が熱して智が鈍る。あの舞臺面が變る時の伊太利の歌劇、道具立が滅茶苦茶に混雜して、森羅萬象をゴツタ返したかと思はれるが聽てその渦が次第に整頓する。チャンと場面が成る。私の筆とる時の頭の様子も此の歌劇だ、混雜の後の鎮靜を待つてその跡に現はれる陸離の光を描くのなから恐らく私を凌駕りやうがする文學者はあるまい。

私の原稿は印刷に廻すまで四五遍は書き直す。

物の理解が悪い私だから話の下手な事は云ふまでも無い。大勢の人の前などではそその氣質や身上に當り障りの無い様な事ばかり考へて云はねばならぬのに、



の戀では眞の楽しさは解せられぬ。私には戀よりも百倍楽しいものがあつた、それは戀と一所にある場合もあるが、離れて居る事もない。是は只の友情でもない。一層濃い懐しいものである、夫人と私との關係は初めから私の名は『坊や』で、夫人は『母さん』と呼むだ。後の關係はいざ知らず。その時はまつたくの母と子、此の懐しい母ならぬ母に對して私は離多さつたなことをした。獨で私の室に居る時など、夫人が此の上うへに寝た事もあるであらうと、只それを思つて寢臺に接吻した事もある。又夫人の優しい手が觸れた事もあるであらうと、只其の懐さに窓掛や家具に熱い唇くちびるを壓して見る。ある一番大切な點に缺けては居るが、あとは丸つきり戀人であつた。

ツリンのだらしの無い華美くわびもまだ私に女の昧を教へなかつたのである。それに今は美人と共に棲んで居る、が此の夢の様な生活も長く續かなかつた。夫人は冗談の間にも絶えず私の性質を探つて、私の將來の方針に就いて様々の案を立てた。が多くの人は私を馬鹿と評して就職口を與へぬ。『至極利口けには見えるが、マア理解ゆかりの

悪い方で學問も出來て居らぬ。田舎の牧師代理にでも成るが關の山だ』と夫人の親戚のオーボンスと云ふ銀行家は私をかう評して夫人の推薦があるに係らず採用しなかつた。私が馬鹿と評される理由はいろ／＼だろうが私の思ふ處では……

私の氣質は熱烈でも、思考が遅鈍ちだんだ。突如として雷光の如く物を感じずる。だがその光りに照らされずに却つて眩惑げんわくされる。情が熱して智が鈍る。あの舞臺面が變る時の伊太利の歌劇、道具立が滅茶苦茶に混雜して、森羅萬象をゴツタ返したかと思はれるが聽てその渦が次第に整頓する。チャンと場面が成る。私の筆とる時の頭の様子も此の歌劇だ、混雜の後の鎮靜を待つてその跡に現はれる陸離の光を描くのなら恐らく私を凌駕りやうがする文學者はあるまい。

私の原稿は印刷に廻すまで四五遍は書き直す。

物の理解が悪い私だから話の下手な事は云ふまでも無い。大勢の人の前などでは、その氣質や身上に當り障りの無い様な事ばかり考へて云はねばならぬのに、



八はあの様に流暢に話せるのかしらむ。ことに二人きりの差向ひの場合などには始終話が途切れては面白くない。何か云はねばならぬ。私が一々それを理解に訴へた後に云へば沈黙勝になる。止むを得ず云ふのだから馬鹿けたことばかりである私の對話が無茶な出鱈目で無意味であつたら先づもつて仕合せの部である。

さて私の馬鹿の所以はこれだけだが、例の銀行家の所謂田舎牧師の代理位が實際に關の山だと云ふ事で私はその鑑定のみ、僧院にはいつてこれから拉典語を一生懸命に勉強せねばならなくなつた。

何たる變化ぞ。美人の家を捨て、僧院に入るせめても想ひ出の様に私は夫人の樂譜を一冊、大切な寶として持つて行つた。僧院で拉典語を教へて呉れた坊さんは名など忘れて了つたが、水牛の様な聲で、梟みたいな顔だつた。あの野猪のやうな髭面、彼麼怪物に二ヶ月も世話になつたら迎も遣りきれなくなつたであらうが、幸に院長が私の鬱ぎこんで瘦せて行くのを觀て此の野獸の爪牙からすくつて、柔和な

學僧に就けて呉れた。拉典語は更に進歩せる王の侍醫が此の町に退隱して來たので此の侍醫にも相談を持ちかけた。若し此の藥草園の計畫が首尾よく行つて居たら、私は今頃植物學研究室にでも居る筈であるが、意外の打撃があつて中絶せねばならぬこととなつた。私はよくよく人間界の非運の標本となるべく生れたものだその打撃と云ふのは或る日アネは侍醫先生の需とあつてアルプス山中に珍草を探しに行き、餘り過度に働いた爲め急性な激烈な肋膜炎を起し、遂に五日間ほど苦み通して他界した。其の翌日、私は夫人と彼の死を惜みながらの談の中にフト私の胸にアネの残した衣裳、殊にあの美しい黒い上衣を私が貰つたら什麼によく似合ふかとサモしい考が浮んだまゝに、それをさらけだして話すと。夫人は、私の此の汚い心にその清高な氣分を餘程苦しめたと見えて、只彼方に向けて泣きくづをれた。あゝ其の清き尊き涙よ！私の卑い汚れた想ひは其の涙のために痕跡も無く洗ひ盡した。私はすぐと彼の樂才に恍惚として、前の美少年バルクに對したよりは更に熱烈な愛情を



以つて交る様になつたが、ワレンス夫人があん麼ダラシの無い道樂者は止せと云つて絶交を薦めたから聽て此の友との交は永續しなかつた。

メートル氏は藝術家肌で能く飲む。それが爲め健康も破壊し、常に怒氣を含むで居た。自然教會の高僧等に指彈される。遂にメートル氏もムカムカ腹をたて、復活祭の間際まぎはになつて此處を立退いて教會を困らせてやると度胸を据へた。然し巨大な樂譜箱を内證で運び出すのは大難關だ。で其の夜の七時私は番頭と庭番と三人で窃かに樂譜を運びだしてやつてメートルと共に旅に出た。飲助のメートルは癲癇病てんかんびやうを發してよく卒倒するので私は全く閉口して了つた。何とかして此の厄介から遁れたいと思ふて居つた。ガリヨンに着いての二日目宿の近くの横町を歩いて居る時、メートル氏又もや卒倒した。加之も中々蘇生せぬ。私は近所の人に駈けまわつた。而して大きな聲で叫びながら私はそれつきり逃けてしまつた。此の憐れな卒倒者は實にその時最も信賴すべき唯一の友に見棄てられたのである。

あゝ天に謝する。是れは第三の私の苦しい懺悔である。

#### 第四卷

慘酷にも此の癲癇てんかん音樂者を捨てて歸つて見るとワレンス夫人は巴里に行つて居ない、身をよせる處も無いので困つた揚句、思ひついたのは例の佛蘭西から流れ込むで來た天才の漂浪音樂者バンチュルだ。訪ねて見ると相變らずの上機嫌で町の娘連に大持にもて囃はやされて居る。彼は靴屋の二階に居た。とう／＼私もその中に割り込むで同宿することにした。

ワレンス夫人の家には小間使のメルスレーが残つて留守番役をして居た。私より少し年上で美しいと云ふ程でもないが、愛嬌あいきやうがあつて人好のする無邪氣な女だ。私はチヨイ々々遊びに行く。するとその友達のギロウと云ふ三十七歳の老嬢が私に惚れて來た、彼女はお針の師匠で、息が臭い。獅子鼻で噎しんぶれ聲で、厚い唇を反して側



に寄つて來られると、戦慄せずには居られない。一體私はお針女や、小間使や町屋の娘などには餘り好かぬ。貴婦人令嬢でなくてはならぬ。

茲に一つ想ひ出の樂さがある、わが晩年になつても此れを想ひだすことによつて急に若やいで來る様な氣持がする。それはある朝であつた。東雲の空にのぼる旭の麗はしさそれに酔はされてかいつしか私の足は野面をさ迷つて居る。野の緑。花の彩色、夜、鷺の幽な忍び音、聴き惚れて我を忘れる刹那、後の方から蹄の響、見かえると二疋の馬は二人の若やかな令嬢をのせて居る。兼てワレンス夫人の家で知つたG嬢とガレー嬢である。瑞西ベルスの名家に生たG嬢は不圖した若氣の過ちに國を追はれてワレンス夫人を慕つて來て、ガレー嬢の家に寄寓して居る。其朝此の二人の姫達はツーンの古城に遊びに行く處であつたが、眼の前の野を流れる川を馬が涉り兼ねて居る。早速私はガレー嬢の馬の轡を把つて膝の邊まである水にザンブと飛び込むで馬を彼方の岸に導くと、G嬢の馬もついて來た。私はこれつきりの別れ

かと茫然として馬鹿面をして居るとG嬢が『是れ切りで逃げちや厭ですよ。私達の爲めに足を濡らして下すつたんですもの、御禮に乾かしてあげますは。來つしやいな私達と一緒に。もうあなたは、私達の俘よ。』

私は電氣に打たれた様に。G嬢の跡鞍に飛び乗つた。悦さに身慄ひしながら緊平と嬢の身體に私は抱きつくつと、羞しい胸の動悸が傳はる。身をまかせた嬢の腰に、私の手は帯と絡むだまゝ離れさうにない。御婦人の讀者は、こんな事を書いたら私の鬢面を一つ叩いてやりたいなどと仰しやる方もあらうが、何うも仕方が無い。たゞ恍惚として烏頂天の氣持だつた。ツーンの古城に着いた時、二嬢は酒が無いのを氣にしたが、私は、貴嬢方と一所に居れば十分酔つて居ますからと云つたのであつた、處士の私としては、たゞ一言葉ながら色氣があつた。實に愉快な御馳走に預つた食後に私は嬢の庭の櫻の樹にのぼつて櫻んぼをとつて下に投げると、二人の嬢はキヤツキヤツと笑つてそれを唇にあてた。私はつくづく櫻ん坊になりたかつた。た



どしその日は猥りがましい様なことは秋毫もなく、たゞ一度ガレー嬢の手に接吻したばかり。

此の樂園から靴屋の二階に歸ると、漂浪樂人バンヂユルは私の身の振り方を心配して居た。少しばかり持つて居た私の錢は今は早や殆ど盡きた。そしてワレンス夫人の便は無い。あゝあゝガレー嬢の手に接吻した此の光榮ある身が、一朝にして乞食か。私の胸は悲しかった。

けれども職業問題よりも何よりも私はガレー嬢の事が氣にかゝる。嬢の家のある邊に行つて、せめて二階の窓でも開くかと思ひながら目を見張つた。たゞ一つ嬢への通信の機關がある。それは例のお針師の老嬢ギロウがガレー嬢の家にも出入するからだ。此の老嬢どう考ても今を盛りの二令嬢との競争は出来ぬと斷念めてか。餘り嬉くは思はぬらしかつたがそれでも文使ひをして呉れた。

ワレンス夫人の留守宅では、夫人から何の音沙汰も無いので、小間使のメルスレ

ーは一應フリブルグの故郷に歸ることになつた。若い女一人で遠い道を歸るはよくない。せめてあのルソーさんにでもとギロウ嬢が薦めるまゝにメルスレイはその氣になり私も快く承諾した。老嬢ギロウ君の腹の中には別に思はくがあつたらしい。

私の費用までメルスレイは拂つてくれる。彼の女は二十五、私は二十歳、始終二人で同じ室に寝る様に仕向けた。必ずそ處に何か出来さうな場面だが、私ほどの新參に何が出来るものか。それで若しメルスレイに内々のがあつて私の旅費を拂つて呉れたのなら私は實に相濟まぬことをした譯だ。此のメルスレイの一件はどうやら神が私に安樂な生活を送れとの心算であつたらしい。だが私は此の神の御心にたがつてしまった。定めしあの利口でも別嬢でも無いが、さうかと云つて醜いと云ふ方でもない十人並の娘、心は十分私にうちこんであつた。若し彼女と結婚したら今頃はフリブルグで質朴な町人で老ひたらう。そしたら反例大きな快樂は無いにもせよ



誠に平安なこの身であつたらう。

メルスレイ嬢を送つてしまつて置いてから私は故郷を通つたが、誰も訪はずにたゞ外濠の橋の上などで無限の感慨を催しただけであつた。而してニヨン町の父へだけは素通りしなかつた繼母にも逢つた父はモウ好加減にして落ちつく様に勧めて呉れた。繼母はせめて夕餉いっけでもと愛相よく云つて呉れたが私は歸りにユックリさせて貰ふと云つて父の家を出た。然し歸りはラウザンスの方に行つて大潮の景氣を見憧れて、ニヨンなどには行く氣も起らなかつた。ラウザンスでは又無一文になつた。がパンチユールがアマシイに流れ込むだ時の事を思ひだし、私もひとつ巴里かち來た音楽者と振れだして音楽の先生をやることにした。大膽にも一廉の名家らしく觸れだして見ると、早速音楽好の博士フレトラン氏と云ふ人が合奏會を催すにつき作歌と作曲とを依頼して來た、私は何も知らぬ癖に無法な歌曲を拵へあけてしまつた。すると案外に大喝采を博したので私は氣はづかしさうに實情を白狀すると、私の正

體が知れわたつたので、田舎の阿呆共おほうどもが二三人來たばかり、生徒は忽ち減つて女など影も見せぬ様になつてしまつた。

或日の事。散歩のついでにブードリ村の飲食店に入つて見ると、髯の長い上品らしい希臘風の服を着た男が、言葉が通じないで困つて居る。どうも伊太利語らしいで私はその言葉を通じてやると、先生喜んで早速通辯になつて呉れと申し込む。私も直ぐと承諾した。先生私に御馳走をして語るらく、自分は希臘教の僧侶で、ジエルサレム本山の貫主くわんすで此度聖墓再建せいぼさいけんの爲め廣く歐洲諸國に淨財募集に來て居るの事。私は遂に其通譯兼書記官となつた譯だ。時にはベルヌの堂々たる元老會議で貫主殿の演説をテキハキ通譯して見せて大に面目を施した事もあつた。たゞし私が公衆の前で演説らしい事をしたのは一生涯を通じて此の元老會議での通辯がたゞの一度である。さて貫主殿について淨財を募りながらソラールに往つて其處の佛蘭西公使を訪問した。公使は曾つて土耳其に赴任した經驗から聖墓の事は通で貫主殿甚



だ不首尾私は公使の別室に呼ばれ身の上を取糺とらされると云ふ始末、似而非巴里子にせなることを白狀に及ぶと、公使は私の身をば數奇に思つて、夫人の前にも連れて行かれた、公使夫人の親切さ、モウそんな怪しい希臘坊主になど附いて行くのでないと戒められ、そのまゝ私だけは其處に寢泊させて戴くやうになつた。それで私の身に關する萬事の世話は大使の秘書官マルチニエ氏がやつて呉れる事になつた。氏は廳たうに或る一室を興へて呉れた。がどうも茲ここに居たつて税うたが上りさうにもない。大使の秘書官にならなつて見たいのだけれど、それは現にマルチニエ氏が占めて居る。その跡釜を狙つて居るものもある。私の分際では書記が頂上だ。馨かしくも無いから私は巴里に行き度いと云ひ出す、トウ／＼大使から百ルブルの旅費と數通の紹介狀を貰つて大得意になつて光榮の都へと出發した。加之も希望は軍人志願である。私の眼は近視眼だが、でもシヨーンベルグ大將の傳を讀むで見ると大將も酷い近視眼であつたとか、未來のルソー大將の近視眼が不都合だと云ふ氣焔だ。だが一向巴里は

私を歓迎してくれぬ。此の人こそと思つて公使からの紹介狀を出して訪ねたゴタール大佐は強慾な因業爺いんがうぢやいで、家に置いては呉れたが給金なしに私を從卒に使はうとするのであつた。私の夢は漸く醒めて來た。

大使から惠の百ルブルの金も無くなる。私の困窮こんきうは酷くなる。さしも華やかであつた前途の希望が又もや空に歸して了つた斯うなると戀しいワレンス夫人の事が愈々想ひ出される。巴里に來て居るんだからひとつ夫人に會つて身の上を相談して見やうと懐しい心に燃えながら、段々聞き合はせて見ると二ヶ月前に巴里を立つたとのこと、行所はサボイカツリンか到らぬ。ともかくも夫人を探し出すが私の天職と云ふので、あの因業爺のゴタール大佐を痛罵する一篇の詩を残して巴里を捨て、漂浪の旅にのぼつた毎度野宿をする。たしかロース河の岸であつたか、水に醺ふかる樹の茂みの間から夕燒の空を眺めつつ夜鶯の聲々を聞きながら露のゆたかな夏草の上に安々と寝た一夜の如き、今も尙ほ印象の鮮あざかな最も愉快な夢である、詩である。その



時あまりの愉快さに私も夜鶯の様な氣持になつてパチスチンの詩を聲高らかに歌つて氣も軽々と町の方を歩いて行くと、不圖はからずも通りがりの樂師に聞かれ音楽が出来ぬなら三四日雇つてやらうと云ふをきつかけの談判。お蔭で思ひがけない金に少々ながらありついた。此の時遇然ワレンス夫人の消息が知れた夫人はシャンブリ町に居る。早速その町を訪ねて行つたそしてワレンス夫人の紹介で去る税官の書記になつた。

## 第五卷

税官の書記の仕事は土地測量であつた。此の時私は廿一歳。私は矢張ワレンス夫人の家に起臥きぐふして居たが其の家はアヌシイの頃とは異つて薄暗く陰氣であつた。家従のアネと云ふ男も矢張アヌシイ時代から居た。彼には植物上の智識があるから此の家に用ゐられる様になつた程で、熱心な研究家で、私よりも年長な、眞面目な嚴肅な人で、寧ろ後見人と云ふ格であつた。彼と夫人は滅多に喧嘩などを起さず始終平和であつたがある時夫人から侮辱おぼろされたと云ふのを根にもつて深く恨み遂に阿片自殺迄企てたが幸に夫人と私との介抱の爲め命をとり止めた事さへあつた。

夫人の家に來て私は至極愉快に至極單純になつた。そして私の學問は一通り纏まとつた。アネの感化で植物學にも耽ふけつた。音楽も深く練習した。ことに音楽に熱中した結果、没趣味な測量の仕事が一向手につかぬ様になつた。がどうせ生涯つゞけ様と思ふ職業でもなし、遂にワレンス夫人の承諾を得て、税官の書記を辭してしまつた。そして音楽の教授をやりだした。烏なき里の蝙蝠かほもりで、見ん事音楽のお師匠になり濟ましてしまつた。特に此のシャムプリーで私に習ひに來る娘達は一人として可愛らしく無いのは無いと云ふ有様。是れ等のうつくしい弟子のうち一人私の生涯に革命を興へる間接の動機となつたのがある。それは乾物屋の娘であつて丁度生花の様なお嬢さんである。或る時そのお嬢さんの家に私が出掛けて行つた事があつたが母に



あたる蓮葉夫人が、颯いたちの様な小さい眼をバチバチさせながら冗談半分に私に接吻を押しつけた。私はそれを只の無邪氣の事と思つて、或る時フトそれをワレンス夫人に話した。私が夫人に對するのは天に對するのと同じ事で、少しも包む所なし天真爛漫ランマンにやつたのが、夫人はそれを只の無邪氣と見ず、矢張り捨て置かれぬ色氣の沙汰と解釋した。夫人は私を誘惑の間に長く晒さらして置けないと決心して。そして私に對して非常な手段を取つた。夫人の態度は急に石の様な眞面目まじめになり、鹿爪らしい言葉になつて、そして明日必ず家の花園の東屋で委しく相談することがあるとの重々しい顔付、翌日となつて東屋に二人は他の人を遠ざけての對談たひだんの場となる。扱今日は一つ、あなたの爲に善い事を聞かせてあげると云つて夫人はそれから色々話しはじめた。その話方が外の女の様な甘つたるい浮いた調子でなく、シンミリと筋を徹とほつたもので口説くのではなくて教へるので用愼ようじん深く順序が立つて居たが、私としては獲物の見えた丈で澤山なので、跡は何にも聞かずよし、無條件に夫人に同

意した。だが夫人は何處までも重々しい。勿體を附けて、今から八日間の猶豫いろうよを與へるから善く考へて置けと云はれたが私には及ばぬので異議は無い即答してもよいのであつた。たゞし普通ならその八日間が八年間の様に長く思はれる筈であるが、私は丸で反對で却つてもつと長けばよいがと思つた。何だか怖い様で氣味が悪い様で、自分の望んで居る幸福が、正面まともに落ち來ながら、それを避ける道は無いかと悶もたへる心持、それかと云つて勿論、私が此の年月夫人に對する戀心が退せたのでは斷じて無い。夫人は私より一打なすも年上ではあるが容色は艶えんに若さを保つて居り、初めて會つた折りと秋毫も變つては居らぬ。同じ眼の柔さ、同じ肌はだの清さ、髪は房々として居るし、銀鈴の様な聲音はもとの通り人を酔はせるやうだ。それなのに私は今此の歡喜の瀬戸際で何を遂しゆんじゆん巡めぐることがあらう。

此の時以後夫人は初めて私を一人前の男として取扱ふ様になつた。そして何うかして私に相應の地位を與へたい。一度世の中に顔さへ出せば屹度立身すると云つて



夫人は先づ私を劍術と舞踏との教師に仕立てやうとした。然しこれは全くの無駄骨折であつた。

夫人の財政は此の頃必迫した。だが夫人は何うかして一打に打返さうと、益々計畫をする。空想的になる。山師のやうな曖昧者が頻りとやつて来て、何萬何億圓の法螺を吹いては、結局差當り五圓ばかり貸して欲しいと云ふ様な話、これが毎日の様に續いた。が之も大低が空手では歸つて行かぬ。で私は斯麼不取締ではと心配になつて來たので一つ計畫した。それは町に帝室藥園を設置する事で、出來あがつた上はアネが主事となる筈、丁度其頃崩御されたギクトが。上達したのは持つて來た樂譜だけ。是は毎日缺がさずにやるので。

私が僧院で拉典語に苦むで居る間に。私を田舎牧師の代理が關の山だと鑑定した。オーボンス氏は他人の妻に懸想した爲めアヌシイには居られなくなつた。氏は此の事件を一篇の喜劇に書いたことがある、後に私もそれを眞似て『自惚』と云ふ題で

作つた、これが私が生れて劇に筆を染めた最初であつた。さて私の僧院修業も望みがない。田舎牧師にすら成れる見込がないとの事でワレンス夫人の許に送り返された。しかし學問が出来ない代りに至極氣だての善良な少年だと云ふ添言葉がいくらか差引となつただけである。戀しい婦人の家に歸つてからは私は一心に音樂の稽古をやりだす。夫人の家では一週一度の合奏會もある。私は遂に此の合奏會の主任メイトル氏の弟子になつてしまつた。

二月の寒い夜、佛蘭西の音樂者だと云ふ漂浪天才が此の町に舞ひ込むで來た。

アネが亡くなつてから財政は亂れた。夫人の浪費は今誰を憚る所が無い。私の小言など夫人は丸で馬鹿にして掛るので少しも其効果が無かつた。しかし私は心配で堪えられぬ。此の心配が遂に私の卑吝な氣風を養成したと思ふ。私は少しづつ臍金を溜めた。すると夫人が何時の間にかそれを見つけて、私の臍繰つた小さい銀貨を大きな銀貨に取り換へた。私は氣耻くなつてその内證金をみんなこの贅澤な妻



の前に持ち出して、それで美しい着物や時計や剣やを買つてしまつた。到底小錢など貯金しても駄目だと思ひ出した。それよりは萬一の場合にと、本式の音楽家となり一廉の名人にも成らうと種々やつたが故障がついてまはる。何うせ私には不運が纏つて居る。何處へも行くまいと。斷めて夫人と運命を共にする決心をして只獨り我流の音楽を稽古しはじめた。

此麼風で落ちつかず三四年を過した。が此の間にも學者文人に交る機會も多く讀書にも耽ることが出来た。ヴォルテオなどは最も愛讀し知らず識らず學問の方に傾いて來た。化學の研究にも興味を特つた。或る時灸りだしインキを發明する心算で水に溶かして石灰と石黄とを壘の中にいれて置くと、盛に沸騰する。狼狽して栓をしかける間際に倏ち爆發して私の顔は全面糜爛し、石灰や石黄を嚙下し危くも死ぬ處であつた。兩眼が盲すること六週間、さなきだに衰へた私の健康は尙ほ更に破壊されてしまつた。動悸、息切、溜息、痠熱、私には悲觀の状態が續いた。只ひと

つ幸福なのはワレンス夫人の愛の籠つた介抱を受けることで、若しその時その儘で死んだなら、私の心は此の世の辛さ淺ましさを深くも知らないで只靜に眠り得たかもしれない。病氣は次第によくなつたがどうも十分に體力が回復せぬ。あの薄暗い家では氣も晴ればれしくならぬ。遂に私等はシャルメットの里に別莊を貸りることにした。茲は物靜な鄙びた處で山の樹々、小石の綺麗な溪川もあり花園もあり、清水の湧く邊には栗の林などがあつて牧場が遠く連つて居る。頃は一七三六年の夏の終で私は夫人を抱きながら此の新居を讚へて『私達が茲で幸福を得なければ世界の何處を探したつて駄目ですよ。』

## 第六卷

此の新生活は眞に幸福であつた。が此のいゝ空氣も私の健康を回復しなかつた。牛乳の代りに流行物の鑛泉を飲みはじめた、お蔭で二箇月ばかりのうち胃を壞す。



兎角するうち私の身體の組織に凶惡な急變があつた。動脈、殊に頸動脈の脈膊が急に猛烈になつて身體のうちに大戦争が始まつた様に五六種の音響が鳴りはためく。吃驚處の騒では無い。死ぬるのだと思つて床に入つて寝る。程なく來た醫者の診察では絶望らしい。幾日経つても幾週経つても善くも成らねば悪くもならぬ。やうやくの事で其のまゝで起きる様になつたが、其の後三十年間、胸の動悸と耳の鳴るの一刻も休んだ事が無い。これが爲め睡眠を奪はれてしまつた。モウ迎も永くは生きられぬと覺悟した。病氣の治療も斷念した。餘命を成る丈け有効にすることが私の最善の覺悟であつた。

此の變事は私の情慾を殺した。が此の點は私の情神の上に非常に幸福な影響を與へたそして餘命幾許もなしと思ふことは臆て眞の生命に入つた心地を齎した。眞劍勝負になつた。

それに就いて私には有らゆる名僧智識よりも、ワレンス夫人が有難かつた。私の

生命は死んで此の身體を離れると、直ぐに夫人に移ると思へば、懐しさ慕はしさがいやましに深くなる。そして情慾は減じて氣は靜まり、只此の短き餘生を以つて夫人に田園の趣味を起させるのが此の身の務だと思ひ、花園や鶏や鳩や牛やなどの世話に一心になつた。そして是れが又私の身體にとつては牛乳よりもその他あらゆる療治法よりも自然に保養になつて居る。

冬の間は島流にでも會つた様な氣持でシャムブリ町に歸つた。翌春には又墓場から天國にでものぼるやうな心地でシャルメットの里に移つた。雪はまだ残つて夜鶯は纔に鳴き始めた頃、私には何時しか死の觀念が消えてしまつて、讀書に耽り出した。最初の考では、凡そ一書に精通するには、それに關係ある他の有らゆる智識に精通せねばならぬと云ふので二三頁讀んでは直ぐに他の本を調べ、又二三頁讀んでは又外の本を調べ、十頁と讀まない中に文庫に在りだけの本を皆引つくり返すと云ふ馬鹿騒をやつて見たが、徒らに頭を疲らすばかりで、すぐ書籍を投げすてるので



あつたがその頃から横道よこみちのことは百科全書で埒さちを明ける位にとゞめそれよりもなるたけ澤山に読みだした。廿五歳になつてからの智識涉獵だから上手に時間を使はねばならぬ。

毎朝日出前に起きて、果樹園を抜けて街道に出る。そして熱心に神かみに祈禱きとうをする。私は室内で祈禱するのは厭で、神の作れる自然の間に於て神を思ふ事が好であつた。鳩はとを飼つてそれを愛した。

朝飯から晝飯まで私は勉強に掛る。最初はボルトロアアル、ロツク、マルブランシユ、ライプニツツ、デカルトなどの哲學を読む。幾何をやる。代數をやる。次には拉典語是は一番骨が折れた。漸く樂に讀める様にはなつたが話す事と書く事とは遂に出来なかつた。午後の勉強は慰みであつて、歴史地理天文などであつた。

私の健康は矢張り悪く色は蒼く肉は落ち、骸骨がいかつの様になつてしまつた。幽鬱症ヒコボンデリイだ涙が無暗とこぼれる。落ちる木葉にもハツト驚いて惱む。私のこの恐るべき病根は

心臓になると思つた。心臓病の治療に名高いフアイズ氏と云ふを尋ねて遙々モントベリエまで行く事にした。馬で行くのは疲れると云ふので馬車を雇つた。モレイと云ふ處まで行くと同じ様な馬車が幾臺も續いた。そのなかに美しい婦人の群があつた。特に目立つたK婦人とN婦人との二人の美しさ。N夫人はK婦人程の美しさは無かつたが愛嬌あいきょうに勝つて居た。Kの方はロマンスと云ふ處で別れねばならず、それ以外の男達から頻しきりにチャホヤされてばかり居たので、私に對して注意を向ける暇も無かつたが、N婦人は是から先同伴しやうと約束した。私は既うN夫人に夢中、病人のルツソオは何處へやら、熱も幽鬱症ヒコボンデリイも皆んな消えて無くなつて了つた。N婦人は幾度も私の手をとつては暖く握り締しめる。随分打ち込んだ色々な素振をして見せたけれど、何だか冗談じやうたんにからかはれて居る様な氣もして、若し滅多なことを云ひだして叱られるは未まだしもだが、耻はぢかきの物笑ひにされては大變だと、それが怖こわさに黙つてジツトして居ると、或る時夫人は俄にわかに私の首に手をかけて、嘘うそでも冗談でも無い



證據を其の唇で見せてくれた。私はワレンス夫人のことは忘れて懐しい夢に酔つてしまつた。だが此の面白い道中が何時まで続くものではない。別れねばならぬ時が來た。二人は細々と再會の約を定めた。私は五六週間ファイズ氏の治療を受けて滞在する間に夫人は家の都合を附けて置く。それから私が夫人の家に乗りこんでその冬を共に過すと云ふ手筈であつた。

、が私が不圖ルムランを過ぎ有名なボンジュガルの大石橋を見に行つた時初めて此の羅馬の古跡の壯大雄渾に驚嘆し、眞に崇嚴の氣にうたれてしまつた。その傍に低徊數時間、冥想の裡に私は嚴としてN夫人に對する道ならぬ戀を思ひきる大決心をした。白狀すると、此の決心をするのは随分残り惜しかつた。けれども又一度誘惑に勝つて見ると急に心が丈夫になつて今後はモウ必ず道を逃れた事はすまい。必ず此の一身をワレンス夫人の爲めに捧げること心に盟つた。私の心は肅然として歡喜に満ちた。

それで愈々豫定通シャルメットの里に歸ることとなつた。家路を急ぐ私の心の平和、段々家に近づくので胸が跳る。もう出迎の夫人の姿が往來に見えるかと、見廻したが、表口には人の姿もない。花園にも窓にも無い。家に這入るとヒツソリとして居る。作男共は臺所で晝飯を食つて居るのみで何の用意もしてあるらしくない。女中は私を見て思ひがけないと云ふ風でビツクリした。二階に上つて行くと遂に夫人の姿が見えた。懐しい人の姿、私は飛び寄つて足もとに身を投じた。

其の時夫人の側に一人の青年が居た。私の出立前、家に來て居るのを見た事のある男ではあるが、今はもうチャンと家の人になつて居るらしかつた。らしかつたのでは無い。實際左様であつた。結局私の席は既に塞つて居たのであつた。

私は茲に堅く心を定めた。是より以後、私は常に實の子の眼を以つて、私が熱愛したワレンス夫人に對しやう。私自身の事は殆んど全く度外に置いて、只如何にもして夫人の身を幸福にしやうと考へた。かく考へた結果、私は先づ此の私の地位を



奪つた青年に對して、妬み憎みの念を少しも起すまいと努めた。

が私は自然此の家の中で除物になつてしまつた。獨り書齋に籠つて讀書に耽つて鬱をやらうとしたり、森の中にさ迷ひ込んで竊に泣いたりした。トウ／＼此の生活が堪えきれなくなつた。寧ろ夫人の姿を眼にせずばと思ひ、遂に此の家を去る事にした。夫人にその事を話すと一向止めもせず賛成した。そして夫人の紹介により直ぐにリヨンの市長の許に家庭教師として二人の子供を世話する事になつた。家庭教師になつて見れば、ワレンス夫人の許に居る様に自由が出来ぬ。腹が空いても好きなものを食べる譯には行かぬ。私は遂に小盜の癖におちた。他のものは盗みたくはないがツイ上等の白葡萄酒が欲しい。二三瓶ソツト自分の部屋に持ち込んで來て獨りで飲む。處が私の癖として酒を飲む時にはパンが要る。家庭教師も紳士だ紳士が親らパン屋に買いに行くわけには行かぬ。やうやくの事でカステラを買つて來てそれで頻に閉ぢ籠つては葡萄酒を飲み小説に耽る。私は獨りで物を飲食する時

は必ず本を読む。本と二人で會食をする氣持だ。此の一事は確に私が家庭教師として不適當である事を證明する。此の小盜みが露見に及んだ時寛大な市長は私を解雇しやうとも云はなかつたが、私は只無暗に痛切にシヤルメットの里が戀しくなつたあゝ恐ろしき世の幻よ。爾は幾度徒に我を悩ますぞ。ワレンス夫人はもとより快く私を迎へたが、私はまだ半時間ならずして悒鬱に沈んで書齋にばかり引籠る事となつた。此の時ワレンス家の財政は全く亂れて種々の負債が山の如くに積んで居た。破滅！これより外は無いと思はれた。

私は夫人の破滅を救はねばならぬと、又空中樓閣を書き始めた。一つ大音楽者になる。わたしは此の時種々工夫した結果、總て符號で以つて極めて單純に且つ正確に有らゆる樂譜を書き分ける法を發見した。是れで占めた。巴里に持つて行つて學士院に提出すればすぐ採用される。大歓迎を受けるに極つて居ると、早速本を賣つて旅費を拵へ、華やかな空想を眼の前に描きながら、會つて白鷺の噴水器を携へて



ツリンを去つたと同じやうに新式な樂譜を抱いて失戀の家から希望の都へと一歩々々行くのであつた。

### 第七卷

此の卷で筆を新たにする爲め私は二年間の沈黙と忍耐とをしたのである。懺悔録はもう書くまいと書を措いてしまつたが、今その決心を翻して書き續ける。其の理由はこの書を読み終つた後で無ければ判からぬ。

大なる失望もなく、大なる成功もなく碌々として平凡に過ぎ去つた私の青年時代よ。大善にも遠ければ大悪にも更に遙であつた。私の前半生の三十年間は不運ながらも私の運命は寧ろ私の本性には適つて居たものと見られるのであつた。が後半の三十年は之を逆に行つた。運命は本性に甚だ不應はしく無い。一切が矛盾衝突、齟齬に大不幸もあれば大過失もあつた。

記憶ばかりを辿つて書いた今迄の前半生の歴史には間違つて居た點も多からう。是れから後半も描くにあたつても無論記憶によるのだから更に間違ひもあらう。殊に青年時代の事は懐しく想ひ出して頻と回想の甘い夢を繰かへすものだが、後半生の記憶は多くは之を呼び起すのが苦痛である。強ゝるて忘れたいと努めた結果は、今ではそれを思ひ出して懺悔しやうと思つても腦裡に残つて居るものが少い。私が此の自傳の材料にもなると思つて集めて置いた書類などもあつたが今は手許に無い。手許に戻つて來る望みさへ無い。だが只一つの確證がある。それはその時々を経て來た心持である印象である。事實の細かなことや日附などは無論正確ではないかも知れぬが、その心持だけは決して忘れて居らぬ。此の書は飽くまでも其の心持を語るのだ。さて同じく事實を描いたものとしても、前半部は楽しく書いた。ウートンにおいて或はトリイ城において、眞に楽しみながら書いた。が後半部を書くのは實に勞作である苦惱である。そして書く事柄から云つても悉く災難である。悲痛である



不幸である。不義でありまた術策がある。今書きつゝある室の天井には眼がある。壁には耳がある。探偵や間者や犬や目付役やの環視のなかに、纒の暇々を以つて走り書きをする。訂正は愚か読み返す暇さへ無い。

さて前半生の續にかへる。私は愈々巴里に着いた。懷中に十五ルブル残つたばかり。それでも自信の深い新式樂譜と喜劇の脚本なるシシユスとは私のポケットにあつて希望を繋ぐものの如くである。時は一七四一年の秋。

新式樂譜は遂に人々の紹介によつて學士院に提出する事にした。そして翌年八月廿二日、私は學士院で其の覺え書を朗讀するの光榮を有した。が審査委員達に音樂を正解するものは一人も無い。そして私はその結果かお世辭のよい褒狀を貰つた。たゞお世辭がよいだけである私の發明が新しいとも有益だとも一向レコードに觸れたやうなことは云つてなかつた。

が私は頑固に發明に執着した。私の願念は音樂界の革命を成就したい事である。

之れにより名聲をあけて資産も作らうと考へた。苦心慘憺のはて一部の音樂論を出版して識者に問ふたが、顧るものがなく不成功に終つた。空中樓閣茲に又瓦解。

しかし兎も角學士會院に出入する事が出来ただけは幸福である。時の學者文人の知を受け、其の他にも多くの先輩友人に交り、及、私が文藝の士であると云ふ事で多くの貴婦人にも交ることが出来た。

頻りに歌劇創作の苦心を重ねて居るうち、圖らずも世話して呉れる人があつて、ヴェニス駐在大使モンテグ伯の秘書官となり一千ルーブルの年俸で赴任したが。ヴェニスに滞在すること一年半大使との間に確執を起して職を辭してしまつた。しかしヴェニスに居た以上此の有名な都會の歡樂を語らねばならぬ。巴里では伊太利音樂は邪道だの卑しいのだのと云ひ、私も伊太利に行くまではその偏見を注ぎ込まれたまゝで居たが、實際に聽いて非常に好になつた。或夜歌劇を聽きにサンクリリストム劇場に行つた。好い心持の音樂に私はスヤ／＼と寝ころんで了つた。盛な樂



聲であるが圓かな眠りを妨げることは秋毫も無い。妙じくも柔かき諧音の不思議な催眠よ聽て暫くしてバツと眼と冴との一時に自然に心持よく醒める折の歡喜、恍惚、怡悦身は輕やかに何時しか昇天する様な想にうたれるのであつた。

尙ほ此の都會のみにある世界の珍とすべき音樂はスキュオール樂だ。是は又歌劇よりは一段と優つたものではある。スキュオールとは貧困な下等社會の少女を教育し授職する目的で建てられた慈善院の名であつて、特に音樂に重きを置いて居る。私は毎日曜日に缺がさぬやうにスキュオール樂を聞き惚れて行つた。只一つ不思議でもあり不足に思はれるのは此の音樂では一向歌手の姿を見せぬ事だ。である時私はそれを指揮役にその事を話して見ると、御望みならば幾らでも出して御眼にかけますと云つて即座に紹介された歌姫を見ると、般若顔や片目や痘痕の盲の鼻つぶれやばかり一人も満足なのは無い。指揮役は仰天する私の顔を見て笑つた。がそれでも私はそれ等の醜女達に對してさへ、あの美聲の持主であるかと思ふと云ひ知れぬ懐

しさを覺えるのであつた。

ヴェニスに行つて賣春婦を知らぬものはあるまい。コラ、ルツツオ白狀することはないかと云ふ方があるかも知れぬ。如何にもある正直に懺悔する。私は昔から女と云へば黒人は大嫌いだが、ヴェニスでは素人に近づく機會は無い。それで私は一年以上も婦人に關係なく過ごした。がそれも十八箇月の滞在の終り頃に二度ばかりあつた。或る食卓の上でうちくつろいでの花柳談に並み居る紳士達は口を揃へてヴェニスの賣春婦を評判し、それを知らぬは耻の様に云ふから、私も馬鹿にされないやうに本意ならずも出掛けた。幸ひ綺麗な敵娼だ。半時間ばかり歌など歌はせて、聽て金錢を卓の上に置いて歸らうとすると、女は妙に遠慮してその金を受けとらぬ。遂に私も妙な義理立から御意に従つたが病氣が怖い。歸ると直ぐに宮内省の醫者から藥を貰つたりして騒いだ。

もひとつは船の上だ。船長の招待會があつて西班牙の大使館員と一所に御馳走に



與つて居る時「御用心。敵が來ました」と船長の叫ぶ聲に、應じて浪の上を見ると小舟が來る。廳其の小舟から派手やかに装ひ飾つた若い女が上つて來て私の側に侍る二十ばかりの艶色に、活潑で、伊太利語ばかりしか使はぬ。囀るやうな滑かな言葉の調子だけで私は酔はされた様になつてしまつた。喋りながら食ふうち、女は意味ありけな秋波を時々送る。廳てのこと長い間凝乎つと正面に私を見据えて居たが、急に飛びかゝつて『まあブルモンさん懐しいは、久し振りね』と云ふ調子で抱きついて滅茶々に接吻を押しつけた、そして尙ほのこと黒い眸を見開いて、私の顔や胸に惚れ惚れとする。私は最初は驚いたが此の單兵急に茫然夢の様になつてしまつた。廳て漸くの事で座が鎮まると、女は此の振舞の原因（或は虚の手段だつたかも知れぬが）を話す。ブルモンさんと云ふのは女の情夫で、私がそれにソツクリ似て居ること、それでブルモンの代りに私を可愛がつて呉れると云ふ。その日はそれから女に硝子裝飾品工場などの見物を強請られて散々買物をさせられた。翌日はこち

らから女の許に行つて見ると、だらけたその寢衣姿の何とも云へぬ艶な味。これこそ本當の南國の花であつた。そして此の豊艶に身を抱き緊めて我を忘れる刹那今私の居る處は賣春婦の私室ではなくて戀愛の聖殿にでも這つた様だ。始めて抱かれてその肉の美さにこれから酔はうとする間隙、私はゾツと全身に水を注がれるやうに蹣跚と椅子に仆れて泣きだした。實は此の涙で以つて讀者よジャン、ジャック、ルツソオなるものゝ本領を知つて貰いたい。

此の涙の何の故かは恐らく誰も想像が出來まい。あゝわが手に在る此の愛の傑作とも云ふべき女、天使の様な才色、それが今船長の手許から斯うして私の腕に移されて居る。何の罪もなく無邪氣にやすらかに凭れて居る。何のやうな悪いことがあつたが爲めに女はかくも淫賣婦にまで墮されて居るのだらう。何處に缺點があつて斯くもその美を蹂躪されて居るか、あゝ此の麗はしい肌、頬の艶、齒の皓さ、呼吸の馨しさ、全身水晶の様な清淨な有様がそれを見るとどうしても彼女の肉體には病



毒などと云ふ穢けがらはしいものは無い。必ず其の血が無垢むくな清い純潔なものであることを證明して居る。しかるに私は先の夜以來まだ疑のある此の身體で、却つて此の美人に害を及ぼすやうな事は無いかと恐れた。そして斯麼思こんなが昂こじて涙なみだが出たのである。

此の涙に女は暫く呆ちきれて居たが、直ぐに様々と私をなだめて呉れた。やうやう氣を取り直ほして、處女かと思はれる程な清らかな白い胸に依りかゝらうとする利那ふと乳房の一つが萎しなびて居るのが眼にうつる。よく見ると今一つのも形が變だ。ウヌ此奴惡病の權化めと思ふと私の心も打つて變はる。女の屑くず、愛の芥、餓鬼畜生を抱いて居る様な心持、その嫌な心持を口に出さずと黙つて我慢して居ればよかつたものを私はまた愚劣ぐれつにも正直心から残らず女に話すと、逆に今度は女の方が怒つて顔を赤くしてツンケンして立つて行つて窓框まどわくに凭たれてしまつた。其麼事で喧嘩分になつたが、是非も一度會はねばならぬと行つたが又駄目、三度目に行つた時には既

う女はフロレンスか何處かに行つてしまつた跡で音沙汰も有らばこそ。

さて私は大使との衝突から、すこし胸のムカつくのを静めるため故郷のゼネバ湖畔タインに暫し退隱する都合であつた處、大使が私の事を巴里の政聽せいぢやうに報じたから、こちらも黙つては居れぬ。それに對して自己を辯護せねばならぬ必要が出来て、矢つ張り巴里に歸る事にした。途中父にあつた。

巴里に歸つて見ると、案外にも大使對私の衝突が大評判となつて居り、同情は寧ろ私にあつて大使の狂暴きやうぼうと殘忍ざんにんとを罵ののしつて居た。が所詮大使と秘書と云ふ地位の差別から私の言分は通らず、私の心は此の時以來深く愚劣ぐれつな諸制度に對する憤慨ふんがいの種を藏したのである。がその當時は事件が私一人の個人的私利に關するので、崇高な感情も起らず、善友の忠告もあり遂にその時は勃發せずにしまつた。

私の此頃の親友のアルナツ君は西班牙人であるが、稀に見る一種獨特の面白い人物で非常に仲がよくなつてしまつた。遂には私はアルナツ君の故郷のアスタシアに



行つて一緒に住まうとまで約束したが、此の親友は妻子を残して惜しくも夭折してしまつた。で私はそれに失望して私の元の宿のあるサンカンチンに歸つて燻ぶり込むだが此の寂寥空漠な生活の間にも尙ほ一點の慰藉がある。枯野に咲いた唯一の花といふのは宿の主婦がその郷里から連れて來て雇つたテレサと云ふ廿二三になる御針女である。此の娘は無口なしとやかな人形の様<sup>にんぎやう</sup>に愛らしい女で、私が初めて此の女を食卓で見た時深くも心を奪はれてしまつた。食卓などで時折随分無遠慮な話が機むものだが、稠人荒座のなか肅として態度を正しくして居るが此の娘の常であつた。それに娘は其の父が元造幣局の役人であつたが今は職を失つた爲め糊口までも差支へて居ると云ふ境遇ゆえ。自然私の同情は此の娘の方に向く。けれども娘も私も臆病もので容易に佳境に行きさうにも思へなかつたが、それでも試みれば案外早い。私は表面だつては結婚したくは無いが生涯決して見棄てる様な事はせぬと娘に誓つてしまつた。テレサは私に身を任せる前に何だか非常に懸念して妾は決して貴

方の愛をうけるに足る女では無いと云ふ様な事を繰りかへして云ふ。どうも餘程困つて居る素振り、覺つて欲しいと云ひたけなのに、私は多分病毒でも患つて居るんだらうと思つて居た。此れは随分勘違ひな想像であつて、暫くの間二人の言葉が頓珍漢であつたが、何の事かい、よく聽いて見ると、テレサはまだ餘程以前ある男に欺されて只一度過をしたとの懺悔、私は天にも昇る程喜しかつた。それなら何でも無い巴里の娘で二十歳を過ぎた處女があるものか。嗚呼、貞淑にして健全なる愛人テレサよ。

此時私は心に深く最早あの『お母さん』のワレンス夫人と同棲するのは絶望すべきことであるを思つた。又實際においてテレサはよく私の心の缺を満たして呉れた。がテレサは驚く可き無教育な女で、幾ら教へても日時計を読むことさへ出來なかつた。十二ヶ月の名前も順に間違なく云ふ事が出來ず、日常の言葉も屢々頓間な事を云ふ。是ほど智慧の働かぬ女ながら決して馬鹿でなかつた。難義な事件となると



誠にいゝ意見を出して呉れた。私は幾度も彼女の爲めに危急を救はれた。何となく世界一の賢人と同棲して居るやうな爽やかな心持さへあつた。

時は過ぎる。金は乏しくなる。私はテレサと二人だが實は四人、いやそれ以上の糊口をひき受けねばならぬ。テレサは無慾だがその母親の悪業なこと。よくテレサに差金をあて私から種々に巻きあけるのであつた。テレサが裁縫で得る金も固より母に取られる。テレサは全く家族の餌食になつて居た。しかし斯麼境遇の間にも私は歌劇の興行を企てたり、俳優に自作の脚本を見せたりしたが中々面白く行かぬ。するうちフランカルと云ふ科學者が、學士會院にはいる希望から著述を企てそれについて秘書役がいるので私は傭はれる事になつた。それと同時に私はフランカル氏に頼んで歌劇館で私の作を試演して貰ふことにし、或る部分では豫期の喝采を得たが改めたい箇所も多く發見したので撤回した。此の際は兎も角もフランカル氏が私を秘書に専心させやうとして居る處だから氏は私の名聲の揚る事を左程悦ばな

かつた。それに私も生活がせまつて居るから一心になつて秘書の役を忠實に努めた。そしてフランカル氏と一所に化學の研究など一心にやつた。一七四七年秋にはシユール河の邊のシユノンソーの城と云ふ皇室の別邸に連れて行かれ、景色の美しい處で音樂の作曲や、喜劇を書いたりした。此の理想的な生活の爲め私の身體は肥満した歸つて見るとテレサの腹も頗る肥満と云ふ有様だ。之れはどうも私にとつて一打撃何とか方法もがなと思案にくれた結果、私も遂に棄兒院を繁昌させる一人となつて赤子を産婆の手から直に棄兒院に移してしまつた。翌年も又此の方法で困難を逃れた。私は初めの時と同じやうに平氣であつたが、テレサは悦しがるところの騒ではなく、震へながら澁々に随つた。此の恐しい事件は後年隨分私を苛責したのであつた。

斯う云ふ事件の間に同志と『皮肉』と云ふ雑誌を出したり百科辭書中の音樂の部を受持つたりしたがみんな無駄骨折に終つてしまつた。



## 第八卷

雑誌『皮肉』の同志で私の最も親しい一人ヂデローは筆禍の爲め獄舎に繋がれ加之も土牢にいれられたが、聽てバンセンスの城に移され、友人の訪問を受けることを許されたと云ふ事を聽いて、私は全馬力を出して急に爲かゝつた仕事を片づけて彼を訪ふた會つては只涙と溜息とばかり。私は友を抱いて一語も出なかつた。彼は城内の園を自由に散歩する事を許されて居たが、訪問してやることは幽鬱に陥るを防ぐから三日置位には必ず出かける事にしたその道程が約三里、私の財布では貸馬車にも乗れぬから、夏の暑さの厳しいにもかゝはず徒歩で行く。枝の落された並樹は日の直射を遮ぎらず、影が無い。私は暑さに疲れて身を路傍に投げる事も多かつた。或る日の徒然に雑誌を携へて讀みながら行くと、不圖ヂジョン大學が「學術の進歩は道德を腐敗せしむるや如何」の懸賞問題を出して居る。私は頓に興奮して應

じて見やうと云ふ氣になつた。ヂデローも大いに賛成してくれた。此の興奮の爲めに起る眞理自由、徳行の大感情の爲め、小感情の如きは忽ち閉息してしまつた。私が此の論文を作るには一種獨特な方法でやる。即ち夜の寝られぬ時間を此の仕事に向け、寢床で眼を塞つて思索する。すると不思議に一字一句まで明瞭に推敲することが出来て大丈夫だと自信して何時しか熟睡に落ちる。が朝になつて筆を執る段となると忘れてしまふ仕方が無いから書記を雇つて朝早く寢床の中で昨夜の腹案を書きとつて貰ふ事にした。愈々出来あつたからヂデローに見せると大變譽めてくれる。しかし熱情に過ぎて理路を缺ぐなどと評して居た。私は大抵な友人には秘密にしてそれを大學に送つて置いた。

此の項私はテレサと一所に棲みたいと思つて居たが恰も好しフランカール氏が私の俸給を五十ギニアに上げて呉れ尙ほ氏の夫人が幾らかの家具を分けて呉れたのでそれとテレサの持つて居るのを合はせて、グラントホテルの一部を借りきり、テ



レサの父母も一所に皆で棲み込むだ、爾後五六年間此の生活が無事に続いた。テレサの心が天使の様であつたばかりに此の家庭は圓滿で平和であつた。住居は四階。見おろす街路。窓に近く卓を置いて櫻んぼうにパン、乾酪チーズに葡萄酒二三杯と云ふ御馳走を樂むのが常であつた。しかし此の頃私はまた馬鹿遊びをやつた。馬鹿遊の友達は愛嬌者のグリムとクルプセルと云ふ二人の獨逸人。三人一所に酒でも飲まうものなら面白さに別れる事が出来ぬ。殊に變痴氣へんちきなのはクルプセルであつて若い女を一人或處に構つて居た。そ處に彼は私等を引張り込むで頻に飲むだが、飲むだけでは満足せず、クルプセルはそれから先の樂も一緒にしやうと主張しだして、とうとう三人で順代りにその女と共に次の部屋に這人つてしまつた。女は泣いていゝか笑つていゝか分らぬと云ふ見えであつた。

さて此れは私の最後の馬鹿騒であるが、私は新論文を書いて盛に人道論をやるうち、遂に私の大反省を促して來た。即ちテレサの三度目の妊娠にあたつて、最早や

私は平氣で子供を闇の世界に送るやうなことをするに忍び得なくなつてしまつた。最早斷じて主義に殉ずる。正義に依り、人道に依り、至醇しじゆんな宗教的情操を想ふものとして私の子供の運命が痛切に考へられる。涙あり、感激あり、惡を憎み善を愛するわが心の叫び、いかで人間の最大最高の愉快な此の義務を行ふに躊躇しやう。ジャン、ジャック、ルツソオは決して無情な人間ではない。とは言へ私は自身で子供を育てる方法が無いから、矢張公の手に託しやう。之は當然である。ナラトリーの理想國も之れである。(私の過ちであつたが)又一面には、彼の子供等をして父の運命を免れしめた事を幾度か神に謝した。此の意味で棄兒院は無論是認である。第三の子も無論棄兒院にいれるし第四第五もさうした。が最早之れを合理的合法的に信じて居るから差し問への無い點で公言した。私の子としての愛を誓ふやうにした。

フランカール氏は私を秘書から更に會計役に擧げてくれた。實は前の會計役が老年にもなり金も溜つたから隠居したため、私が其の跡釜に据ゑられたのだ。するう



ち私の幼少からの持病の腎臓病が重くなつて、名醫の診察によれば餘命幾ばくもないとの事だ。そ處で私はつくづく思つた。僅かな餘命を會計役で終るのか、心に嚴正な道德主義を樹て他人に物を施與ほどこさねばならぬと云ふやうなことを主張しながら身は收入役に使はれる會計係！私は病床にありながら此の矛盾を非常に醜惡しうあくに感じ以後は全く利祿を求めず、出世を計らず、只清貧せいひんに安んじて獨立の自由の氣を樂むことに堅く決心した。さていざ獨立となつても衣食の必要はある。私は至極簡單に考へながら會計係の代に樂譜謄寫人となることにした。するうち論文が懸賞に當選したヂデローは早速出版の事を世話してくれた。無名の著者は一朝にして知れ亘つた。愈々フランカールに手紙を送つて辭意の決心や新たな清貧生活を始める自負ほこりを告げると氏は狂氣の沙汰と思つた。が私は着々と實行し、先づ服裝からと云ふのでレースの着いた服と白の靴下を廢し、饅頭まんじゅう鬘かづらを冠り劍を棄て時計を賣つてしまつた時間に縛しばられるのを嫌きらつたからである。さて私の著述が成功した際とて、此の新生

活は餘程世評にのぼり、従つて樂譜謄寫の仕事は中々繁昌した。又此の新生活は世間の好奇心を刺戟しげきしたものと見へ此の變挺へんていな男と食卓を共にする爲め、貴婦人達が様々な手段で私を呼び出さうとする。私が不愛相にそれを拒絶したりなどすればする程先方に執拗しつえうになつて來るのであつた。

私は此の清貧生活の間に脚本『村の卜者』を脱稿した。非常な評判で一躍流行兒になつてしまつた。幾回か試演は重ねられ遂に宮中で公演されることゝなつた。』

いよく宮中公演の日。私は不斷着のまゝ、髭も伸び鬘かづらも亂れるにまかせて、陛下きさきや后や皇族達や、その他百官綺羅きらを飾つたなかに導かれて行つた。劇は十分に感動を興へた。私の側に居る天使の様な婦人達が『胸に浸しこみますわ』などと頻りに囁きあつて居る。其の夜、さる侯爵から、明日は謁見仰付けらるゝに依り午前十一時に參内せよと云ふ使があつた。これは陛下が直々年金の御沙汰を下さる筈とのことと私は茲で大聲に光輝かやまあるその一夜よと叫びたいが實の處非常な苦惱の一夜であつ



た。

私は年金を受けない事に決心し、拜謁にも行かなかつた。私はかくて束縛から脱した。年金去れよ。その代り自由よ。眞理よ。勇氣よ。みな私のものである。『村のト者』は一七五三年の暮、ガーニバル祭に巴里で興行された。私が此の作から得た金は、此の際、他の人の得べき金額の四分の一程であつたが、それでも私には數年間の衣食の料となる程であつた。が此の生活上の安樂は、實の所非常の高價で購はれたのである。即ち之れから後に追々現はれて來た多くの嫉妬の種であつた。

私は一七五三年『人類平等の起源』を書き、更にその思想を進め、ヂデローの助言をも得て人類平等論を書いた。其の後私は頻に田舎の旅行を憧憬れて居たが一七五四年六月の一日、其の頃特に親しくして居たゴーフクールに誘はれて、故郷のゼネバに旅行する事になつた。健康に心配があるのでテレサも同行する事になつた。此の旅行中、私は四十二歳であつたが始めて人を信用するの危険を知つた。私等三人馬

車を一臺借切にして緩々と旅行して居たが、私は折々獨り馬車から降りてブラ／＼と歩いた。がとかくするうち妙にテレサが私が馬車から降りるのを嫌がり、自分も一緒に歩くと云ひ出した。よく聽いて見ると眞に案外、既に六十を越えて痛風に悩むで居るゴーフクールが、モウ若くもなく美しくもないテレサに對し此の旅行の首途から、或は金を與らうと云たり或は淫な畫を見せたりして口説いたと云ふのである。吁。尊く美しき友情の幻滅よ。

さてサヴォイに寄道した時『母さん』のワレンス夫人に會はずには居られなかつた。とは云へ眼のあたり會つて見ての慘めさ淺ましき。是が昔の華やかなワレンス夫人の成の果か。私はこれまで幾度も夫人に巴里に來る様に薦めたが、夫人は年金にひかされて此の苦境にとゞまつて居るのであつた。或る時ワレンス夫人は私の許に金の相談に來た。その時夫人は身に附けて居た最後の裝飾品である、小さなダイヤモンドの指輪を抜いてテレサの指に拵めた。テレサは直にそれを元に戻して、涙



を垂れて其の厚意を謝した。あゝ實に此の時こそは私がワレンス夫人から山ほどもうけた心の負債を拂ふべき時であつた。私は一切を放擲して夫人に従ひ、運命を共にすべきであつたのに……私は茲に最も大なる懺悔をする。

故郷のゼネバに着くと、頓に愛國熱に浮かされた。そして異教者としては此の共和國の市民權が得られないので再び新教に復歸した。

私は遂に故郷に永住して餘生を送り度いと切に思ひ始めた。が種々な事情からゼネバに棲むことを避けてモンモランシイの森の隱者庵に落ちついた。當時ヴォルテエルがゼネバに住居をして居た事も其の事情の一つである。彼と共にゼネバに棲めば、絶えず競争も始まるし、それも抵抗力が十分あるならいゝが、私の様な臆病な辯舌の下手な者がたつた一人であの傲岸な巨富を擁した天才と暴風雨を起し合ふ事は、私の平和な本性でないと思つたからである。

その時また思ひがけなくも昔の漂泊音樂者バンジュールに會つた。昔の天才らし

い氣品はなくなつて見すばらしい貧困者となつて居る變れば變るものかな。あの百花爛漫とした才華はホンの一時の若盛りの輝に過ぎなかつたか。彼の去つた跡種々な追懷に耽つた。

## 第九卷

都會を離れた私の本領の田舎生活！ 此のモンモランシイの隱者庵に私は全く昔のシャルメットの里のやうな幸福を見出さうとした。最初五六日間は何も手につかずたゞ懐しい田園の趣味に耽るばかりであつたが、臆て書類など整理して仕事に取掛つた。午前中は例の樂譜の謄寫に費し、午後は鉛筆とノートとを携へて散策に出かける。散歩は同時に思索であつてモンモランシイの森は私の書齋であつた。當時私の思ひ立つた著述は『政體論』『教育論』『音樂辭書』であつたが、生活の爲めには樂譜の謄寫をやり、著述は一切金の爲めにはしなかつた。若し私が此の時専心著述に掛つ



たならそれは随分豊富な或は豪華な生活も出来たであらう。然し私は考へた。パンの爲めに書く者は直ぐに心火を燃やし盡し、堅實な偉大な文學は斷じて生れまいと。私の眼前には理想の別天地が開かれて私は頻りにその簡易にして高尚なる制度を冥想した。世間の學者の謬論僻説と、社會組織の酷薄悲惨がまざまざと眼につく。私は私一人の力で此の人生の墮落を救済しようと思し、一種新奇な生活をとるやうになつた。私の實質は根本から一轉した。最早昔日の臆病なハニカミ性では無い。大膽な勇敢な自信自尊の念の強い男子であつた。

斯様な生活のうちに伯爵ホルバツハ夫人と深く相識るやうになつた。これは頗る小説の發端じみたものであつて、夫人が此のモンモラシイの森の邊を馬車で行く時馭者が近道をする心算で谿底の沼に馬車を陥してしまつた。夫人は全身泥まみれになつたまゝ私の隠者庵に辿りついた。そして家も揺ぐやうに笑ひながら入つて來る夫人の心置なさ、私も高笑ひで迎へた。直とテレサが様々なものを持つて來て夫人

に着替へさせる。私も夫人に今日は御身分を捨て、御遊び下さいと云ひ夫人も満足して面白いことだと興がたつた。夫人の姉デビネー夫人とは私は餘程以前からの相識である。二人とも佳人であつて、此の事があつてからと云ふものはその面影がどうしても眼のあたりから消えうせない。私の晩年の空想を頻りにそゝる。暫くもジツとして落ち着けない。何とかして此のノボセを下げねばならぬ。遂に私は一篇の小説を描くことにした。

此の數年來私は嚴肅な道德主義を樹立していたから、柔弱淫靡な書籍と見れば猛烈な悪罵を放つて來た。それだのに今なまめかしい小説をかく私は、心中忸怩として深く耻ぢたがそれでも遂に想ひ止まる事が出来なかつた。

遂に『エロアサ物語』の初の二章を書きあげた。冬の日の寒さと寂さを慰めると云つてデビネー夫人は見舞の使などをよこしたりなどする。態々自分の肖像を送つて呉れた事もあつた。或る時は自分の肌身につけて居たのだと云つて英國製のネルの



下チヨッキを送つて呉れた。私は嬉しさ餘つて、夫人の身の皮とも想ひ其のチヨッキと添手紙に接吻を重ねたのであつた。春になると私の戀もやる瀬なくなつて盡きせぬ新愁の裡に『エロアサ物語』の稿を續けて行く。特にホルバツハ伯爵夫人の姿は何時も幻影となつて私の眼の前に浮く。此の時夢かとはかり伯爵夫人は庵を訪れて來た。伯爵の別荘が近くのオーボンヌの里にあるので、遊びに來たと云ふ。その時の夫人は男装で馬に乗つて居る。私は這麼變装は平常ならば嫌だが、此の時だけは何と云ふロマンチックな想に充たされたことぞ、まだ三十歳ばかりの女、顔は美しくはなくて瘡瘡の痕さへあり、近眼で荒れた皮膚ながら、長い髪の黒色の艶々しさ腰まで垂れたその波のうねり、氣輕で快活で邪氣は毛程も無く、まして美しい滑稽と頓智とが唇から轉び出るのであつた。夫人はまだ理智の定まらぬ若い時、ホルバツハ伯と厭々の結婚で堅められてしまつた。あゝ私の戀、眞實の意味での戀は私の生涯中たゞ此の夫人に對してばかりであつた。そして滿腔の愛を罩めて小説をか

私は眞に此の時ばかり戀の毒盃を飲むだ。夫人は遂に知らず識らず情人に對する様な言葉で私を酔はせる。吁！此の晩年に於て、而もその身心ともに他人の物である婦人に對して熱情を燃やすとは何たるミヂメな事であらうか。此の激烈な戀に悶へ悶へてまだ自分の態度をどうしていゝか判定がつかず愚圖々々して居るうち又もや伯爵夫人の來訪を受けた。私の身は燃ゆる炎のなかに立場を失つてしまつて、羞さに口が塞がり、ブルブルと身震がして正面に夫人の顔を見ることも出来なかつた。夫人は私の身體の此の時ならぬに震ひだした變化に驚く。私はもう何の隠すことなく心の苦悶の有りたけを打ち開けてしまつた。夫人は寛大であつた。私の痴情を勵ましはせぬが、深くも私の愚を憐んで、どうにかして私の戀の炎の消えるやうにと試みた随分厳しく私を叱つた事もある。然して夫人とて其の時の戀の炎には燃えたくて居た。

私の庵からオーボンヌの里まで二三里もあるので私は夫人の許に夜を明す事もあ



つた。夜食の後の月光を二人並んで歩む花園の夢、花園を過ぎて更に連る深い森に行く、森の蔭には清らかな瀧の音、あゝ美しくも懐しい此の記憶よ。アカシヤの花蔭芝生の上に座を占めて熱き涙を流しながらも、戀の悲さを語ると夫人も涙に濡れながら『あなたの様に切ない戀をする人は世界の何處にありませうか。けれども私等は愛しあふことの出来ない運命ではありませぬか』と云つて悲むだ。その折の情の濃やかなたゞ一回の志れがたい抱擁よ。

けれどもこれが誤解のもととなつてデビネー夫人はじめ多くの人の機嫌を損じその上、姦計詐謀を行ふ一味のものがあつて私は苦悶懊惱のうちに隠者庵を立ち退かねばならぬ様な事情になつてしまつた。けれども立退いて何處に行く處もない。冬であつた。寒い。假しや森の中、雪の上に寝るとも、立ち退くの外は無い。私の一生のうち此の時位困つたことは無い。しかし私の心は憤激に燃えて居る。斷行。斷行これより外はない。名譽と憤慨との爲めに心は刺立ち返り頓に勇氣が百倍した。

## 第十卷

幸ひにマサスと云ふ官吏が私の困つて居るのを座視しないでモンルイの小さい家を貸してくれた。隠者庵立退は私にとつて非常の興奮でもあり、精力の發作であつたが、落ちつくと同時にガツカリした故だ。持病の尿閉が出る。痔が痛む。慘憺たる事になつた。春が來ても回復せず、一七五八年は丸で病床で送る。もう死も近づいたと思はれた。友人の同情は幻の泡沫が消えてしまつたやうに、すべての歡樂が遠のいて行く、やうやくにして淋しい心を引きたてながら『劇論』と『エロアサ物語』とを脱稿してしまつた。

一七五九年の冬、私は友人の厚意から『學士論集』の一欄が私に提供された。毎月二回の樂な仕事で月給は八百リブル、随分割のいゝ仕事ではあつたが、私は斯う云ふ仕事には氣がすゝまず鄭重な禮狀をだして斷つた。其の頃私は文學を棄てる覺悟



をして文學者と云へば非常に嫌になつてしまつた。又身分の違つた上流のものと交際することも愚なことと悟つた。著述商賣は眞實蛇蝎視するやうになり、只もう隠居して安靜に死を待ちたかつた。しかし『劇論』と『エロアサ物語』とは千クラウンを齎した。その金を預けた利子で、樂譜の謄寫をやりながら樂に食つて行けるので、嫌な著作生活もはやく埒を開けねばならぬと、企てた『政體論』など、五六年掛りさうなので思ひきつてその一部分を『民約論』と名づけ他は焼き棄ててしまつた。全然金の爲めの『音樂辭書』これは機械的の仕事であつたから時の便宜次第として跡に残して置いた。

さて著述家が筆を棄てると氣拔になる。隱居の無聊を慰めるために、たゞ一つ自傳を書くこと云ふ事にした。自叙傳にはモンテーンのもあるが、あれは虚偽だ。私は必ず赤裸々を書いて第一等のものにしようとした。

が此の絶對的退隱の計畫が又もや思ひもかけぬ運命に破壊されて、私の身は渦潮に巻きこまれた。

## 第十一卷

眞に洛陽の紙價を高からしめると云ふのは私の『エロアサ物語』の出版であつた。出版前に非常な評判になつて居たから豫期其儘の大成功を博した。一體此の小説は佛蘭西の男女を手厳く扱つたものだが案外に巴里に一番受が善かつた特に貴婦人の間には非常な熱愛を以つて耽讀された。又私の教育論は『エミル物語』と題して、リユキセンブルグ大將及び同夫人の好意により出版の運に向ひ約二千五百圓の原稿料及び製本二百部を貰ふ事になつた。

『民約論』と『エミル物語』とそれから例の音樂辭書などで生活も安全になり、特に私の爲に大儲をしたと卒直に語る書肆があつて私に酬いる爲に三百リブルの年金をテレサに贈る事を申出でた。テレサにとつては實に大きな信頼であつた。が不幸に



してテレサは經濟を知らなかつた。虚榮をするのでもなく、食むさばるでもないが、只不注意にダラシなく金を使つた。

さて『エミル物語』の出版までは非常な故障があつた。始めの頃かうせい校正刷せいさつが來おつたが、聽て遅くなりだし、遂にバツタリ止つて了つた。理由がさつぱり判らぬ。巴里と茲との遠距離だから理由が判らず幾ら問合はせをしても返辭へんじが無い。私は氣が氣でない。私が最も努力した最後最善の著述が俄にわかに暗い運命のなかに葬はなむられて行く様な氣持がする。絶版ぜつばん禁止きんしかとも想像される。實に堪へがたき苦悶をした。幾通も幾通も手紙を書いて今度こそは返事があると待つて居たが遂に梨の礫つよである。私はモウ殆んど精神錯亂せいしんさくらんに陥つてしまつた。そして私の健康も元氣もだんだん衰へて行く。最後最愛の著述が此の不名譽を蒙るかと思へば自分の周圍に群つて居る奸策密謀かんさくみつぼうに對して恐怖疑懼きやうふまの念が群り起る。よくも其儘死ななかつた事と思ふ。

が此の『エミル物語』も遂に出版された。しかし他の著述の様に喝采を博する譯に

は行かなかつた、たゞ極少數な識者で秘密の間に讚めあつたりした。時に種々な物議を醸しだし、政府は私をゆるすべからざる不謹慎ふきんしんなものとなし、茲に何らか嵐が起つて來さうな不安となり何となく山雨さんう來らんとして風物凄せい有様となつた。噂は次第に險惡になつて、高等法院は私に對して疑惑ぎわくの眼をむける。如何なれば私は斯く善き事を爲し、善き事を書きながら未曾有の惡運に陥るものかと、深く心を傷めたが、しかし私の此の書の出版に關してはリュキセンブルグ大將夫妻の盡力と保護とがある以上、迫害者の手段たぐましも遅くすることは出來まいと思つた。そのうち大將はデピネー夫人の友なるダアユと云ふ僧侶からの通知であるとして私に重大なことを知らせて來た。曰く高等法院では愈々嚴重な處分を爲す事に決し、來る何日私に對して逮捕狀たいぼじやうを發する筈だと、しかし私にはこれは何となくあの事件以來面白く行かぬホルバツク伯一味のものの欺計きけいではないかと思はれる節ふしもあつた。とにかく何か私には判らぬ秘密があるに違ひないと思はれた。明日は愈々逮捕狀が發せられると



云ふ六月の八日の夕にも二人の友人と共に辨當を携へてシヤムポーまで遊びに行つたその時酒杯を忘れて、麥の莖を葡萄酒の壘に置いて吸ひあけるの歡をなした。がその日の午後になつてリュキセンブルグ大將夫人からの來翰に『色々盡力して見たけれど矢張り嚴重な處分をする事に決定した。何分激昂が烈しいので何うする事も出來ぬ。宮中からの命令で高等法院は何處までもやるし、明朝七時には逮捕狀が發せられ、直に執行人が其地向ふ筈。但し本人が逃亡すれば敢て追ひかけぬと云う約束は得たが、若しその儘にして居れば逮捕の外は無い』とある。

私の親しい去る婦人は即座に英國に行けと薦めた。テレサは何うなる事やらあたりも憚らず泣きくづれた。私は一人で亡命の客となることにきめた。テレサは何うしても私を一人は遣らぬと云ひ張つたが、私は此の場合二人行くの不便を説き諭し、跡の始末の爲にも是非テレサの残る必要ある事を話し、少し落ちつけば呼びよせると約束し、リュキセンブルク大將もその約束に保證をした。吁。十七年間、殆

んど一日も離れた事のない二人が今別れる。『テレサよ勇氣を出して呉れ。お前は是まで私の盛りを一緒に楽しんだが、是からは私と悲惨を一緒に味ふばかりだ。私に附いて来れば今後は何處へ行つても侮辱と災害との外は無いものと思つてくれ』私は斯う云つた。

逮捕の役人は夜八時に着する筈で、私は午後四時に出立した。

私は先づ瑞西國のキヴスンドに赴き、舊友ルガンの家に暫く止まらうと思つたのであつたが途中で馬車が役所の爲め検査を受けると云ふ煩はしい豫想が湧いたので幾度も道を迂回した。馬車がベルヌの州に踏みいると、私は直に馬車から飛び出て歡喜のあまり踏まへた土に接吻して叫んだ。『徳義の保護者たる天よ光榮あれ。我は自由の國に這入る！』



亡命後は迂餘曲折の後モチエと云ふ所に落ちついて山中の隠棲をする事になり、其の趣をテレサに通ずると、テレサは直ぐにやつて來た。聽て私は州の知事に書を送り保護を求める旨を頼み込むと、豫て聞き及んだ通り寛大な知事は私の願をいれる。私はトラヴェールの莊司マリチネー氏と共に知事邸を訪問した。マルチネー氏と私とは性質の類似か非常に交情が温かになつた。私は此のモチエに土着する決心がつくと、服装をアルメニア風にすることにした。モンモラシイに居た時分アルメニア風の衣服を拵たのであるから、早速それを着る事にしたのだ。胴着、毛皮帽、長衣、皮帶、皆揃つて居る。服装を改めると同時に私は全く文學を棄てた。安逸無事、是れ以外に望みは無い。斯うした生活に私は獨りで呆然居るのは退屈でもなんでも無いが、他人と相對する時の苦痛と手持無沙汰、どうも堪えられないので、とうとうテレかくしにレースを編むこれを練習し始めた。女様な心持になつてせつせとレースを編む。絶えずやる。さて此の私の手製のレースは何に利用しやうかと

思ひまどつた揚句、新たに結婚しやうとする若い娘たちに、自分の乳で子を育てる  
と云ふ約束をさせてその紀念に此のレースを贈る事にした。

私は斯く知事から保護を受けたが、是れが又村の役人や牧師達の物議を醸す事になつた。矢張り侮辱を頻りに加へるやうになり、私を攻撃する目的で印刷物を配布するやうなことをし、屢々當局に私の保護が寛大すぎると責問するやうな事になつた。此の土地を私は死場所とまで思つたのに又これか。かやうな虚待のうへに、物價が非常に高く、此の分では數年のうちに折角斷念した著述生活をまたやらねばならぬかと懸念させる。

そのうち私が巴里で種々な辯駁をやつたのが文庫となつて『山上より』と云ふ題名で出版された。これが非常な激昂を社會に買ひ、ゼネバあたりでは斯麼怪物は活かして置けぬと騒ぎだした。モチエで私は随分澤山施しをしたから近隣の人々からは愛されてる筈だと思つたが、指喉するものがあつたといへ、又々四面楚歌、随分鋭



い非難の鋒先が私に向けられた。遂に高僧會で訊問を受けることとなつたが、私はたゞ走り書の理由書を提出したに過ぎなかつた。高僧會がこれが爲め不得要領に立ち消えたが、人民の激昂は益々甚だしい。とても此の地に留まれさうにも無かつた。今此の事を描かうと思つても私の記憶は混亂してしまつて一々細かに辿りかへすことが出来ない。教會堂からは背教者として私を犢神罪に宣告する、近隣のものどもは狼でも追ひまはす様に私を忌み嫌ふ。事態かうなるとさらぬだに人の眼を曳く例のアルメニヤ服が益々人の癢に觸つて指弾の的となる私は實に困つた。が此の際急に服装を變へるのも愈々こちらの弱點をさらけだすやうに見えるから、毫も改めずに、頑として長着に毛皮帽と云ふ風態である。嘲笑はドツとばかり到る處についてまはる。小石を投げかける。小石の兩位ならまだいゝ。町の中で不意に『奴が歩いてる。はやく鐵砲を持つて來い。撃ち殺してやる』など云ふ怒聲さへ聞こえる。這磨場合私も胸を擴けてわざと靜に悠々と歩くと、尙ほ更圖太い奴だと云ふので小

石の雨が降る。まさかに彼等だつて鐵砲で狙撃するだけは言葉ばかりに止めたのであつた。

斯う云ふ慘憺たる中にうける同情ほど嬉しいものはない正しい人は多く私の爲めに奮慨して呉れたが、なかにもP大佐のごときは非常に意を盡して私の爲めに辯解して呉れた。私は此の知己に感謝する爲め。此の正義の軍人がある時知事に推薦して宮中顧問官の榮職を贏ち得るやうにしてやつた。私の運命の數奇さ。高い處と低い處との極端を同時に漂はせる。一方に村人に石を投げかけられるほどに蔑視されながらも一方に宮中顧問官を推薦する程の手蔓のある身の上であつたのだ。

尙ほひとつの悦しかつた事は此の村人の間に敬せられたヴェルドラン夫人の來訪であつた夫人は令嬢同伴で此の近くの温泉に來た序にモチエに寄て三日許り滞在して呉れた流石の亂暴の村人等も此の夫人令嬢の滞在中は遠慮して居るらしかつた。が或る夜村人は私の家に頻に石を投げ、朝になつて窓の椽に石ころが澤山あるのを



見て夫人は非常に心配し、眞心から切に英國に遁れてこの危難から遠ざかれと薦めてくれた。

ことにヴェルドラン夫人の手を経て英國のヒュームから來遊を促す親切な手紙まで受けとつた。英國のものは私は何だか嫌だけれども、ヒュームと云ふ學者は頗る好きだ此の頃ヒュームは佛蘭西の學者社會に名聲を揚げて居り、ともかくも此の積學者と交を結ぶのは私の望む處であつた。ことにヒュームに就いて私の氣にいつた逸話がある。これはヒュームが、彼の學説を打破しやうと思つて書いた論敵ワレスが其の書の印刷中據んどころない用事から旅行に出かけねばならなかつた。そこでヒュームはワレスの不在中其の書の校正から其の他の一切出版にいたるまでの面倒を見てやつたとの話、是れは如何にも面白い。私とても或る時は私を罵倒する歌の本を其の作者のために賣り擴めてやつた事もある。

ヴェルドラン夫人が歸ると又村人が迫害しだした。九月の初、モチエの祭り晩な

ど眞夜半に裏手の廊下に恐ろしい襲撃をうけた。小石の雨が何の遠慮もあらばこそ見る見るうちに戸も窓も破壊する。飼つて置いた犬が随分と防戦をして呉れたが、すさまじい敵の猛襲に辟易してしまつて、片隅に縮み込む。私はすぐに起きあがつて厨の方に行かうとすると、鋭い勢で唸りながら大きな石が窓を破つて足許に落ちる間一髪、一步進んで居たらそれを胸に受けて私は死ぬ處であつた厨ではテレサが生きた心もなくブルブルと震へて居る。

此の夜は隣人のお蔭で静まつたが翌日村の重だつた人々が來て、何分斯う云ふ形勢だから居所を遠方に移して呉れと只管頼むやうに勧めた。

遂に此の爲め私は島の生活をする様になつた。即ちビエヌ湖の中央のサンペテルの島を私の隠遁所にする事にした。此の島は周圍一里位の孤島で畑も牧場も果樹園もある。瑞々しい森さへ連つて居る全島中家らしいものは只收稅役の住んで居る大きな館が一軒あるばかり島の山懷に風を避けて建てられて居る。葡萄の收穫のある



頃にはビエヌ湖の沿岸の各地から人々が此の島に舟を寄せて一日の遊山を娛むと云ふ様な地である。私はテレサと一所に此の收税役の家に寄寓する事になつた。此の隠遁所は如何にも私の静かな性質に適し、且つ暴民の石のとどかぬ所にある。もう浮世を棄てた悠悠自適な生活で、私は植物採集などに餘念のない日を送つた。

水の漾ふのを見ると私には何とも云へぬいゝ心持がする。水は私の夢を縹緲と誘ひ出す。天氣の晴れた日には私は島の小高い處に行つて水の面をわたる朝風の清々しいのを吸ひながら彼方の岸、此方の山、眺望麗はしい湖畔の景色に染みじみと見惚れる。

朝飯がすむだ時には私は手紙を書く事にした。厭な仕事故額に皺をよせる。それから讀書をする。リンネ式に植物學を研究したりする。午後は氣の向くまゝに身をまかせる。小舟に乗るのが好きで、收税役に教はつたまゝ、一本の權で自由に舟を操るだけになつた。岸を離れて湖心に漾ふのが馬鹿に悦しく、何だか非常に祝福さ

れて居る様な氣特がする。けれどもそれは湖水のうちだけの話、向ふの岸には上陸して見たくない。たゞ舟を浪にまかせて何とはなしに呆然となる。理由もなく氣持がいゝ、『オ、自然よ、我母よ。我は獨り卿の保護をうけつゝあり』と忘我の聲に自分ながら驚く。私はたゞ思つた。此の湖水が直に大洋に連つて、岸と云ふものが無かつたならと。

が湖畔にたまには上陸する事もある。それは連れて來た犬を喜ばす爲めであつて私は丘の草の茂みに腰をおろして空想に耽る。何となくロビンソンクルソーの様だ。

また私は南の方にある小さい島に兎を移住させて繁殖させた。兎は柳や早苗蓼などの草木の茂つて居る間を自由に走つて子孫を殖やす。それを見るのがまた私にとつて最も面白い。此の外に果物の收穫の手傳が私にとつて非常な娛みであつた。或る時、ベルヌから私に會ひに來た人があつたが。丁度私が林檎を採りに樹にのぼり腰



の袋が一杯になつて身動きのならぬ處、その人は私の斯麼姿を見て笑つた彼はベルヌから來た人であるが、私は心のうち此の人がベルヌに歸つて私が斯うして悠々自適して世を忘れて居ると評判すれば、それでもう私に對する迫害は無くなるだらうと思つた。私は全く此の島に馴染むでしまつた。一日でも島から離れるのはそれだけ幸福を殺がれる……と云ふ様な心持になる浪の荒れ狂ふ夕暮もある、其時私は岸に出て砂原に腰かけ、浪の飛沫を身に受けながら足もとに碎け散る浪に、さも身に辛かつた浮世の浪を想ひ較べて今の平靜が堪えられない程悦しく、その爲め私の頬には幾線も涙の跡を刻まれるのであつた。

が此の幸福もまた破られてしまつた。或日ニドウの代官から手紙が來て、即刻此の島を立退けと云ふ。吁。立退け。世界の何處に私の家があるのだらう。私は夢かとばかりに驚いた。

何の準備もないのに突如として立退け！ 私は憤慨して一刻争つて躊躇なく立退

て見せたい。けれども私の勇氣はもう挫けて蹂躪られるまゝを甘受せねばならぬ。私は此の時始めて自負心を傷つけてしまつた。そして意氣地無くあはれにも立退の猶豫を乞ふた。しかるにベルヌからの慘酷な返辭は曰く、廿四時間内に此の島及び當共和國の直接間接の領土内を立退くべし若し再び領土内に踏みいらば直に嚴罰に處すべし。

一切窮す。只一つの道はテレサを残し、私だけ伯林に行つて知己を頼るばかり、早速大急ぎで準備を整へ、翌日の朝、最後臨終の地だと思つた此の懐い島を出てピエヌの町に上陸し、茲に親切な人があつて此の冬中滞在せよと薦めて呉れ、それを私も有難く受けやうとしたが、ホンの一時の空世辭に乘せられて居ることが判つたので、二日の後に此の虐待國を去つてしまつた。

此の次機會があつて是れ以後の懺悔録に筆を續ける事があるとすれば、その時の發端は、私が斯様にして伯林に向ふ積りで出發しながらも、英國に向ふやうになる



次第である。私の運命をかくも種々に操つたのは全くあのホルバツハ夫人等の一味が巧に企てたことであつて、それ等貴夫人等が如何にして私を瑞西から追ひ、英國の友の手に引渡したかを詳しく語り度いと思ふ。

私は此の自傳を人の前に朗讀した際左の一節を附加へた。

『眞實を書いた。此の書の懺悔の事實に反することを他より聞くなれば、如何にそれが巧に證明されてあらうとも、中傷か虚偽かである。』

(附記) ルツソーは英國に渡りヒュームに身を寄せた。英國人は旺に歡迎したが後ルツソーはヒュームと不和となり一七七〇年巴里に歸り稍平和に暮し一七七八年巴里郊外に隱居し、七月二日その地で死去した。最後の十年間は全く狂的で猜忌心強く人と争ひ悲觀的であつた。彼の晩年を迫害狂と名づけたものもあつた。最後は自殺ではないかと云ふものもある。)

ジャン・ジャック・ルツソー著

エミール 生田長江編



## 序

ジャン・ジャック・ルッソオは近世の預言者である。彼はその『民約論』に於て佛蘭西革命の端をひらき、その『懺悔録』に於て近代のレアリズムの基礎をおいた。然してこの二著と併稱せられて、その畢世の三大傑作とも云はるる『エミール』に至つては教育界の風潮を全く一變せしめた。『自然に還れ』と云ふ彼が一大獅子吼は、ひとり十八世紀の歐洲に於て多大の意味を有したばかりでなく、更にこの二十世紀の日本に於て、特に意味深長なる言葉と云はなければならぬ。彼がこの偉大なる精神を以て著した『エミール』は、滔々として偽善の徒を養成しつつある現代の教育界に投ぜられたる一大爆弾である。

ルッソオは一七一二年六月ゼネヴァに生れた。彼が一生の行状は、その『懺悔録』に詳細に記されてある。凡ての天才に免れがたい缺點を彼も有してゐるが、それは



然し人としてのルツソオを我々に親しくするにとどまる。

『エミール』は當時の宗教を攻撃したかどを以て、巴里で焼打に遭ひ、著者は外國に亡命せざるを得なくなつた。それだけでも此著は意義がある。これ彼れが哲學觀を人生觀を直截に表白したるもの、その教育に對する全歐洲の觀念を一變せしめたものも無理はない。ベスタロツチの如きも、實にこの書の生んだ果實と云つてよろしい。

原著者並びは原著に就いては既に十分知れ渡つてゐるから、敢てこれ以上を云ふ必要はあるまいと思ふ。

生田長江

## エミール

ジャン・ジャック・ルツソオ著

生田長江編

### 第一編

(幼年期 總論)

何んな物でも自然と云ふ造物主の手から出る時は善いが、人の手に託せられると悪くなる。人は何一つ自然が造つた儘にしては置かない。其の子供は園の植木を見るやうに思ふ存分に曲けられ撓められて了ふ。だからと云つてその儘に棄て置けば萬事もつと悪くなる。それで私は世の中の慈愛と思慮しりょとに富んだ母親の方々に社會の境遇と云ふものに、あなたの若木が踏み碎かれないうやうに氣を附けて下さるやう



をお願いする。すればいつかはその樹の收穫みどりが、あなた方の努力に十分報いて呉れる。

抑々、我等の産れ落ちた時は羸弱るいじやくであり、無一物である。だから我等は強められ助けられなくてはならない。然るに吾々を強め吾々を助けるものは教育より外にはない。さて、此の教育は、天性、人爲、事物三者の力を借りなければならぬ。即、能力機關の内部的發達は天性教育で、能力諸機關の發達を應用するのは人爲教育で各々その個人的經驗から得る處のものは事物教育である。此の三種の教育が統一されて同一目的を追求する人は眞に教育されたる人である。以上三種の教育の中天性教育は人力の如何ともする事の出来ないものだが、事物教育は人の爲なければならぬものゝまた爲し能ふ事である。

さて教育とは「天性に従ふ」事である。吾等には生れながらに感覺がある。吾々が快不快を意識するやうになると、まづ快樂を求め、不快を避けようとする。遂に

は理性の興ふる幸福とか善とかいふ觀念のもとに事物を判断し、或は求め或は避ける様になる此の傾向が習慣しはに縛られる時は多少の變化を來す。此の變化のまだ生じない時の傾向を天性と名づけよう。教育は萬事此の天性に適ふやうにされなければならぬ。ところが人をその人のために教育しないで、他人に都合のよいやうに教育しようと思へばどうしたらよからう。茲に至つて天性に抗つて公民を造るか、社會に抗つて人を造るか、二者其の一つを選ばなくてはならぬこととなる。自然その儘の人は自分の爲に存在する。彼は數の單位である全體であるが、公民は分數的單位で其の價値は社會組織と云ふ全體との關係で定まるのである。斯くして人間をつくる教育と、國民をつくる教育と、此の二箇の矛盾した教育系統から、二箇の相反した教育の目的が出来る。即ち一は公衆的公共的で、一は箇人的家族的である。然るに今や國家的教育といふものがない。一の國家といものも成り立たない以上は國民といふものは成り立たない。國家と國民性の二語は近代の言葉から除去して仕舞



ふ必要がある。

世間には學校といふ設けがあるが、此れは矛盾する二箇の目的を追求して、遂に何物をも得る事の出来ない制度である。そこでは始終無駄骨折をする偽善の人物が造り出される。もしもこの二重の目的が一個人の上に何等の矛盾も無くして適應されるならば、人間の幸福の大障害物は取除かれるに違ひない。その二重の目的とは箇人と國民とである。這麼人が居るか居ないかを知るには、完全に成長した人を見て、それを觀察しなければならぬ。一言もつて云へば天性の人を知らなくてはならぬ。讀者諸君が此の書を読んで下さつたら幾分かお悟りになるであらうと思ふ。

然らば這麼天性の人物を養成するには何したらよからうか。まづ最初に何事でも他人から爲て貰ふ習慣を禁ずる事が肝腎である。それから人は銘々定つた社會上の身分があつて、其の身分相應な教育を受けなければならぬと云ふが、埃及の様には親の職業を繼がねばならぬと云ふ國ならば兎も角、社會の階級だけは永續しながら、常に人々の職業の變動する我々の國では身分相應の教育は却つて子供の本望に逆つたやりかたである。何事でも自然の秩序から觀察すると、人は皆平等で、各人共通の職業は先づ人間たる事である。吾々の眞に研究しなければならぬのは人生であつて。人生の幸福と辛酸とは如何にして處すべきかを知つた人が最もよく教育された人と云ふべきである。だから此の目的を以て善良に教育された人は何を遣つても遣れない事はない。だから眞の教育は教へるといふ事よりもむしろ訓練する事である。吾等は全局に目を注いで兒童を人生のあらゆる事件に遭遇する人として育てねばならない。經驗に依ると、あまやかしか可愛がられて育つた子供は、さうでない子供より多く死ぬやうである。苦痛は人間の運命である。苦痛に會はせまいとして、何麼事をしても駄目である。大切なのは強健なる精神でなくてはならない。

子供は生れると泣く。すると諸君は撫でたり賺したりする。然しまた嚇したり打つたりする事もある。がうして諸君は子供を喜ばせるかと思ふと、時には自分勝手



な事をする。ともかくも諸君のする事は子供に従ふか、子供を従はせるか何つちかである。子供は未だ口も利けないうちに命令し、未だ實行する事も出来ないのに服従させられる。時には罪なくして罰せられる事すらある。世間には這麼事で子供を偏屈者にした上で「困つた息子が」と云つてゐる親がある。さうかと思ふと「私は忙しい。子供の相手なんぞになる隙がない」と云ふ人がある。併し親たるものの最も大切な義務は専ら子供の教育である。唯子供に食はしたり着せたるするばかりでは、どうしてもまだ親たる任務の三分の一も盡されては居ない。親たるものは人類に對して人を預り、社會に對して社會の人を預り、國家に對して其の國民を預つてゐるので。自分一個の子供ではないのである。此の三つの責任を果すことの出来ないものは罪人である。しかも此責任を半ば盡して半ば放棄するものはもつと甚しい罪人である。親たるだけの責任を果す事の出来無い者に親たるの權利はない。その故に教師たるものは立派な人で無ければならない。眞に人を教育するには其の人が

先づ親とならなければならぬからである。凡そ親たる人が教師の如何なるものであるかを知つたら、自らその教師にならないでは居られまい。ところが茲に富有な人があつて業務多忙のため、子供の世話が到底出来ないとするればどうであらう。金を出して自分の義務を人に託してよいであらうか。斯くして託せられたる子供は果して第一義の教育を受ける事が出来ようか。どんな人か知らない、只地位ばかり分つてゐるが、私に子供の教育をやつて呉れとて頼んだ人があるが、私は其を承諾しなかつた。何故と云ふに若し私が承諾して私の考へ通りに行かなかつたら其の教育は失敗であり、若し成功した時は、其の子は爵位を棄て、更に公爵にならうとしないに相違ないからである。實に教育者たるの任務は重大であつて、私の様なものとても其の器ではない。むしろ私はここに一人の兒童を描寫して、其誕生から成長するまでの教育法を書かうと思ふ。

7  
 儲、子供を教ふる學問は人類義務の學問である。其の教師は寧ろ教育家と云ふが



よい。何故かと云へば、彼は生徒に教ふるよりもまづ生徒を導くものである。貧者に教育の必要はない。貧者は既に其境遇から一の教育を受けて他の教育を受ける事が出来ないからである。然し富者が境遇から受ける教育は自分にも亦社會にも其の利する處は少ない。云ふまでもなく自然教育は、人をして人生のあらゆる境遇に堪へる様にするのである。貧乏人を富者にしようとする教育は富者を貧乏人にしようとするよりも、もつと不合理である。貧窮しんきゆうに赴く者の數は、貧窮から身を起す者の數より多いからである。そこで私は今富者の中から一人の生徒を選んで之を教育し陶冶とらやして見ようと思ふ。

それはエミールである。エミールは良家の小兒である。私は將に偏見の犠牲とならうとするものを一人救つて見よう。

\* \* \*  
 エミールは孤兒である。彼に兩親があらうとあるまいと其慶事そんなは問題では無い。

今や兩親の義務は盡く私に託せられその権利は私が握つてゐる。エミールが兩親を敬まやまはなくてはならないけれ共、私の外には誰にも服従する必要はない。此れは第一の寧ろ唯一の條件である。此の他にも猶一つの條件がある。其はお互の承諾無しには決して別れまいと云ふ事である。相互に別れたいと思ひ、他人になつて仕舞ひたいと思ふ瞬間には、もう二人は既に他人になりはて、親愛の情は無くなつてゐる。

私は羸弱るんじやくな病身な子供を預る事は嫌ひである。さういふ病身な子供は只生きようくと努めるばかりで、其の肉體は精神教育の妨げとなるばかりである。只死なない事ばかりを考へて居るものに生くべき道を教へる必要はない。眞の勇者は醫者の居ない處にゐる。死といふ事の考へられない處にゐる。自然な状態にゐる人はいつも苦痛に堪へ不安に死ぬる事が出来る。人の心を凹ませて死に迷はせるのは醫者と學者と坊主である。エミールには命の危い様な場合でなければ醫者を呼ばない。さ

エミールは命を危くする者か



うでないと反つてエミールを殺すに過ぎないからである。

子供には度々湯浴をつかはせなくてはならぬ、身體が強くなるにつれて湯の温度を低くし、夏も冬も冷永浴をやらせるのがよい。斯くして様々な温度の水や湯に堪へる様にさせて置くと外氣の變化を感じない程丈夫になる。紐や襪襟ひも きやうほで子供を緊めて手足の運動を妨げない様に、いつもゆつたりと着物を着せるのがよい。然しあまり澤山着物を着せては不可ない。寒い空氣は子供を強くするけれども暖かい空氣は子供を弱らせる。子供が物を見分ける様になつたら、之を與ふるものを選ばなければならぬ。新しい物を喜ぶのは人の天性である。然し、子供は自分の知らない物を恐るゝ感覺を持つて居る。そこで子供には新しいものを見る事に慣れさせてやりたい。始終見てゐると物の怖ろしさは消え失せる。若しエミールを爆發の音に慣らしてやらうとするならば、先づピストルに麻屑でもつめ込んで弱く試みる。そして後には麻屑を入れないで少しの彈藥を入れ段々多くして、どんな爆發にも慣らす様

にする。子供は或る逃れられないものに遭遇して不安の念を起し、他人の助力を仰がねばならぬ時は表情で之を現はす。泣くのは則ち其の所以である。斯かる涙は願である。それを心得て置かないと、願は命令となつて了ふ。子供の力が弱いために初めは人に頼まうとするが、やがて指揮命令の觀念が起つて來る。斯かる觀念はあまりにかしづくから起るのであつて、其の他にもかくして天性でない不道德が屢々顯はれてくる。

子供が四邊あたりの人を自分の小使か道具の様に使ひ廻す様になると、どうにも斯うにも手が附けられなくなる。然しこれは教育の仕方が悪いのであつて、自然其の儘の權威ある心から出て來るのではない。此の原理を知つて置くと、自然の秩序を誤る事がない。左にその原理を示してみると、

一、子供は餘分の力を持たないばかりか、自然の要求さへ其の力で満す事は出來ないから、其の凡ての力は充分使はせた方がいい。



二、子供が智慧でも力でも生理上の要求を満すに足りない時は助けてやらねばならない。

三、有益な事でなければ助力してやつてはいけない。一時の出来心や、よくない要求を許してやつてはいけない。

四、子供の欲求が自然か出来心であるかを知るためにその言語や、欲求の表象を研究しなければならぬ。

此の法則によつて、子供の時からその欲求を力の範囲内に制限する様にして置けば、力の及ばぬ事を欲して自ら苦しむ様な事がなくなる。子供が束縛されもせず、又病氣でもなく、何の要求もないのに聲を長く引つ張つて泣くのは、習慣又は氣儘の叫びである。此習慣を治したり防いだりする唯一の良法は泣いても知らぬ振をするのがよい。又子供が一時の出来心や氣儘な心から泣くのを防ぐ他の方法は面白い珍しいものに氣を向け變へさせる事である。今や世は萬事質朴しつぽくの風廢すたれて其の弊害

は子供の玩具にまで及んでる黄金の鈴や、銀の鈴や、珊瑚や、水晶や、種々様な玩具それらはいかに無益有害であらう。それを皆放し棄て、花ある小枝、がらがらの様な罌粟の坊主を興へたい。子供は産れた時から言葉を聞かされる、吾々は子供が言葉を解しないから話し掛ける、子供が其の音聲こゑを出して眞似も出来ない時から話し掛ける。其の他、其の音聲の外、何にも分らない歌を無暗に教へられる。然しまだ年に似合はぬ言葉を使はせられるのは大變よくない。世間には自ら言葉を覺ゆることの出来ない子供はあるまいのに、わざと教へねば覺えないもののやうに餘り急いでいろんな事を教へ、遂に子供の發音を不明瞭にしてうやうやうな大弊害を生ずることが往々である。すべて言語について吾々が子供の爲めに懼おそるゝ欠點は決して八釜しいものではなく、容易に禁止したり矯正したりする事が出来る。けれども其の音調を批評したり、其の言語をとりいだして輕侮けいぶしたりして不明瞭なうろたへたおろおる聲で語る様にさせた欠點は遂に改むる事が出来ない。子供が言葉を稽



古する時には只解る言葉ばかりを聞き取り、明かに發音の出来る言葉ばかりを語らせる様にさせなくてはならない。子供には唯必要なものばかりを教へてやればよい。子供が云ひかゝつて口籠る時はその云はうとする所を推測して此方から云つてやつてはならない。子供は自分の實益上人から習はなくても自ら覺えるものである。子供には出来るだけ用語の數を少なくしなければならぬ。觀念以外の事を知つたり、自分の思考の及ばない事を語るのは、子供にとつて大變損な事である。小兒期最初の發達は殆ど同時に起る。子供は殆ど同時に語つたり食べたり歩いたりする事を覺える、これが即ち一生の第一期である。是れ以前は生前と大差が無い感情も無ければ觀念もなく、只僅かに感覺を有してゐるのみで、自己の存在をも意識してはゐないのである。

## 第二編 五歳から十二歳まで

(體育、經驗、官覺的教育)

幼年期は既に終りを告げて、今や人生の第二期とはなつた。子供が物を云ふ様になると泣く事が少くなるのは自然の勢で、茲に初めて子供の情意を表はす用語が變つて來る。然し、猶此の年になつても泣く子供があつたなら、それは教育者が悪いのである。エミールは決して泣かない。彼は痛い時には只「痛い痛い」と云ふばかりである。若し子供が轉んで頭を打つたり鼻血を出したり、指先を切つたりする様な事があつた場合には、すぐと駈けつけないで、暫くなり動かないで居なければならぬ。子供が怪我をした時には、此方の舉動一つで思ふ通りになるので些少の苦痛に打勝ち猶進んで大なる苦痛に堪へ得る様な勇氣は、此の時代に於て養はれる。エミールは怪我をしなければならぬ。私は決してエミールが怪我をしない様にと



願はない。馬塵に高い處に坐らせたり、火の側に一人置いたり、何か危険物の處に居らしたりすれば兎も角、私は自由にされてゐる場合の子供が、自ら死んだり腕を切つたり落したり大怪我をやつたりしたと云ふ話を聞いた事がない。子供は力を増すと共に他に訴へる必要がなくなり、自から助くる力が増すに連れて、他人に助けらるゝ必要も少くなる。且つ體力が増して來れば従つて其を指揮する知識も發達して來る。だから個人生活の初まるのも此の第二期である。此の時代に於て始めて自分に關する知識を得、何彼につけて自己と云ふ感じを起し、己も亦一個人だといふ自覺が出來、困難に堪へ、幸福に處して行かうとする。斯うなつて初て子供は道德的であるといふ事が出来る。人の生涯は大抵限があるが定められぬは人生である。人はいつ死ぬものか分らない。多く見積つた處で、此の年齢まで生き延ひる子供は全數の半分しかあるまい。だから吾々は現在を不定の未來の犠牲に供する世の殘酷な教育をどう批評したらよいか分らない。其の喜ばしい時代は、涙や、懲戒や、威

嚇や奴隸的生活の中に過ぎ去るのである。これも子供の爲に善かれと思つてゐるのであらうが、實は知らずくの間死に近づけて行く。あゝ教師は眞情を盡さねばならない。眞情を離れて智慧はない。子供は勝手氣儘に遊ばせよ。その嬉々たる本能を發揮させよ。子供の興へられたる束の間の喜びを奪ひ取つて永き恨を遺すな。そしたら彼等は何時死の神に召されても、人生の喜びを味つて死ぬる事が出来るのである。子供を教育するには専ら實物に依り自然の秩序に従はねばならない。悪い事をするなと規則立をせず、悪い事したら、其の時止めさせる。強いて規則立てしなくても、其の經驗と力の欠乏とは自ら子供の規則となる。彼等の身體を強壯にし且つ其の成長を促がすところの自然力に逆つた事をしてはならない。子供は飛びたい時には、飛ばせ、駈けたい時には駈けさせ、叫びたい時には叫びた方がよい。彼等に對してあまり嚴しいのと餘り寛大なのは、いづれも共に避けねはならぬ事餘り嚴しくして苦しめたなら、其の健康や生命を危くするが、又た餘りに大切に仕



過ぎると、却つて懦弱たぢやくとなり感覺は鋭敏になり、遂には多くの不幸を積み重ねるであらう。彼等を自然から来る苦痛に遭あはせまいとすれば、自然の備へない苦痛まで増し加へてやることとなる。自然から離れた人に、眞の幸福といふものはない。何麼苦痛にも會はせまいとするのは自然の幸福に離れさせる所以である。

諸君は諸君の子供を不幸に導く方法を知つて居られるか？ 欲しいものは何でも彼でも得させる様にすれば、必ず不幸者になる。其の欲望は滿せば滿す程増長して、遂には見るもの悉こごとくく欲しくなる、が神ならぬ身の何うして之を滿す事か出来よう。云ふまでもなく、子供は弱いから様々な束縛を受けて居る。然るに吾々の考のぼんやりして居る處から其の上にもまだ多くの束縛を加へてゐるといふは乘暴な仕業ではあるまいか。人は理性の時代になれば必ずや社會の束縛を受けるのである。何故こそそこそとその束縛の手を早めるのであらう。子供を奴隸の様に取扱ふ親である。やがては束縛せられる子供である。暫くなりともその若い自然の自由を享たげさせた

方がよい。

ロツクは子供と議論して理窟りくつづくめで教育せよと云つた。是れは今日主として採用せられてゐるところのものである。けれ共その成功は覺束ないであらう。理窟りくつづくめで育つた子供程馬鹿なものはない。云ふまでもなく理窟は他の凡ての能力の聚しゆり合體がうたいであつて、其の發達は最も遅い。然るに之を一番先に發達させようとする。若し子供が合理的であり得るならば、少しも教育する必要はない。子供は善惡を論じ人間の義務の理由を解すべきものではない。殊に服従の義務である事を生徒に信ぜさせようとしたり、又約束させようとしたりするが、こんな風にせられると子供は詐いつわつてさも理性に訴へてした様に見せかける様になる、子供はまだ義務の觀念が發達して居ないから、義務の何物であるかを知らせる事は出来ない。感じもしない義務を負はせると子供は褒ほめられる爲にも、罰を逃れる爲にも、不正直、詐偽さぎ、不誠實な事をする様になり、遂に其れが習慣となつて表裏ある人間となり終るであらう。



さて、教育と云ふものが世界に初まつて以來、競争、猜忌、嫉妬、虚榮、貪望、賤しい恐怖より外にまだ是れといふ程のものをも、案出する事の出来ない事は不可思議な次第である。ところが此の競争とか、猜忌とか、嫉妬とか、虚榮とか貪望とか、恐怖とかいふものは、極めて危険であつて、まだ身體の出来上つて居ない子供の精神を、激しく醗酵させ腐敗させる。幼い頭に這入つて行く斯かる早熟的な教育は、子供の心の奥底に悪業を植ゑつける計である。又子供は経験ばかりで教育を受くべきものであつて、言葉でいろんな事を教はつてはならぬ。子供は過失のどんなものであるかを知らぬから、罰を科する事は出来ない。子供はまだ道德に對する意識がないから、道德的の悪をする事は出来ない。だから叱つたり罰したりする事は出来ないのである。

一體、人の一生で最も危険な時代は、誕生から十二歳までであつて、此の間に根深く罪惡は萌すのである。一度萌したら、とても、打ち壞す事は出来ないのである。

そこで最初の教育は全く消極的でなければならぬ。道德や眞理を教ふるよりも悪や誤りに陥らない様に心意を制限するのである。何も覺えず、又何も教へてやらなくともよい。たとへ十二歳まで左右の見わけが出来なくても差し支はない。唯丈夫でさへあれば、子供は立派に理解力が働いて來るのである。だから現代の教育法と正反對の途をとれば殆んど誤りは無いのである。

勿論教育は合理的でなくてはならない。然し子供と議論してはならぬ。彼等が意見の價値を判断する力の無い間は、諸君の意見を知らしてはならない。人の心には各々其の特性がある。だからまづ其の特性を觀破しなければならぬ。即ち人を教育するには、必ずその特性に従はなければならぬからである。さて其の特性を知るには只々子供の性格の自然に萌す有様に任せて、全然自由にして置かねばならぬ。斯くして自由に放任するのは、一見、時間を徒費するやうに思はれ易いが、實はより善く時間を費すものである。幼少の時には時間など惜まずにうんと遊ばせた方が



よい。

人を陶冶しようとならば、自身から先づ人とならなければならぬ。先づ人に宣言する丈の模範を持ち人々の尊敬を受け、人々に愛せられる様になつて置けば、人は皆諸君の思つた様になるのである。此方が心を開かねば相手も亦決して心をあかすものでない。吾々の與へねばならぬものは金ではなくして親切であり愛情である。否寧ろ吾等自身である。これ即私がエミールを田舎で教育する理由である。田舎には子供を惑はし、子供に害毒を與ふる虚飾がない。田舎では思ふ存分に兒童を動かす事が出来る。且つ赤裸々な農民の話や模範は、都で得られない權威を持つてゐる。若し田舎で悪業の矯正が出来なかつたとしても、誘惑か無いだけでも結構である。

僕はどんな生徒を預かつても實際的の教授をするであらう。物知をつくるよりも善人をつくるであらう。僕は誠を云へと生徒に迫らない。迫ると隠すおそれがあるからである。又實行の出来ない約束はしない。若し、私の留守中に何か失策でもあ

つてそれは誰のした事とも分らない時にも、エミールを責めたり、「お前が爲たんぢやないか」と云はない。斯う云へばエミールは否と云ふに定つてゐる。エミールが自分からは非或る約束をしようとする時は、其の申出を此方から出さないでエミールに出させる。するとエミールは其の約束を果した時には、一層の興味を感じ、其を破約した時には悪結果の身に及ぶを知るであらう。併しかうまでしなくとも。エミールはもつと大きくなるまでは詐の何物なるかを知らない。私がエミールを人の意志判断に頼らせない様にすればする程、彼は詐をいふ事が面白くない。

とかく利口な子供は馬鹿の様に見える。けれども子供の時の眞の馬鹿者と馬鹿の様に見えるて、實は確かりした人物との區別は仲々六ヶしい、不思議にも馬鹿と天才は初めは似てゐる様に見える。然し馬鹿者は妄想の起るに任せ、天才は何か眞の觀念を得る迄は考へず、又雜念妄想を起さない、馬鹿は何も出来ないから何も仕ないのであつて、天才は何もする事が無いから仕ないのである。どつちも馬鹿にし



か見えませんが、之を見わけるのは機會である。天才は機會さへあると何かハット思ひつくけれ共、馬鹿は何に遭つても呆然として居る。

だから子供を尊敬して、決して輕卒に善惡の評を下してはならない。子供を矯正しようとするには、先づ／＼氣永く辛棒して、その性癖を充分よく明らかでなければならぬ。プラトウの『國家』は餘り極端かも知れないが『子供は只祭日、遊戯、唱歌娛樂の間に教育せよ』と云つてゐるのは同感する。子供を眞に喜ばせる事が出来ればもう何も彼も立派に成功したものと云つてもよい。

子供は判断する力がないから眞の記憶力も無い。小兒は音や形を感じる事が出来るけれども觀念を得る事は無い。まして觀念連合は猶更の事である。それは子供の知識は感覺的であつて、決して深く理性に這入つたものでは無い。又記憶でも完全なものでは無い。然し私は子供が何處種類の推理もする事が出来ないと云ふのではない。子供はよく知つてゐる事、目前の興味ある事に關しては、よく判断する。け

れ共欺れ易いのは彼等の知識に關する事である。吾等は子供が持ちもしない知識を持つてゐると思つたり、子供に解りもしない事を考へさせたりする弊がある。「一體語學は教育に無用なものだ」といつたら吃驚する者があるかも知れない、併し此れは初學者に就て云ふのだから怪しからぬ事は無い。神童で無い以上は、十二歳乃至十五歳の子供が二ヶ國の言葉と通じよう筈がない。

若し言語學が言葉の研究即ち、發表する音の研究であつたら、子供にも亦やらしてよいであらう。けれども言葉は其の表徴の異なるに連れて、現はす處の觀念も違つてゐる。どんな學問でも云ひ表はした符合が、思想と一致してゐなければ駄目である。然るに子供は斯かる符合を教はつても、其の符合の下にある事物に就ては理解する事が出来ない。吾々が子供に地球を教へてゐる積でも實際は地圖を教へてゐる計である。吾等は都會や國々や河流の名を教へてゐる積であるが、子供は只紙の上

に書いたものだと思はない。



もつと不適當な事がある。其は歴史を學ばせられる事である。一體歴史といふものは單に事實の集合に過ぎないから、子供にも解るものだと考へ易い。けれ共人々は此の事實といふ言葉を何う解してゐるだらう。歴史上の事實を定むる處の關係はさう容易なものでは無い。又子供の頭ではそんなにたやすく歴史的關係を考へる事は出来ない。然るに事物の原因結果をはなれぐににしては、事物の眞相は解らない歴史上の事件は道德上の問題を等閑に附しては知らるべきものではない。又道德上の問題も歴史上の事件を等閑にしては分らないものである。諸君が人類の行動を研究するにも、只外部的、純形而下の運動ばかり覗いただけでは、歴史上何の得る處があらう。斯ういふ研究には何の興味も益もない。人の行爲を道德的關係で量つて見ようとするならば、是等の關係を生徒に知らせなければならぬ。さうすれば、子供に歴史を教へて善いか悪いかが分つて來ようと思ふ。子供に只帝王や、帝國や、戦争や征服や、革命や、法律等を口誦させるのは容易であるが、それに伴ふ觀念を

伴はせるのはどんなに六ヶしい事であらう。

若し自然が、子供の脳髓に一切の印象を受け入れる丈の可能性を與へて居たとしても、其は、帝王、年代、絞章學、星學、地理等、子供にとつては無意義、不利益なもの計をつめ込んで幼い心を苦しめて、その精力を失はせる爲では無い。子供の柔い心で理解する事が出來、且つ有益で、幸福の基となり、他日義務の觀念を喚起するだけの思想を刻みつけてやらねばならぬ。さうすれば彼は生涯、自分の身分才能に應じて身を處してゆく事が出来るのである。

エミールには何も誦誦させない。昔噺でも無技巧な面白いラ、フオンテエンの物語でも教へない。訓戒的の寓話は面白いには面白いけれど有害である。子供は寓話を聞いてもその眞理を捉へようとはもせず、面白く話せば話す程その眞理は解らなくなつてくる。子供は寓話を曉れはしない。兎に角私は凡てに偏見の多い學校教育から子供を救ひ出したい。又子供を不幸に陥らせる書物を焼き棄て、仕舞ひたい。



エミールは十二歳になつたけれども未だ書物の何たるかを知らない。讀むだけなりと教へて置くがよいと云ふ人があるかも知れないが、私はその必要を感じない。丁度其の年頃になるまで、讀書は子供の心を毒する。それから讀方教授法に就いては今まで種々の議論があつた。けれど何よりも確實な教授法があるのに其れに氣の附く人はない。其は即ち學ばうと思ふ慾望を起させる事である。興味こそ大なる動機であつて、確實に大きな結果を來すものである。吾がエミールは十歳になる迄には立派に讀み書きを覺えるに相違ない。けれ共私は十五歳になるまでは是等のものを強いて教へようとはしない。自然な有益なものを失つて淺慕な智識を得させるよりは寧ろ全く知らせない方がよいからである。

僕の生徒と云ふよりは寧ろ、自然兒のエミールには出来る限り早く自分の事は自分にやらせる様にする。他人に頼る習慣を付けさせない。直接自分に關係のある事なら、どこまでも自分で判斷させ、又先見させ考へさせる様にする。エミールは喋々

と饒舌しやべらないで實行する。彼は世間に何麼事が起つてもそんな事には少しも頓着せず只自分のしなくてはならぬと思ふ事ばかりをする。エミールは自然から學んで人から學ばない。體格と智慧とは兩立しない様に世間の人は思つて居るが、エミールは優等な智力と強健な體力を合せ持つてゐる。英雄豪傑と云はれる人はいつも此の二者を供へてゐるものである。

自然的教育を受けてゐると、身體は益々丈夫になり、心は愈々確かになり、又年相應に理性が發達して一生涯の大幸福を得る事が出来る。自然的教育は吾等に力の正しい用る方を教へ、身體と四圍の事物との正しい關係を教へ、且力の許す限す、體機の許す限り自然的の器を用ゐる事を教へて呉れる。斯くして學生は教場で學ぶよりは、學園で實際に學んだ方が一百倍の益がある。

人間最初の研究は自己保存の爲の實驗物理學と云つてもよい。何故と云ふに、人間最初の自然的運動は四圍の物で、自分を測り、知覺する所の物で自分の知覺性を



認むるからである。吾々の幼時に於ける哲學の先生は吾々自身の手であり、又足であり、目である。是等のものに代ふるに書籍を以つてするのは、人の理性を盗用する事を教ふるのである。

ずん／＼太つてゆく子供に著せる着物は手足をゆるやかにしてやらねばならない。又あまり頭巾を被ぶせないのがよい。けれ共髪を綺麗に整へる爲には寐る時ばかり頭巾を被ぶせてもよい。子供が段々成長してゆけば、其の筋肉繃維しゆみも亦強さを増してゆく。それにつれて少しづつ日光に抵抗する力を養つてゆくのがよい。段々と其の度を進めて、遂には熱帯の炎熱にもよく堪へ得る様にしてやらねばならない。又、子供は身體の活動が甚だしいだけに適當する睡眠をしなければならぬ。運動と睡眠とは共に助け合ふものである。自然の定める如く夜は休息の時である。人は太陽と共に寐起するのが、最も健康に適した習慣である。小さい時から、餘りよくない寢床にも慣れる必要がある。左様すればどんな寢床に寢ても氣持の悪い事が

ない様になる。枕をするが早いかグウ／＼寢込んで仕舞ふ人に取つては寢床が堅いといふ事は無い。

私は時々エミールをゆり起す。それは永く寢過ぎるのを怖れるからではなく、何事にも慣れさせる爲である。吾々は子供が水泳を習ふのを見て溺れはすまいかと云ふ怖れを抱く。併し習つて溺れるものも、習はないで溺れるのも全く一の失策である。運動は危険を冒す事ではない。然し子供は危険に遭遇してもビクともしない様に慣なして置かねはならない。且、子供には子供相應な危険を冒させる様にして置くなと、他日危険に遭遇しても、之を防禦する事が出来る様になり、爲に吾々は責任のある子供の保護を全うする事が出来る。子供には、夜中、様々な遊戯をさせるがよい。是は思つたよりは大切である。子供の心は夜になると自おのづと怖くなつて、理性も智慧も才能も勇氣も仲々、役に立たない。元來恐怖は其の原因が明らかになると治るものである。何事でも慣れると想像は無くなる。想像力を刺戟するのは只新し



いものばかりである。だから暗闇を怖れる者を治してやるには、何も理窟を云はないで屢々暗黒な所へ連れて行くのがよい。這麼實行は、ありとあらゆる哲學の議論を聞くより何程よいか分らない。

人は不時の災難に對していつも準備して居なければならぬ。エミールは氣候の如何を問はず毎朝裸足で庭園を駆け廻るのがよい。子供には幅飛をさせる。高飛もさせる。木にも登らせる。垣も飛び越えさせる。然しエミールには決して舞踊はやらせない。私はエミールをオペラの役者にするよりは、鹿狩の仲間になりたいと思つてゐる。

さて今までエミールは室の裝飾をしなかつたが、もう之からは欲しいものは皆備へてやる。先づエミールが自分で描いた繪を額に入れて順序正しく掲げて置く。すると『成程是れが初て描いた繪である』と思つて見る度に喜ぶ。私は其れ等の繪の内が一番初めに描いた拙ないのを一番綺麗な金縁の額に入れてやつて、模倣が段々う

まくなり畫法が益々上手になるに連れて、單純な墨塗の額位なものに入れてやる。其といふのは立派な畫は、畫其のものが一つの飾だから餘り立派な額に飾めると反つて其れに注意を奪はれるからである。

子供には幾何學は解らない。然し、之は大人の學ぶ様な幾何學が子供に解らないのであつて、子供相應の力でやらせるとそれ程解らない事は無い。即ち推理的な教へ方をせず、幾つかの正確な形を描いて之を結合し、之を重ね、そして其の間の關係を驗べさせる様になると、一の觀察から、他の觀察へと進んで、遂には初等幾何學の全部が解つてくる。何も別に定義や、問題や、證明の必要はない。私はエミールに幾何學は教へないが、只發見する事が出来る様に、其の間の關係を尋ねるのである。

羽根遊びは、眼と腕とを正確にし、獨樂遊びは腕力を養ふから結構な遊戲である。勿論子供は大人の上着を著る程の身體しか持たぬから、三尺高さのテーブルで大人



と一様に玉突棒を弄ぶ事は出来ない。然し子供相應に大人の遊戯もやらせた方がよい。羽根は女の遊戯である。一體女は餘り手荒い遊戯をして白い皮膚を打ち固めてはならぬ。けれども男子は危険を怖れないで強健に身體を鍊へ上げなくてはならぬ。攻められる事がなければ防禦力を養ふ事は出来ない。飛んで来る玉の速力を見て取つた手で見事に投げ返す様な遊戯は、子供を練る爲のもので、大人の遊戯ではない。何事でも子供の時にやらして置くときよく出来る様になる。子供が大人にも劣らない程巧みに機敏に四肢を働かすのは、よく人の見る處である。だから大人の遊戯をする程の手際を持たぬと云はれない。子供に若し或る遊戯が出来ないとならば其は練習しないからである。

人には三種の聲がある。第一には談話の聲、即ち發音の明瞭な聲、第二には歌ふ聲、即ち音調の聲、第三には感動的又は張り上げた聲である。子供は此の三種の聲を持つてゐるが、其の結合の仕方を知らない。而して完全な音樂とは是等三種の聲

の最もよく統一したものであるから、子供にはその聲が出ない、従つて其の歌には魂が籠らない。又其の話し聲はアクセントを持たぬ。唯大きな聲は出るが變調が出ない。特にエミールの言葉使は單調單純である。これはエミールに未だ熱情がないからである。

貪食は無爲な人間の惡癖である。無爲な人間の魂はいつも食ふ事ばかりを思つてゐる。斯る人間は只食ふ爲めに生きてゐるばかり、其の頭は魯鈍で、何一つろくに出来ない。然し「貪食は人の本性で、才能ある子供にも根ざしてゐる」と云ふ人があるがそれは間違てゐる。元より子供の時は食ふより外に考は無いが、男だと十四歳、女だと十二歳位になると、最早食ふ事ばかりは思はない。何を食べても旨くなり、今迄欲しいと思はなかつたものでも欲しくなる。然し子供が食ひ過ぎる様な事でもあつたら(私の教育法でやれば食ひ過ぎる事は無いけれども)面白い遊戯をさせて、食事を忘れさせ、活動させて、グツタリと疲れさせるがよい。是程たやすい。是程



有益な事はない。又、或る人は『子供は食ふ事まで忘れて課業をするものではない』といふ。其も尤<sup>もつとも</sup>だけれども、私の云ふ處は、そんな種類の課業ではない。私の考へてゐるのは自然法であつて、此の自然法に誤りは無い。

元來、人の心はただ物を見たばかりでは興奮しない。實物を美化する力は一に想像である。若し想像の力が吾々の見るものに一種何とも云へぬ情を惹き起させない場合には、吾々の受くる快樂は只感覺の機能内に限られて、却つて心は冷かである。成熱した人よりは、愛らしい子供に何とも云へぬ方のあるのは、之と同じ理由である。人の最も愉快とするは何處時であるかと云ふに、『お互に昔はあんな事をした』とか『ほんとに、昔はあんな事をして面白かつた』とか云ふ様な幼時の追懐である。即ち目で實際見て、若かつた頃を思ひ出す事である。老いぼれた人や、死にかけた人の姿を見ては、誰も愉快を感じない。けれども十歳から十二歳位までの丈夫な元氣のよい年に釣り合ふ立派な體格をした子を見ると、思はず愉快な觀念を振り起さ

せる。彼には何の心細い考も無く、又何の取越苦勞も無い。有り餘つて溢るゝばかりの生命を楽しんで、あくまでも元氣がよい。快活である。生氣が潑刺としてゐるけれ共、時は移り、人は變る。間もなく少年の眼は霞<sup>か</sup>んで、其の快樂は止まるであらう。喜悅にも別れ勇ましい遊戲にも別るであらう。やがては嚴格な六ヶしやの大人が容赦もなく其の手を握つて、『此方<sup>こち</sup>へ來い！』と云つて何處へか連れて行く、見れば其の連れられて這入る室には書物がある。書物よ！汝は子供にとつては不愉快千萬である。

斯くして世間の多くの子供は不快な淵に陥つてゆくのであるが、エミールは決して左様では無い。エミールは恐怖<sup>おそれ</sup>を知らぬ子供である。又悲と不安を知らぬ子供である。私の幸福な愛らしいエミール。『エミール茲へ來い』と呼ぶと、エミールは直ぐ嬉しげに飛んで來る。エミールは友達と仲よく遊ぶ。エミールは私に會ふと、喜んで共に永く遊びたがる。何時も二人は一致してゐるので、一緒に居る程嬉しい事



は無いのだ。

斯うして、エミールの體格や、舉動や、容貌はいつも満足と安心とを語つてゐる。其美しい健康の輝き満面に溢れてゐる。彼の一步一步はドツシリして、強い威風を示してゐると共に優しいけれども蒼く無い顔には、少しも虚弱の影を見せてゐない。快い大氣と太陽とは男らしい彼の風采を造り、未だ、まんまるとした其の姿は、彼自身の發達してゆく品性の證據を現はしてゐる。而して未だ青春の熱情に燃え無い晴れやかな眼は、生れながらの涼味を湛へ、永久の悲哀にも霞まず、限りの無い涙も其の頬を荒さない。其の機敏な確實な運動からは、年に相應しい活力が見え。強い獨立不羈の精神が認められる。且様々な運動から得來つた經驗が見える。彼の舉動は爽かで自由だけれど、決して横柄でなく、徒でもない。其の頭はまだ俯向いて本を見た事が無いから胸にうなだれ下る事もない。又彼は耻や恐怖の爲にうなだれた事もない。

又、まだエミールは慣例、故實を知らない。彼は昨日迄更に口にも出さなかつた事を、今日は實行する。彼は形式にも權威にも模範にも従はず。自分の好きな事であれば語りもせず。行ひもしない。且、エミールには自分に屬するものは自分のものだと思ひ、自分に屬しないものは吾がものではないと思つて居るが、其れ以上の事は分らない。それでエミールには、義務も服従も何の事か分らない。其でエミールには『是をせよ』といふ様に命令しては駄目である。それよりも『是をして下さい。私も亦してあげるから』と云ふ。すると子供は直ぐ喜んで求めに應ずる。又、エミールは助力を要する時には、憚らずにさう訴へる。丁度、下男にでも云ひつける様に帝王にも相談する。エミールの目には下男も帝王も平等だからである。エミールの表情は單純素朴である。其の聲にも其の風采にも、其の舉動にも、懇願する時と拒絶する時とに關せず。奴隸の様にへつらはず、又主人の様に願使もしない。エミールを全然自由に放任して、其のする處を見てゐると、彼は何事でも考へず



には爲<sup>し</sup>てゐない。又身分以上の力を見せかける様な事もしない。彼は自分のした事は自ら責任を負つてゐる。彼は機敏であり又快活である。且、其の舉動は年相應な活力を有してゐる。殊にエミールは、不時の困難に出會しても怖れとせず、危急存亡な事があつてもビクともしない。エミールは屢々必然の壓力を感じた。だから必然の力に慣れてゐる。何事が起つて來ようとも彼は平氣である。

仕事をするにも遊ぶにもエミールは何時も満足してゐる。遊戯も彼に取つては愉快なる仕事である。彼は何をやつても面白がる。やればやる程愉快を感じ自由を感じずる。そこで追々とエミールの心の傾向や知識の系統の現はれて來るのが見える。輝きのある楽しいけな眼で、悦ばしけな美しい顔色をして、無邪氣にニコ／＼と遊戯でもする様に仕事をしたり、一寸した事にも幸福を感じてゐるエミールを見るのは如何にも氣持がよい。

かくしてエミールは幼年期の終に達した。子供としての生活は年相應な理性を得

出來得る限り幸福であり、自由であつた。若し禍の鎌が、エミールの上に落ちかゝり、その頼母しい希望の花を切り落しても吾々は更に其の死を嘆かず、又あんな事をしたから、這麼事になつたのではないかと云つて嘆き悲しむにも及ばない。少くとも彼は少年期を楽しんだのである。吾等は自然が彼に興へたものを一つとして失はせなかつた。たとへエミールが死んだとしても嘆くには及ばない。

偕、今迄述べ來つた初期の教育の功果も餘程眼識の明かな人でなければ認める事が出來ない。大なる心づくしの下に教育せられたエミールも俗人の眼には却つて無頼漢のやうに見えるかも知れない。然し普通一般の教師は常に己の利益に走つて生徒の爲を思はない。彼等は其の時間を空費しない事や、自分が俸給を受くるに足るべき者である事のみを示さうとする。従つて教師は目に付き易い智識や發表し易いものを子供に授ける。學ぶ事が實際有益だらうと無益だらうと、そんな事には頓着しないのだ。試験の時には子供が持つてゐるものを見せさへすれば教師はそれで満



足する。だから子供は試験が終へると、其の持ちものを元に收つて、また以前の途を歩く計である。エミールは、其そんに知識を持たない。エミールは唯自分の力より外には何も人に見せるものがない。然し一時一分の間にその價値の分るものではない。まして況や、子供である。どうして一見したばかりで其の特性を見定むる事が出来よう。

餘り多くの事を教へられたり尋ねられたりすると懶ものろしくなるのは人の常である。子供は猶更のことである。子供の注意力は數分を経れば疲れる。さうなると執つこい質問はもう耳には入らないで唯返事するだけでも物うくなる。這麼風に子供を教育して果して何の益にならう。

### 第三編 十二歳から十五歳まで

(智的教育の時代)

青年になるまでの間は、専ら弱い時代であるけれども、體力の増進につれて、漸く需要の増進を來し、絶對的には猶甚だ弱いのではあるが、比較的にも強いものとなる。其の凡ての要求はさほど發達しないであるが、活動力は有り餘つて來る。少年期の第三期に於ける子供は此の意味に於て甚だ強い人である。而して斯かる時期は人の一生中の最も貴重な時であつて、二度とは還つて來ない。その上この時期は頗る短いから、之を善用する事が必要である。然らば其の有り餘つてゐる勢力能力を何う用ふれば善いかといふに、好機會を俟まつて、自分の爲に使ふ事の出來る様に貯へて置くやうにさせる。即強い子供は、體力の衰へる大人になつた時の準備に其の力を貯へて置くのである。だから此の時期は労働、教授、勉強の時である。斯かく



ふ私の獨斷ではなく自然の示す所である。

人の智力には限りがある。人の總ての事を知る事が出来ないばかりか僅かばかり他人の知つてゐる事さへ己の物とする事が出来ない。眞理は間違つた考の反對である。眞理の數は頗る多いが、誤謬ごびやうの數も亦頗る多い。だから教授の材料となる事物と、それを學ぶ時とをよく擇ばなくてはならない。けれども子供を賢明にする爲に吾々の要する智識はたゞ必要なもの丈を知つて居ればよいのである。

吾々の知識は、宇宙に存在する事物に對してこそ僅であるが、子供の心意に取つては猶其の範圍は廣大なものである。然るに人間の知性を曇らすものは虚偽な學問である。虚偽な學問は少年の邊そばに怖い淵ふちをつくる。力強い引力を有する誤謬と人を中毒する高慢の誘惑とに注意しなければいけない。『無知は斷じて惡を産まない、危険な罪惡を産むは只誤謬の觀念である』吾等みちが途を誤るのは知らないからでなく知つてゐると誤解するからである。

同一の本能は様々な機官を刺激する。身體の活動に次いで教へられようとする心の活動が起きて来る。躁さわがしかつた子供はだん／＼と好奇心を生じ、其の好奇心はよく導くと此の年頃のよい動機力となる。人には幸福を求める固有の欲望がある。然し此の欲望は到底十分に満す事が出来ないで人は益々それを求めんとする心を振り起させられる之が好奇心の第一の原則である。而して此の好奇心は熱情や、知力の發達に伴つて發達するものである。だから吾々は如何なる場合にも興味を持たない知識を人に授けないで、本能の導くがまゝにやつてゆくのがよいと思ふ。

地球は人類の孤島である。而して吾等の目に最も強く觸るゝ最大力ちからは太陽である。此の二つは人が眼を外へ向けようとする時になると、まづ何よりも最初の目的物となる。以前までは手に觸るゝもの、身の周圍にあるものばかりを相手にして居たのが、今や地球を測り、宇宙の果まで飛んで行かうとするやうになる。此の急激な變動は體力の發達と、心意の新傾向との結果である。けれ共觀念の世界は未だ此の年



頃の子供にはないから、其の思想は目の及ぶ範囲に限られ其の理解力は、悟性を働かすれば働かす程擴がつて行く。感覺したものは觀念となるか一足飛びに感覺から知識に移るものではない。充つ感覺して遂に知識が出来るのである。心意の凡ての働きの起りは感覺である。世界より外に書物なく、事實より外に教材は無い。諸君は子供に地理を教へるのに、地球儀、天文圖、地圖を用ゐるが、其麼機械的な事をしないで、何故初めから實物に依らないのであるか。實物を示してこそ、兎も角も理解する事が出来るのである。

理解の出来ない事を子供に話し聞かしてはならぬ。記述や能辯術や話し方や詩歌を子供に教へてはならぬ。未が感覺と趣味を養ふ時では無いからである。複雑な情緒的な時は間もなく招かずともやつて來るのである。

エミールは私の原則を精神として、自分の事は自分でやる様にし、又自分の力の及ばない時しか他人の助力を仰がない事に慣れて來たから、新しい物が見つかった

ら、何とも云はないで黙つて永い間見て居る。彼は思慮が深い。けれ共質問を出さない。そこで其の好奇心がいよく、昂つた時、一寸簡單なる明かな問を出して、直ぐ其の解決のつく様にしてやるのである。

科學は分解放で教へるのがよいか、總合法で教へるのがよいかと云ふ事は多少の議論があつたが、必ずしも其の何れに従へといふ必要はない。兩法を同時に應用してゐると、互に助けとなつて、明瞭に意味が分る。例へば地理學の研究をするには此の二箇の方法を用ゐる、子供の住んで居る場所から出發して、各部分の研究をすると共に、地球の圓形な事を知らせる事もある。又子供が天體を研究しながら、丁度天體にでも登つた心持のして居る時、再び彼を地上に呼び戻して、注意を地上の部分々々に向けさせ、先づ彼が住んで居る所を知らせるのである子供が地理を學ぶに當つて、第一に見定めねばならぬ二箇の出發點は、自分の住んで居る町と、父の住んで居る村里である。次には其の兩處間の村々を知らしめ、其の地方の河流を知ら



せ、最後に太陽の研究をさせるのである。更に之を連絡させるには、子供に地圖を造らせるがよい。地圖と云つても至極簡單なもので、初めは只二箇の點から成立するもので、段々と見確めたのを書き加へて、其の間の距離や位置を都合よく見計らはせるのである。

さて、幼時期は時日が永かつたが、此の時期は何も大切な事はしないうちに早く過ぎ去つて了ふ。其の上此の時期になると情癖が起り易い。で、さうなると子供はもう何ものにも注意を向けなくなる。子供を學者にしようとする教育をしてはならない。此の時期は子供に學問の趣味や學問の仕方を教へ、善良な教育の根本的原则を授け、同一物に長時間の注意を拂ふ習慣を少しづつ養ふべき時である。然し強いて注意させてはいけない。其の注意は喜と樂より自ら望んでするのでなければならぬ。此の注意が子供の爲に重荷とならず又うるさきものとならぬやうにし、絶えず其の眼を鋭くさせるのがよい。退屈な思をさせて注意させても何の利益にもなら

ない。若し子供がうるささうであつたら止めさせねばならぬ。自分の意志にさからつてやつた處で何の益にならう。

子供が問を發したら益々好奇心を勵ますやうな答をして、其の心を満たしてはいけない。殊に子供が教へられようと思ふ心なく只徒に由なき問を發して諸君を煩す時はすぐに口を噤んで止めねばならない。子供の語る言葉にはさう注意しなくても語らうとする動機にはよく注意しなければならない。今迄はかう云ふ注意はそれ程必要ではなかつたが、子供が自分で判断を始める様になるに連れて肝腎な事となつてくる。

一般の心理には一つの連鎖がある。其の連鎖で、凡ての科學に共通の原則といふものが出來、理論整然として研究が出来る。然し斯かる連鎖は哲學者の用ゐる處であつて、其の他に或る一個のものが、他のものを引き出し、其れから復其の次のが出て來るといふ一の原則がある。此の第二の原則は目的物に對する注意を斷えざる



好奇心により續かせる連鎖であつて、子供には特に有益なる方法である。

エミールと私とは長い間の観察で、琥珀や硝子や封蠟や、其の他様々の物體は摩擦せられると吸引する事を知つたが、又吾々は更に強い引力のあるものを發見した。其のものは摩擦されなくても若干の距離に於て鐵粉や鐵片を吸引した、それは磁石である。一日二人は市まちに行つて、手品師が水鉢に浮んでゐる蠟製の家鴨あひるを麵包の切れで引寄せのを見た。エミールは之が手品師の仕業だとは少しも知らないで酷く驚いてゐた。エミールは其の原因の知れないのを頻りに不思議がつてゐたが私は急いでその判断を下さうとはせず然るべき折の來るまで靜に知らぬまゝにしてゐた。それから歸宅してからも市で見た家鴨に就いて話をしてゐたが遂にそれを模倣しようといふ事になつた。そこで一本の磁石力の強い針を取り出して、白蠟はくろうを塗り着け家鴨の様な形を作つて針の先を嘴にした。此の家鴨を水の上に置いて鍵を其の嘴に近づけた時、丁度市の手品師がバンでした様に寄つて來た。其の日の午後二人は用

意の麵包をポケットに入れて町へ行つた。而して手品師が手品を終へると吾が小博士エミールは堪りかねたやうに、其の位の事なら僕にだつて出来る、一つやつて見せようと言つた。それではと手品師は承諾したので、エミールは鐵片を包んだ麵包を出して、家鴨に出した時、家鴨はすつと此方へ寄つた。すると子供は嬉しさのあまり、且叫び且躍おどつた。手品師は暫時まごついたがエミールを抱き且祝して、明日も亦來て下さい。もつと多くの人を集めて置きますからどうぞ一つしつかりやつて見せて下さいと言つた。斯くして吾が小哲人せうてつじんエミールは面目を施して得たり顔にしてゐるのを私はすぐ連れて歸つた。

エミールは可笑しな程心が落ち附かないで翌朝まで時間を指折り數へた。漸く其の時が來て、會場へ駈け附けたが、もう人は堵かたの如く集つてゐた。ところが今日は他の手品が色々演じられて、手品師の手ぎわの巧い事は驚く許である。けれどもエミールは少しもそれを見ず其の心は暫くも靜まらず汗が流れ息せわしくいら



してゐた。漸つとの事で自分の順番になるとエミールは群衆の前に現はれて紹介された。エミールは前に進み出てポケットの中からバン布を取り出した。處が定めなきは世の態である。昨日の馴れた家鴨は今日尾を向けて逃けて了つた。幾度バンを差し出しても逃げて行くので遂に子供は僕は欺されたのだ。之れは昨日の家鴨では無い。お前が一つ試つて見せて呉れとつぶやいた。そこで手品師がバン片を差し出して招くと、家鴨はすぐ寄つて来て自由自在にその跡を慕つた。エミールも亦同じバンを取つてやつて見たがどうしても巧く行かない。却つて彼を愚弄する様であつた。すると手品師は室の真ん中に立退いて得意氣な調子で『今度は手では無く、聲で自由自在に家鴨を動かして見せます』と公衆に廣告した。成程右に行けと云へば右に行き、歸れと云へば歸り、來いと云へば來る、廻れと云へば廻り命令通りに行はれ以前にも倍した喝采が起つてエミールの前には騒がしく人々が立塞つた。でエミールは散々な爲體で逃げて歸らねばならなかつた。

明くる朝手品師が吾々を訪ねて來た。手品師は謙遜な態度で愁訴した。成程彼が訴へるのも其筈である。何の恨も無いのに、私共があんな事をして手品師の信用を落させたり、其生計の途を斷たうとしたのは悪かつた。手品師は愁訴の後に『私は又御覽に入れました外にも、無頓着な子供に立會ふ術を心得て居ります。で、私は昨日お困らせ申したあの秘密を喜んでお知らせに参りました。何うか今後はこんな哀れな商賣をする私の妨にお用る下さらないで一際お慎しみ下さいませ』と云つてその器械を見せた。驚くまい事か、其は只一つの強い磁石であつて其を子供がテールの下に隠れて動かしてゐたのである。手品師の歸りに臨んで私共は感謝したり詫を云つたりして金を與へようとしたけれども、彼は『手品の代なら戴きますが、教授の代は戴きません』と斷つた。

斯う云ふ實例は存外効驗のあるものである。此の一例の中に多くの教訓が見出される。虚榮心の働きは多くの恥辱となつた。斯かる恥辱と不愉快の情を受けた以上



は、子供は再び這麼事を繰り返すものではない。併し這麼恥をかゝせるのも一つの準備であつて、これに依つて子午線の代りに磁石器を造らんが爲である。磁石は他の物體に距てられても猶働きのある事を知つたから、囊に見た器械に似たやうなものを造つて見やう。即ちテーブルの中に窪みを作つて浅い鉢を箆め、適當の水を入れ、以前の家鴨よりか、もう少し念を入れて造つたものを浮ばせる。斯くしてよく観察すると、家鴨はいつも同じ方面に向いて、而も南北を指してゐる。此丈の觀察が出来ればもう磁石は發見されたのである。而して物理学を學ぶべき時も來た。

地球は所によりて氣候を異にし、氣候によりて溫度を異にする。四季の状態は極地へ進めば進む程變化し、總てのものは寒さには收縮暑さには膨脹する。此の變化は液體に於て著るしく殊に酒精に於て著しい。此等の現象に基づいて驗温器が造られる。

風は顔に觸れるので空氣は物體であり、流動體であることが分る。水の中へコッ

プを突き込むと其の中の空氣は遁るゝ道が無いから、水はコップの中に入らない。だから空氣には抵抗力のある事も分る。然し段々と深くコップを差し込むと水は少しづゝ上に上る。すると空氣は或る程度まで押し縮められる事が分る。押し縮めた空氣を充したボールは、普通の空氣が充したボールより一層強い弾力を持つてゐる。其處で空氣には弾力のある事も分る。入浴した時、湯の水平面から腕を上げると重たさを感じず。そこで空氣には重さのあることが分る。空氣の他の流動體と平均させるとその重さが量られる。この原理によつて晴雨計、曲注管、空氣銃、空氣ポンプは造られるのである。斯うして静力学と静水學の一切の法則は、日常の經驗で見出される。であるから事々しい物理實驗室は要しない。學問を殺すものは學問上の飾付である。此等の器械は子供を駭かし、又其の注意を散漫にする。

凡ての器械は自分で造るがよい。實驗しない先に造つてはならない。實驗をやつて、子供が理解してから少しづゝ製作した方がよい。其の器械は完全でなく正確で



なくとも、どんなものかといふことが明瞭に分ればよい。

吾々が事物を明に且正しく理解するには、それを人に教へられるよりも自分で學ぶ方が遙に有効で、一層多く事物の關係を發見したり、器械を工夫する事が上手になる。若し教へられた儘を覺える習慣をつけると、吾々の心は同じ事ばかりしか出來なくなる。例へば科學の研究をするにも、色々な巧い簡便法はあるが、それよりも隙を掛けて骨折つて覺える事にする方法が大切である。私の主張する骨折の多い遅い方法で研究して居ると、よく身體を動かし、手足を自由自在に使ひ廻し、且つ勞働や有益な仕事に堪へ得る様になる。

純粹な理論的の知識が子供には分らないといふ事は既に述べた。けれ共、組織的に深入りはさせずとも、多くの經驗を結合する様なやり方はさせなければならぬ。さうすれば多くの經驗が其の心に秩序正しく排列して必要に應じて思ひ浮べる事が出来る。事物や理論ははなれぐになつてゐると容易に記憶し難いものである。

子供の心が發達するに従つて、新しく仕事を選んでやる事に注意しなければならぬ。子供が自分の幸福を判斷し、最大利益と最大損害との關係を理解する様になると、遊戯と仕事との差別を知り、遊戯は仕事の疲れを休める事だと思ふ様になる。すると其の眞面目な研究の中に實益ある事物を取り入れ、絶え間なく勉學する様になる。その必然の法則は、將來の大不幸大災難を防ぐには、今日の前にある不快な事でもやつて見せると云ふ事を子供に教へてくれる。實際斯ういふ風の見聞に慣れてくると、凡ての人智を得る事も出來れば不幸を逃るゝ事も出来る。

子供が自分の需要の先見が出来る様になると其の智力はずつと進んだもので時間の價值が解るやうになる。時間の價值が解つたら有益な仕事をする習慣を養つてやらなければならない。

原因結果の關係はあつても之を知らず、善惡の區別はあつても其の觀念が無く要求はあつても其を未だ經驗した事が無ければ、其等のものは吾々にとつては無であ



る。吾々は觀念や經驗のない事に興味を感じずるものでない。人は十五歳で賢者の幸福を知り、三十歳で樂園らくみんの光榮を知る事が出来る。けれども之に就て明らかな觀念が無かつたら之を得ようといふ考は起らない。たとへ其の觀念があつても其を要求せず又有益だと思はなければ何の甲斐もない。吾々をして實行せしむるものは只熱情ばかりである。けれども興味のないものに熱情は起らない。

私は書籍を嫌きらふ。昔ヘルメスは其發明した科學くわがくの原理を水難に會はせまいと思ふ處から圓柱に彫きざみ附けたといふ事である。若し彼が人々の腦髓なうずゐに其を彫きざみつけたらば今猶存したに相違ない。然しよく教育された頭腦は無上の記念碑であつて、それには人間の知識が永遠に彫きざみ附けられる。熱心な哲學者エミールよ。君の想像力は今や興奮こうふんして來た。そこで吾等は今や何冊かの書物を持たなければならぬ。さて茲に一冊の本がある。私は之に優る自然教育論は無いと思ふ。其れは『ロビンソン・クルソオ』である。ロビンソン・クルソオは老人が讀んでも面白い子供が讀むと猶更面

白い。ロビンソン・クルソオが島の近くで破船に遭つた處から、段々と島の生活をつゞけ遂に島へ助け船の來る迄の事は、今の年頃のエミールに取つて非常な興味と教訓とを教へる。私はロビンソン・クルソオの生活にエミールの頭を向けさせ、其の手造りの家、山羊やぎ、草木の植附等に心を寄せさせる。私はエミールに自分はロビンソン・クルソオだと思はせる。而してクルソオの失策にも注意させて之を利用させ、同じ境遇に立つても之に陥らない様にさせる。

凡ての技術の中で第一に最も尊いのは農業で、其の次は鍛冶かぢ、第三に大工である。世俗的偏見しんじゆんに浸潤しんじゆんしない子供の考も亦さうである。此の點に於てエミールは、ロビンソン・クルソオから多くの事を學ぶのである。

未だ社會の一員としての働が出来ない時から、子供の心には少しづゝ社會的關係の觀念が形成される。エミールは自分の物を得る爲には他人の役に立つ必要品を得なければならぬ。他人のおかげで自分の欲しいものが得られると云ふ事を知らぬ



ばならぬ。私は容易に斯る交換の必要であるを子供に感ぜしめ、又此の交換で幸福を來らせる事の出来る境遇きやうぐうに彼を導く事が出来る。

エミールが生活の何たるかを知るやうになつたら、私は先づ彼に生活の道を教へてやる。私は今迄地位、爵位、財産の區別を立てなかつたが今後とも立てない。何故といふに自然の要求と云ふものは誰しも同じ事事で之を満す方法も亦同じである。人の教育は人に施すもので、人でないものに施すべきものでない。もしも好運に適當した教育を施すならば、それは子供を不幸に陥らせようと努むるのである。

さて前にも述べる如く、人の生活をさゝえる職業の中、自然の状態に最も近く、境遇の如何を問はずして運命と人ともよくよく獨立したものは職工である。併し農業も亦人にとつて一番大切な仕事である。私は一度もエミールに農業を習へと云つた事はないが、エミールは百姓仕事を皆よく心得てゐる。併しながらエミールは自分勝手に自分のとるべき仕事を選ぶ。私は何をせよとは迫らない。けれども

私の望む所は詩人たらんよりは靴師くつしにならん事である。陶器とうきに繪をかくよりは、大道に砂利を敷くのである。注意すべきは實益の無い職業は高尚なものでないと云ふ事である。併し仕事の選擇をあまり重視する必要はない。吾々の必要とする處は唯手工である。エミールが手工をする時は私も一緒にする。二人で一緒にやればエミールははか／＼しく進歩する。其れから吾々は丁稚小僧ていぢこぞうにもなる。ピイター大帝は工場に在つては大工となり、兵隊に出ては太鼓たいこを打つた。此のピイター大帝の様によく働けばよい。併し吾々は單に職工の丁稚となるばかりではなく、人と成るの修業丁稚にもならなければならない。人と成るの修業丁稚は最も困難で最も永い時日を要する。だから私の考では一週に二度師匠の宅に行つて只指物を習へばよい。師匠しやうが起きる時に起き、師匠が仕事部屋に來る時に仕事に就き、師匠と共に食し、其の命令通りに働いて夕食をすますと歸宅をする。斯うしてエミールは種々な仕事を覚えて手工品を造る事が出来る。私は始終エミールに身體を働かせ、手先を働か



せながら其とはなしに、反省冥想の趣味を持たせて、無頓着に人を判断したり、熱情を冷却したりする事のない様にする。エミールは野蠻人の様に怠惰であつてはならぬ。エミールは農夫の如くに働き、哲學者の如くに考へねばならぬ。教育の秘訣は此兩者相俟ち相助ける様に心身を練習する事である。

エミールは自然の儘な純粹な物理上の智識を持つてゐる。彼は歴史上の人名を未だ知らず、形而上學や、倫理學の何たるかも知らない。彼は深く人と物との關係を知つて居るが、人と人との道德的關係に就てはちつとも知つてゐない。彼は事物其者を知らうとはせず只彼に興味を興ふるものばかりを知らうとする。彼は自分に最も有益なものを最も貴び、且其の價値を判断して他人の意見には一目も呉れない。

エミールは勤勉、節制、忍耐、強固で元氣が溢れてゐる。其の想像はバツと燃え上る事が無いから、決して危険な事はない。彼は餘り不幸とか困難とか云ふものを知らない。エミールは死の何ものであるかを明かに知らないけれども、必然の法則

にはためらはないで従ふ事に慣れて居るから死ぬ時が來たら靜に死ぬ事が出来る。自由に生活して諸々の人事を頼まぬことが死ぬべき道を教ふる最良の方法である。エミールは他人に氣兼ねしないで己れ自身を考へ、他人が己れの事をちつとも思つて居てくれなくとも自から心安しと思つてゐる。獨立獨歩してその思ふ處は只自己あるばかりである。けれども何かにつけて起り易い高慢の念は未だエミールには起らない。彼は人の平和を掻き亂す事が無くて、自然そのまゝの満足、幸福、自由の生活を續けて來た。斯の如くして十五歳になつたエミールは過去の年月を無駄に失つたものだと云はれない。



## 第四編 十五歳より二十歳まで

(道徳、宗教々育の時期)

光陰矢の如く人生は束の間である。人の生涯を六十年とすれば、最初の十五年は何の用にも立たないで過ぎ去り、最後の十五年はもう老いぼれて了ふ。誕生から臨終までの間は程遠い様であるが、つまらない事をして居る内に早暮れの鐘が鳴る。

人には二回の誕生がある。一つは此の世に現れた誕生で、一つは生活に這入る誕生である。人はいつまでも子供ではない。自然の定めた時が来ると子供の時代を後にする。其の移り代るや束の間であるが、永久に消えない影響を及ぼす。此の危機が私の云ふ第二の誕生である。男は男として女は女として、此の年頃となると始めて眞の人生に入る。斯して世間の教育は茲で終るが、私の教育は茲に初まる。

熱情は自衛自存に必須な力で、之を壊さうとするのは矛盾した事である。而して

其の熱情の源となり、其の他一切心意の動作の原因となり根底となつてゆくものは自己の愛である。此の熱情は原始的、本來的のもので、其の他一切の情は是が變態するのである。自愛は正しい心の働である。子供にとつて最初に起る感情も自愛である。其の次には自愛に根ざす處の自己の周囲の人々を愛する心である。斯くして人の研究しなければならぬ事は自分と人との關係である。幼年時代は只自分と事物との關係ばかりを研究すればよかつたが、長じて道徳的性質を感じ初める様になれば、自分と人との關係によつて自分の事を學ばなければならない。

人が伴侶を求むる様になるともう孤立の生活をするのでなくなる。其の心の状態ももう孤獨では無くなる。人との關係や、凡ての情念は婦人を懷ふ心と共に生ずる。春機發動期と性慾とは氣候に影響されると云ふが、もつと確實なのは、無學粗野な人民よりも、教育ある文明人の方がよつほど早く此の時期に達する。斯く人が異性を意識する様になるには、教育の力が與つて力ありとすれば、教育の仕方如何で時



期を早める事も遅くする事も出来る。斯う云ふ考から、私は世間から色々と議論されてゐる處の好奇心の自的を早く子供に知らせていかどうかと云ふ問題の解決を引き出す事が出来る。即ち私はさう云ふ事は必要な事でないと思ふ。好奇心と云ふものは起る様にしてやらなければ起るものではない。だから起させないがよい。答へねばならぬと云ふ程の質問でない以上は、詐の答をするよりは黙つて居た方がよいもし答へるならば躊躇しないで明瞭と、其の好奇心を刺激しない様に答へなければならぬ。

子供を無邪氣ならしめる一良法がある。其の子供を取り圍む凡ての人々が無邪氣を重んじ、無邪氣を愛する事である。何事でも其の儘に包み隠しなくいへば、子供は毫も疑の念を挾まない。造り飾りの無い觀念を卒直な言葉で云ひ表はせば危険な想像の火の手を打ち消す事が出来る。

注意して教育された青年の心中に、初めて起つて來る感情は戀愛ではなくして友

情である。初めて起る想像は青年に世にある多くの『同胞』に心附かせる。即ち異性を愛するに先ちて、人類を愛させる。そこで此の子供の心に人道の種を蒔くには自發的感性に俟たなくてはならない、従つてこの教育の功を奏するのも此の年頃でなくてはならぬ。

子供が十六歳になると、己に苦しんだ經驗があるから、苦痛の何たるかを解し得るけれ共、他人の事になると一向分らない。見ても何も感じなければ、知つたとは云はれない。併し感覺が漸く發達して、想像の火が燃える様になると、友達の愁訴にも心を動かし、その悲しみを共にし、共に苦しむやうになる。斯くして同情の念は發達するのである。是れが自然の秩序である。此の同情を喚起し之を教養し、自然の赴く處へ導き従はせやうとするならば斯かる心情の膨脹力を働かすに足るだけの目的物を示すより外はない。此の目的物は心情の力を増して、之を他に及ぼし、己の外に己を認めさせる。と同時に心情をば押縮めて、自己の事のみを思はせ、私



慾を増進させる様な目的物を遠ざけねばならない。

さて之から、又本論に立返つて云ふのであるが、青春の危機が近づいたら、其の戒となるべきものを知らしてやらねばならぬ、彼等を興奮させる様なものに近寄らせてはならぬ。出来るだけ彼等を大都會から田舎に移した方がよい、其處では單純な田舎生活が情慾の發達を遅くする。然し子供の血氣は、教育の妨とならない。却つて之に依つて完全な教育を施す事が出来る。子供の情愛、其の手綱にして諸君は子供を指揮する事が出来る。子供が他人に心を傾ける様になると他人の愛をも感ずる様になり、且は此の愛の表象に氣を附ける様になる。斯くして恩に感ずるのは自然の情である。生徒を従順ならしめるには全く彼を自由に放任して置くがよい。生徒が諸君を探し出すまで、諸君は自分を隠して置けばよい。生徒には只興味ある事ばかりを語つて置けば自づと報恩の念を高める。そして愛することの何たるかを感じざる様になると、彼は自然に自分と自分の愛する者との間に暖かな喜ばしい睦び合

のある事に心附くのである。

エミールは今迄自分の事ばかり考へて居たが、だんく〜と自分の友達の事が目について彼我相較べる様になつた。而して此の比較から來る情は己が第一位を占めんとする欲望となつて現れる。けれ共、彼の品性を形づくる熱情が仁愛慈善のものであるか、残酷兇惡なものであるか、又は暖かく憐み深いものであるかを判断しようとするにはエミールが如何なる地位を得んとし、種類の障害を冒さねばならぬかを考へてゐるか其を知る必要がある。斯うするには先づ彼に人類の通有性を示し、次の其の異點を示さなくてはならぬ。すると自然と文明との不平等が量られ、全社會秩序の様も示される。社會を研究するには人を研究しなければならぬ。人を研究するには社會を研究しなければならぬ。政治と道德とを別々に研究するものは其の何れをも解することが出来ない。此は吾々に取つて大切な研究であるが、順序正しくやる爲に、先づ人情を知らなくてはならない。而して其の人情を曉らせるには歴史を



教へるのが何よりである。歴史の研究をすれば哲學の講義などは、聞かずとも人情を讀む事が出來、利害などの頓着なしに人々を見る事が出來るやうになる。けれ共歴史の研究にも一通ならぬ危険と困難とが伴うてゐる。元來人を公平に判斷する事は六ヶしい事である。然るに歴史は善の方面よりも惡の方面を一層強く描き出すものである。歴史にとつては革命や國難は面白い材料であるけれ共、平和で靜に榮えて行く治世は何も描き出す材料が無い。即ち歴史は一國民が廢頽して行く様を表はしたもので凡ての歴史は國民が終りを告ぐる時に初まるものである。而して發達しつつある國民は到底歴史で表はす事の出來ない程幸福であり賢明である。吾々は悪い事ならばやく知るが、善い事は仲々知る事が出來ない。世に名を轟かす者は惡人で、善人は忘却されたり嘲弄されたりしてゐる。是歴史が哲學と手をとつて人類を誹謗すを所以である。猶云はねばならぬ事がある。一體歴史は人間を顯はさないで、人の行爲を顯はして居る。歴史が人を描くのは只或る特別な時と晴れやかに裝うて居

る場合ばかりである。だから歴史上の人物は、人に見られようと華美を裝うて居る公務の人ばかりで、其の人が家庭にある時、或は書齋にある時、其の家族と共にある時、友人の團體に這入つた時などに就ては、更に何もものをも述べない。だから歴史の描くところは一箇人の人物ではなくて衣裳である。人情の研究をするには先づ箇人の傳記の中に現れた人物は自分を隠す事は出來ない。如何となれば傳記々者はどこまでも描かうとする人物を鋭く觀察して書くからである。そして一番よく隠れてゐる事を、一番よく記者が書くからである。

今やエミールは世界の舞臺を初めて見んとて其の幕をひき上ぐる所である。彼は劇場の後ろに廻つて、俳優が着物を脱いだり着たりする所や、幻影で觀客を欺く綱や、絡車を數ふる所を見るのである。忽ち其の驚きは人類の爲に恥ぢ、人類の爲に賤しむ情緒となつて現れ、子供らしい遊戯に似た虚偽な人々の生活を見て悲憤する彼は自分と同じ人間が空しい影を追うて互に肉を食ひ、人たる事より寧ろ猛獸に近



附きゆく有様を見ては坐ろ悲痛を感ずるのである。

エミールは人々の間にも亦動物の間にも、紛亂争闘のある事を好まない。然るにもしエミールに争ひを挑みかけた人があつた場合、彼がどうしたらよいかと尋ねたら私は斷じて争ふ必要はないと答へるであらう。エミールは二匹の犬を煽動して咬み合ひをさせたり、猫に犬を追ひかけたりする様な事さへしない。彼の好むものは平和である。彼は幸福の面影を見るのを喜ぶ。エミールは人の苦しむのを見るに忍びない。然し只同情するばかりで満足する様な人間ではない。エミールが人を助けて幸福にしようと思つたら、きつとさうして見せる。彼の同情は活きたるものである。

私は根氣強くも繰り返して云ふが、青年の教育は唯口先ばかりの教育では無くして實行の教育でなければならぬ。經驗で教へられる事なら、書物では何も教へてはならない。

今やエミールの心意に開發せられたるものは實に偉大である。而してその私情の萌芽を盡く枯らした感情は實に崇高なものである。私の教育法で多くの心の要求を一定の限界に集中さして來た處の經驗の生み出すエミールの判斷力は明瞭で其の理性は實に正確である。彼は自分に劣つた者を、自分と同等の所まで引き上げ、引き上げる事が出来なければ自から彼等と同等に身を引き下げる。正義の眞原則、美の眞模範。一切の道德的關係、秩序に關する凡ての觀念は、エミールの理解力に刻みつけられてゐる。彼は萬事に處して、正義の那邊に存するかを知り而してその原因を知つてゐる。彼は善を生ずるものゝ何たるかを知り、善を妨ぐるものゝ何たるかを知つてゐる。

私が自然の人を知らんとするのは、エミールを野蠻人にして、森の中に送り返す謂では無い。社會生存の渦卷の中に生活して、文明人の偏見や謬説に惑はされない人をつくるのである。彼は己の眼を以て見、己の心を以つて感じ、己れの理性にの



み頼つて如何なる權威にも服しない。エミールは自分の力の及ばぬものには断じて注意を拂はず、理解の出来ないものには決して耳を傾けない。知らぬ時には憚らず知らぬと云ふ。知らないからとて恥とは思はない、やがて彼が宗教上の大問題に心を悩まし初めても、人から云はれてさうするのではなく、自分の知力の必然の發達  
が彼を導くのである。さて如何なる宗教に彼を導くべきかと云ふに、吾々は決して一の宗旨に彼を引込んでほならない。彼は自分で正しいと思つた處を信じなければならぬ。彼は自然に順應はねばならぬ。彼が人目の無い所でも善人たらし、善を行はんとして興味を感じずる様になるのは此の時である、法律に強ひられず、神と吾々との正しい約束を守つて喜ぶのも此の時である。義務の爲には生命をも抛つて喜ぶのも此の時である。此の心を離れては、人々の間に只不義、偽善、虚偽あるばかりである。私は生命のある限り主張するが心の中に神無しとして口には都合よく善を云つてゐる奴は虚偽漢である。大馬鹿者である。

一度は來なければならぬ自然性の眞實に發揮せられる時が來た。人は死ぬべき運命を持つてゐるから各自其の種族を繼續し、世界の秩序を保たんが爲に自己を實現しなければならぬ。各々危機の徴候が見えて來たらば、彼はもう吾々の友人である彼は一個の人である。此の時期に於てどんな教育法を施せばよいかと云ふと、子供の性向を許してやるか拒絶するか、即ち子供の協同者となるか、子供の暴君になるか、兩者その一であるとは人の云ふ處であるが、孰れにしても危険であり且決定するには困難である。で私の考へる處では、自然には、早める事も出來ず、遅める事も出來ぬ一定の制限があると云ふ譯では無いから、私は自然の法則を離れないで、エミールを無邪氣に育て、來た、然るに此の幸福な時期も早終りを告げた。だから今後私のとるべき途は只一つあるばかりである。即ち彼に自己の責任を持たせることである。而して今は凡てを彼に示すべき時である。少くとも怖るべき誤謬に陥らない様に彼を防ぎ、又彼を取り圍んで居る危険をさらけ出して見せる時である。今



まで彼は無智であつたから、巧に導く事が出来たが、今後は自分の智力ちりよくで自ら治めなくてはならぬ。若しエミールが自由に明ら様に其の心を打開けて語る間はまだ危険は迫つては居ないから怖れるに及ばない。けれ共彼が控へ目になり遠慮勝えんりよがちになりおどろした所が見える様になつたら本能はすでに發達して、惡の觀念が己に親しみ初めたのである。かう云ふ時には一刻も猶豫は出来ない。速かに手を入れないと大變な事になる。

青年に發生して來る欲求よくきうは理性と矛盾するものばかりだと思ふは偏狹である。青年をして理性に従はせる力は、欲求そのものの中に存在してゐるのである。熱情を押へるには熱情ねつじやうの力を要する。自然を御する力は常に自然から得來られなければならぬ。私はエミールが其の心に女性の友を要求して居る事を知つてゐる。で、私は今最も適當な一人を探し出してくる。けれ共そんな人は仲々あるものではない。けれ共急しつぱうがず失望しつぱうせずに探さねはならない。きつとエミールに立派な婦人があるに相

違ない。こんな喜ばしい言葉で私はエミールを社會に送り出す。此れ以上に云ふ事はない。之で私は成すべき凡てをすましたのである。

エミールの未來の戀人はソフイイである。ソフイイは優しい愛らしい素朴單純そぼくたんじゆんな女である。エミールは世の輕佻浮薄けいてうふはくなる女の風采ふうさいを厭ふ。彼の理想と誘惑せんとする世の女どもとの間には非常に大きな隔りがある。

聽て私はソフイイを探し初めた。然るに時は來る。エミールが失策してソフイイ以外の女を捉とらへるかも知れない。もしさうなつたら何とも取り返しはつかない。それで吾々は今や巴里に告別しよう。吾々は眞の戀愛と幸福と無邪氣とを求めてこの巴里から遠く離れば離れる程いいのだ。左様なら、我巴里よ！



今は青年期の終の舞臺となつた。凡そ一人なるは宜しくない。エミールは妻を要する。而して其の妻はソフイイである。吾々は先づソフイイが如何なる婦人であるかを知らなければならぬ。さうすればソフイイが何處にゐるか大抵見當がつくのである。然しソフイイが見出されたからとて、まだ話が終るのではないけれども、私はロックの云へる如く、此の若き紳士は今や結婚する爲に、世の多くの女と交際さすべきものとは思はない。何故と云ふに、私はエミールを紳士として教育してゐないからである。

## ソフイイ即ち婦人

エミールが眞の男子であると共にソフイイは眞の婦人でなければならぬ。それで、吾々は生理的にも道德的にも女性と男性との一致と相異とを知らねばならない

さて、男と女とは類に於ては同じであるが性に於ては全然異なつてゐる。此の性の差別はやがて道德的性質の上にも影響を及ぼしてゐる。だから男女の優劣或は平等を論ずるのは愚かな事である。男女はともに其の性質に従つて自然の目的に向ふのが完全な事で、其の異同を比較して優劣を争ふべきものではない。完全な男と完全な女は形に於ても相似るものではない。其の完全は大小多少を以て論ずべきものでない。男女は共に共通の目的を追求するけれども其の行く途は異つてゐる。従つて心の方面にも相異がある。即ち男は活動的で強固であり、女は受動的で弱い。女は温順であり、男は意志と體力とを要する。此の原理が一定すると、女は男を喜ばせる爲のものである事が明かになる。男も女を喜ばせるけれども男の男たる所以は寧ろ其の力である。男は其の強さを自ら喜ぶ。此は愛の法則に先だてる自然の法則である。

右に述べる通り男と女とは、其の性格や體格が違ふから其の教育も亦同じではな



い。自然の示す處に従へば互に協力するが、然しそれは同じ仕事をするに云ふ意味では無い。従つて仕事を指導する趣味も異つてゐる。吾々は今迄自然的男子を教育したが、是れからは此の男にふさはしい女子の教育を考へるのである。ところが、女も亦常に自然の示すが如く教育されねばならない。諸君は女は男の持たぬ缺點を持つてゐると云はれるけれ共、婦人にとつては其の缺點が反つて美德となるのである。若し婦人に其の缺點即ち美德が無かつたら萬事男子は不都合を感じる。

どこまでも男女の能力は違つてゐるけれ共、其の全量は平均してゐる。女は女として優つてゐるが男としては劣つてゐる。だから女は女たる特性をおし立て、行けば立派な事であるが、男の權威を奪はうとするの間違つて了ふ。然し女は全く無知に育てられて只家政の事ばかりして居ればそれでよいと云ふのでは無い。男は女の優しい妙味や愛情を棄てる事は出来ない。男は妻を奴婢同様にして其の智性感性を妨ぐるものでは無い。夫は其の妻を人形の様にして満足するものでは無い。殊に

婦人に温順精確な心を興へた自然は女をさうするものとは命じてゐない。自然は婦人に自ら考へ、自ら判断し、愛し、知識を得、身體の様に心をも養ふことを命じてゐる女は様々の事を心得べきであるが、只知つてよいもの計を學ぶべきである。女には其の獨特の職分から考へても、其の性向を觀察しても、又其の義務を思つても婦人相當の教育がある。即ち女の教育は男子に關係が無ければならぬ。男を喜ばせたり、男に實益を興へたり、男に愛せられたり、敬せられたり、男の幼きを教育したり、男の成長するのを注意したり、男と相談し、男を慰め、人生を美はしく喜ばしくするこそ女の務である。此の原則を離れば離れる程、女は女の目的に遠ざかつて、其の結果は女自身の幸福にもならず、又男の幸福にもならない。

女の兒は産れて、幾年も経たない頃から着物の美を愛する。只美しいのも好むばかりでなく、美しいと思はれようとする。斯う云ふ心の起つた事は其のいぢらしい風采で分る。此の原因は何から來てもよいが、女にとつて斯う云ふ考が起るのはよ



い事で、よく之を教育する事は大切な事である。身體は心よりも發達はつたつが早いから、第一になすべき教育は身體上の教育である。男には體力を發達させ、女には優美いっぴな姿を發達させなければならぬ。

女が餘り弱いと、男も弱くなる。女は男程に強くなくてもよいが、強い男を生むだけの強さは持つてゐなければならぬ。此の點になると粗食はしても、様々な自由な運動をして、野外や庭内ていだいで走り廻つて遊ぶ事の出来る寺院學校や、寄宿學校は家庭よりも遙かに勝つて居る。

男の兒と女の兒には、共通の遊戯があるが又違つた個人的趣味こじんてきしゆみをも持つてゐる。男の兒は運動や、騒ぎが好きで、太鼓を叩いたり、獨樂を廻したり、車を轉ばすが、女の兒は鏡や玉や布片きれや、特に人形を好む。人形は女兒特有の玩具おもちゃで、之は即ち女兒の本領的傾向が、婦人獨得の仕事を示すのである。人を喜ばせる術は個人の裝飾と云ふ身體上の基礎を有するもので、此の身體を飾る術は、子供のみ練習する事が

出来るものである。

準備さへ出来れば、裁縫ししゅうも刺繡ししゅうも、レース編も自ら出来る様になる。掛氈かけせんどう條は子供にとつてはさう容易では無い。子供は室内の裝飾を喜ぶ程に發達してゐないからそんなことは大人の判斷にまかせる。掛氈條は大人の婦人のする事で、女の兒はまだ喜んでやらない。

女の兒には、理わけを云つて始終仕事をさせて置かねばならぬ。怠惰たいだと我儘わがままとは女の兒にとつて大變危険な事であつて、一度萌したら仲々治なほらない。女の兒は事々に注意深く、且勤勉でなくてはならぬが、此れ計でなく、小さい時から束縛の下に置かなければならない。束縛そくばくは女にとつて免るべからざる運命で、之から離れようとすれば、一層激しい苦に遇ふのである。女は一生涯えん厳しい一種の束縛、即ち禮法に従はなければならぬから、早くから此の束縛に慣れて、何事も別に束縛と思はない様に仕向けねばならぬ。又他人の意志に従ふ爲に、自分勝手な心を抑へ附ける習慣を



養はなくてはならぬ。現代の人は馬鹿らしい程無定見だから、淑女の生涯は克己どころか、全く之と正反對な事ばかりして、男子の上に大なる弊害をぶつかけてゐる。

斯う云ふ理で、女には自由が少ないし、又なかるべき筈である。然るに女は自由を許されると之を濫用する。女の兒は何事も極端に走つて、遊樂に耽る事は男の兒よりも甚だしい。之は女兒獨特の悪い性質だから矯正しなければならぬ。我が儘な彼等は、今日心に思ふてゐる事も明日になると早心掛けなくなる。女の兒に興味の定まらないのは、強い感情と其の弊害等しく、其の源も同じである。女の兒に快活、喜悅、物騒ぎ、遊戯を禁じてはならないが、一事から他事へ直ぐ氣の移つて行く事ゝ嚴禁しなければならぬ。一生涯を通じて、女には束縛を脱したと云ふ考を起さしてはならぬ。束縛に慣れると、男には一生缺くべからざる從順の心が出る。女の優しくして居るのは男の爲ではなく自分の爲である。男があまり優しければ女は我が儘になる。けれ共夫たるものに獸類根性の無い以上は妻の柔和は、よく夫を改め

させ早晚男に打ち勝つ事が出来る。

女は流暢な舌を持つて居る。女は男よりも早くから、なだらかに喜ばしげに語るだから女は饒舌り過ぎると云つて咎められるが、私は決して咎めず、反つて奨めてやる女は口も目も動かして語る。男は知つてゐる處を語るが、女は喜ばしい事を語る。女は語るに知識を以てし、男は語るに趣味を以てする。男は其の題目を有益な事柄にとり男は喜ばしい事に題目をとる。然も男女の談話に於ける唯一の共通點は語る事の眞理たるべき事である。

女は輿論に支配され、其の宗教は權威に支配される。で娘は母の宗教に従ひ、妻は夫の宗教に従はなければならぬ。例へ其の宗教が違つて居てもよい。母や娘が自然の法則に従ふて己を捧ぐる順良の徳は、神の前に誤の罪を拭ひ去るに足る。若し女が自ら判断に苦しむならば夫の判断に従はなければならぬ。

女は信仰箇條を自ら造り出す事が出来ないから、之を良心や理性の範圍内に保つ



ことは出来ない。様々な外部の感化に依つて、此處から彼處へと追ひ廻され、眞理のほとりに浮沈して、眞理其ものには達し得ない事が多い。而して何事にも極端に走つて、徳と信仰とを調和する事が出来ない。けれ共それは中庸を得ない女性の罪ばかりではなく、男性の威嚴の持ち方のよく無いのにも原因する。道徳を弛めると宗教を輕侮し、悔悛の怖ろしさには、悔悛其のものが暴君であるかの様に思ふ。これが宗教に對して餘り熱心になつたり、酷く冷淡になつたりする所以である。それで女には信仰の理由を説いて聞かせるよりも、信ずるものを明かに話して聞かせるのが肝要である。

男子に義務の知識を與へる理性はそんなに複雑なものではない。特に女をして其の義務を知らしめる理性は、頗る單純なものである。女が夫に對する從順と眞實、又吾が兒に對する溫和と注意とは女の情から起る自然のものである。婦人にして其の本性の亡びない限りは、誠實を保つて内心の導きに從ひ、自分の義務を認めずに

は居られない。

世間は女の書物である。之を讀んで悪むと思つたら其は女の誤であり情熱に目眩まされたのである。私は世の所謂賢母とも云ふべきものが、其の娘を田舎から巴里へ連れて來て、危険な墮落した都の様を見せてゐるのを見ると黙つてゐられないけれ共若し娘がよい教育を受けて居つたら、這麼汚ない都の様を見ても更に害にはならない。正しいものに對する趣味や、感じや、愛情のある人は世の弊風に誘惑されないのである。現代の様に墮落した世の中にも、まだ虚飾といふ偶像の前に膝を屈せず、虚榮の崇拜を賤しむ立派な婦人が何人も居るから、吾々はまだ絶望しない。人に對して高ぶる女は愚かな女で、造り飾らない女は賢い女である。

ソフイイは血統がよい。又良い性質を具へてゐる。其の心は正格と云ふよりは深酷である。其の氣質は爽かで執こくない。其の姿は質素で氣持がよい。ソフイイの缺いてゐるよい性質を他の女が持つてゐる事はあるけれ共、幸福な品性を造るにソ



ソフィイ程よい性質を持つたものはない。ソフィイは美人ではない。けれ共ソフィイの前に来る男はソフィイより以上に美しい女を思はない。ソフィイは見れば見る程美しくなる。ソフィイは人の心を眩くらまさないけれ共、よく人を迷はす。で何故さうであるかは誰も知らない。ソフィイは華はなやかな服装を悪んで、單純で上品な着物を好んで着る。ソフィイは何麼どんない色が流行するかは知らないけれ共自分に適當なものを好んで着る。ソフィイは自分のなまめかしさを隠してゐるけれ共、何となく奥宋しい。

ソフィイの心は華美ではないが悦ばしい。深刻ではないが健氣である。とり出でゝ人と變つて居ないから人から殊更に噂さるゝ事が無い。ソフィイは自分に話しかける人々を喜ばす心術を知つてゐる。ソフィイは生れつきお轉婆てんばである。子供の時は放任されてゐたけれ共、少しづゝ其そゝつかしいのを矯正して來た。でもソフィイは年頃になる迄には忝々しくしとやかになつた。『あらッ』とソフィイは自分の輕はづみな調子に直ぐと氣が附くと黙つて顔を赤らめる。其の様子は如何にも可愛ら

しい

ソフィイの宗教は理に適つて、單純である。ソフィイは自分の一生涯は神に捧けたもので只善をなすべきものである事を知つてゐる。ソフィイは徳を愛する。しかも此の愛は、ソフィイの全行爲を支配する熱情となつた。ソフィイは眞の幸福に至る唯一の途は美德であると思つてゐる。ソフィイは死ぬるまで貞淑溫良ていしゆくおんりやうである。ソフィイは心冷かに虚榮心きよせいしんを以つて人に媚びたり、喜悅よりは華侈くわしを好み、快樂よりは娛樂を求むる魔力のあるフランス女では無い。ソフィイは明日をも待たずに移行く世の果敢なき譽を得るよりも、何時迄も變らない一人の男子を喜ばせたいと思つてゐる。

ソフィイは男女の權利義務をも教へられてゐる。ソフィイは男子の缺點も女子の罪惡も知つてゐる。又男子の善性美德ぜんせいびとくをも知つてゐる。ソフィイの理想として居る女程氣高い美德の女は誰も描く事は出來ないが、ソフィイは又、美德の男子、眞に